371-R76-2ウ
1200500740587

始

371 F53
R76
(2)

岩波文庫
433—434

エミイル

第二篇

ルソオ著
平林初之輔譯

岩波書店

第二篇

今や吾々は人生の第二期に入つた。そして幼年時代は正しくこゝで終つたのだ。何故かと言へば幼年といふ言葉と少年といふ言葉とは同意語ではないからだ。前者は後者の中に含まれて居るもので「話の出來ない者」といふ意味なのだ。だからローマの歴史家ヴァレリウス・マキシムスの文集に話の出來ない少年といふ言葉が使つてあるのだ。(註一) しかし私はフランス語の習慣に從つて、此の子供がもう少し成長して別の名前がつく迄は矢張り子供と呼び續けてゆく。

(註一) 第一卷第六章

二

子供たちは物を言ひ初めると、以前程泣かなくなる。この進歩は當然のことだ。これは一つの言語が他のそれと交替したのだ。言葉で痛いといふことが出來るのに何うして泣く必要があらう。尤も痛さが劇しくて言葉ではそれを發表することが出來ない場合は別だ。若し子供が此の時になつてもまだ相變らず泣くとすれば、それは子供の側についてゐる人の責任である。エミイルは一度「痛い」と言ふことが出來るやうになつたら、それ以後は餘程劇しい痛みを與へなければ彼を泣かせることは出來ないだらう。

若し弱い、感じ易い子供で、生れつき何でもないのに泣き出すやうな子供だと、私は思ふ存分にその子供を泣き放題にさせて、涙が涸れてしまふまで放任しておく。子供が泣いてゐる間は何時までたつても子供の傍へ寄りつかないで、泣き歇むや否やすぐに飛んで行くやうにする。さうすればやがて此の子供は私を呼びたい時には溫和なしくしてゐるか、さもなければ一聲だけしか

泣かなくなるだらう。子供は自分の信號が相手に與へる感覺的效果によつて、その信號の意味を判斷するのであつて、それ以外には彼等にとつて信號には何の約束もないのである。何んなに痛いことがあつても獨りでゐる時は子供は滅多に泣かない。少くとも誰かゞ聞いて呉れるといふ望みがなければ泣かない。

若し子供が轉んだり、頭を打つて瘤をこさへたり、鼻血を出したり、指を怪我したりした時には、私は周章てゝ大急ぎで傍へ飛んで行くかはりに、平氣でじつとしてゐる。少くも暫くはじつとしてゐる。一旦痛いことをしてしまつた以上、子供はそれに堪へなければならぬ。私が大騒ぎするのは子供を怖がらせ、その痛みを劇しくさせるばかりである。實際、子供が怪我をした時、子供を苦しめるのは傷そのものよりも恐怖の方が大きいのだ。私はせめて此の恐怖を無くしてやらうと思ふのだ。何となれば子供は恐らく私の判斷を見て彼の不幸の程度を判斷するに相違ない。

エミイル

若し私が周章てゝ駆けつけて、彼を慰めたり、憐んだりすると、彼はもう駄目だと考へる。ところが私が平氣に構へてゐると、彼もやがて平氣になつて、傷は痛みさへ止まればなほつてしまつたものだと思ふやうになる。子供は此の時分に始めて勇氣の教訓を覺えて來るので、少しの痛みに怖れずに堪へることが出來れば、漸次大きな苦痛にも堪へることが出來るやうになる。

私はエミイルに怪我をさせないやうに注意することはしない。それどころか、彼が一度も怪我をせずに、まるで苦痛といふものを知らずに成長くなるやうなことがあると大變困るのだ。苦しむといふことは先づ第一に子供が學ばねばならぬことで、又子供がこれを知ることは他日のために最も必要なことである。子供が小さく且つ弱いのは此のやうな重大な教訓を危險無しに知るために外ならぬと私は思ふ。子供は倒れても脚を傷けるやうなことはない。杖で自分の腕を打つても怪我をするやうなことはない。鋭い双物を握つても、大怪我をする程強く握りしめることは出來ない。子供を自由に放任して置いた爲めに子供が死んだり、不具になつたり、大怪我をしたりしたといふ話を私はまだ聞かない。尤も、不注意に子供を高い所に置いたり、或は獨りで火の傍においたり、手の屆く所に危い道具を置いたりすれば話は別だ。子供の苦痛を防ぐ爲めに、頭から足の爪先まで色々な機械で固めて、成長の後、勇氣も經驗もなく、一寸突いても死ぬやうに感じ、一滴でも自分の血を見ると氣を失つてしまふやうにする位馬鹿げた話はない。

吾々は何でもかでも教へたがる性癖をもつてゐるので、子供が獨りで學んだ方がずつといゝやうなことばかりを常に子供に教へる。そして吾々でなければ教へることの出來ないことを彼等に教へることは忘れてしまつてゐる。子供に歩き方を教へる位馬鹿げたことが一體世の中にあらうか？　一體乳母が教へてやらなければ成長くなつても歩くことの出來ない子供を見た人があるだらうか？　それとは反對に幼い時になまじつかな歩き方を教はつた爲め一生滿足な歩き方の出來ない人がどんなに多くあることだらう！

第二篇

エミイルには頭巾を着せたり乳母車や習歩車に乘せたり、紐をつけてやつたりしてはならぬ。少くも子供が兩の足を代る代る前へ出すことが出來るやうになつたら石を敷いた往來へ出た時だけ身體を支へてやつて、往來を横ぎる時に急いで連れて行つてやるだけに止めるやうにせねばならぬ。（註二）室内の息の詰るやうな空氣の中に子供を放つて置かずに毎日牧場の中へ連れて行くがいゝ。さうして走り廻らせ、飛び廻らせて、一日の内に百度も轉ばせるがいゝ。度々轉ぶ程いいのである。その中には直ぐに獨りで起き上ることをおぼえて來る。何んなに怪我をしても自由の喜びでそれを償ふことが出來る。私のエミイルは度々怪我をするかも知れぬが、その代り彼は

常に快活である。諸君の子供はあまり怪我をしないかも知れぬが、その代り何時も元氣が無く、ぼんやりと沈んでゐる。果してその方がいゝかどうかは甚だ疑問だと私は思ふ。

（註二）幼い時に長い間紐で歩かせられた人の歩行振り位滑稽な、危かしいものは又とない。此の考へは、正當なものであるために取るに足らないものだと考へられてゐるものゝ一つである。而してこれは多くの意味に於いて正當である。

エミイル

今一段發育すると、子供はだんだん泣く必要が少なくなる、それは卽ち體力の發育のためだ。子供は獨立する事が出來るやうになるにつれて、他人に縋る必要が少くなる。體力が發達するにつれてこれを支配する知識も發達して來る。此の子供の發育の第二の段階に於いて眞の個人生活が初まり、はじめて自覺が生じて來る。記憶が彼の生存の全瞬間に自意識を分布し、彼は眞に一貫した完全な人格を有つ人となり、從つて幸福と不幸とを辨へて來る。是に於いてはじめて彼を一個の道德的存在と考へることが必要となつて來るのである。

吾々は略ぼ人生の長さがせいぜい何れ位かといふ見當がついて居り、一年毎にその終りに近附く確度を知つてゐる。けれども吾々各個人の壽命程不確かなものは無い。最大限度の壽命まで生き延びる人は極く稀である。人生の最大の危機はその初期にある。幼ければ幼い程生きる希望は少いわけだ。生れた子供の中で青春時代まで生き殘るものはせいぜい半分位である。だから諸君の子供も大人になるまで生き延びないかも知れないのである。

それ故に不確かな未來の爲めに現在を犧牲にし、あらゆる種類の鎖で子供を束縛し、決して享樂することが出來ないと思はねばならぬやうなあてにならぬ遠い將來の幸福の爲めに、先づ幼年時代を不幸にするやうな無茶な教育をするといふのは一體どういふものだらうか？　假令此の教育の目的は一應尤もだと假定しても、堪へ難い軛を受け、將來役に立つか何うかはつきり判りも

しないのに、囚人のやうに堪へず勞役を課せられて居る憐むべき不幸な子供を見て、何うして憤激の念を抑へることが出來ようぞ！　可惜樂しかるべき時代は涙と刑罰と脅威と酷使とのうちに過ぎてしまふのである。吾々は子供の爲めにとてかはいさうな子供を苛責してゐる。そしてこの悲慘な境遇の中で子供を引攫つてゆく死は實際は吾々が呼び寄せてゐるのだといふことに氣がつかないのだ。父親や教師があまり世話を燒き過ぎたゝめにその犧牲となつて倒れた子供が如何に多くあるかを何人が知つてゐよう？　このやうな慘酷から免れた人は幸ひである。彼等が父親や教師から受けた苦しみからひき出す唯一の利益は人生に未練を殘さずに死ぬるといふことだけだ。何となれば彼等は苦痛の他には人生を知らなかつたのだから。

人々よ親切を專らとせよ、これが諸君の第一の義務である。あらゆる階級の人に親切であれ、あらゆる年齡の人に親切であれ、苟くも人類に緣のあるものには凡て親切であれ。親切の外に諸君の爲めになる知識がどこにあるか？　子供を愛せよ、子供の遊び、娛樂、愛すべき本能を大目に見るやうにせよ。唇邊には常に笑が浮び、心は常に平和に滿されてゐた子供の時代の過ぎ去つたことを時々振り返つて悔いなかつた者が諸君の中にあるか？　何故に諸君は束の間にして過ぎ去つて行く僅かの間の樂しみを此の無邪氣な子供から奪はうとするのだ？　彼等が惜し氣も無く無駄使ひすることの出來ない尊い天賦の財產を何故奪はうとするのだ？　諸君にも二度と歸つて來ないと同じやうに、子供にも再び歸つて來ない幼年時代を、諸君は何故に憂ひと悲しみとで滿させようとするのだ？　滿天下の父親達よ、卿等は死が何時卿等の子供を待ち受けてゐるかといふことがわかるか？　自然が子供に與へた束の間の時間を、子供から奪ひ取つて、他日の悔を貽さないやうにせよ。子供に人生の快樂がわかるやうになつたら、直ぐにそれを享樂させてやるが

よい、何時神が彼等を招いても、彼等が人生の快味を知らずに死んで行くやうなことがないやうにしてやるがよい。

私の説に對してはもとより反對の聲が轟々として起つて來る！　私の耳へは遠くから絶えず吾々を吾々の外へ追ひ出す學者の主張が聞える。彼等は常に現在を眼中に置かないで、進んで行けば行くだけ次第に先へ逃げてゆく未來ばかりを絶え間なく追及して、斷えず吾々を追ひ立て、現在吾々の居ない所へ吾々をつれて行くために、吾々が將來行けさうもない所へ吾々をつれて行くのである。

かう言へば諸君は答へるだらう。人間の惡い性癖を矯正すべき時は子供の内だ、吾々は大人になつてからの苦痛を免れる爲めに、苦痛をそれ程苦痛と思はぬ子供の内に澤山の苦痛を忍ばねばならぬのだと。けれども諸君はそんな風に萬端の手配を決めておいても、それが諸君の意のまゝになるか否かを何うして知るか？　諸君が子供の纖弱い心の中へ詰め込んだ立派な教訓が、悉く、將來子供の爲めにならないで子供に害を與へるやうなことになりはしないかどうかを如何にして知るか？　諸君が矢鱈に子供に悲みを與へることによつて、何か諸君の手數が省けるといふことを何人が諸君に保證するか。何故諸君は現在苦痛を受けることが將來の苦痛を輕減するといふ確實なあてもなしに、子供が現在脊負ひ切れないやうな苦痛を彼に與へるのだ？　おまけに諸君は子供の惡い性癖を矯正してやるのだと主張してゐるが、此の性癖は自然が子供に與へたものと言ふよりも、寧ろ諸君の不注意から生じたものではないといふことを如何にして私に説明するか？將來いつか子供が幸福になるかも知れない位のあやふやな希望の下に、現在子供に苦痛を與へるといふのは、子供にとつて何たる不幸なおせつかいだらう！　若し此の凡庸な考へをもつてゐる

人が、放縱と自由とをごつちやにし、幸福にされた子供と甘やかされた子供とをごつちやにしてゐるのなら、吾々は彼等にその區別を教へてやらねばならぬ。

馬鹿げた空想に走るのを防ぐため、吾々は吾々の境遇に相應したものが何であるかを忘れないやうにせねばならぬ。萬物の秩序の中に人類の占むべき位置は定つてゐる。これと同じく人間生活の秩序の中に子供の占むべき位置は定つてゐるのだ。故に大人は大人として扱ひ、子供は子供として扱はなければならぬ。各人に各々の位置をあてがつてその位置におき、人間の素質に應じてその情慾を取締ること、これが人間を幸福にする爲めに吾々に出來ることの一切である。その他のことは吾々の力では如何ともすることの出來ない、吾々に無關係の原因によるものである。

吾々は絶對的幸福或は絶對的不幸なるものゝ何たるやを知らない。人間生活に於いては凡てのものが混合狀態にある。吾々は何等の純粋な感情をも味ふことは出來ない。吾々は同一の狀態には一瞬間だけしか留まることが出來ない。吾々の心中の感情は、吾々の肉體の變化と同じく不斷に流轉してゐるのだ。幸福も不幸も皆吾々に共通のものなのだ。たゞ各人によりて割合が異ふだけである。最も幸福な人は苦痛を最も少く受けてゐる人で、最も不幸な人は快樂を最も少く感じてゐる人である。たゞ凡ての人をおしなべて言へば差引き快樂よりも苦痛が多いのである。故に此の世に於ける人間の幸福とは消極的の狀態に過ぎない。それは其の人の受けて居る苦痛が少いといふことによつて計らなければならぬ。

凡そ苦痛の感情は、それから免れたいといふ欲望と離すことの出來ないものであり、快樂の觀念はそれを享樂したいといふ欲望と離すことの出來ないものである。凡ての欲望は缺乏の感じについで起る。そして凡ての缺乏感は苦痛である。故に欲望とこれを滿す力との不均衡から吾々の

不幸は生ずるものである。欲望とこれを滿す能力との平均してゐる人があるとすれば、その人こそ絶對的に幸福な人と言へるだらう。

然らば、人間の智慧とは抑も何であるか？　換言せば眞の幸福に至る道とは何であるか？　これは吾々の欲望を減らすことでないことは明白である。何となれば若し欲望が吾々の能力以下となれば、吾々の能力の一部は遊んでゐて、吾々は吾々の全存在を樂しませることが出來なくなる。又これは吾々の能力を擴大することでもない。何となれば若しそれと同時に吾々の欲望が一層大きく擴大して行つた日には、吾々は益々苦痛を感ずるばかりだからである。眞の幸福に至る道は左樣なことではなくて、能力を超過せる餘分の欲望を減らし、力と意志とを完全に平均させることである。その時こそ初めて凡ての力が殘りなく實行に移され、心は平和となり、人は己にふさはしい位置に置かれることゝなるのである。

凡てのものを最も善いやうに取り計つて呉れる自然は、最初人間を斯樣な狀態に置いてくれたのである。自然は先づ最初には人間に自己保存の爲めに必要なだけの欲望と、それを充たすに足るだけの能力としか與へない。それ以外のものは凡て、必要に應じて自づと發育してゆくやうに豫備として心の奥底に藏つておいてくれる。能力と欲望との平均が保たれてゐて人間が不幸を感じないのは、此の自然の懷から出た時ばかりだ。心の奥底に藏はれてあるこの能力が活動し初めるや否や、凡ての能力の中で最も活潑な想像力が眼醒めて、他の能力を凌駕して來る。善たるど惡たるとを問はず、吾々の力に可能なる範圍を擴大し、その結果欲望を滿足させたいとの希望に依て欲望を刺戟し、これを助長させるものは想像力である。だが、一見すぐ手の下にあるやうに見える物も、これを取らうとするが早いかすぐ逃げてしまふ。確かに攫んだと思ふと、すぐに形

を變へたり、或はずつと前方に見えたりする。吾々は既に通つて來た國は最早や見ないものだから、そんなものは無視し、まだ踏んで見ない國の方は斷えず大きく擴がつてゆく。斯くして吾々は目的地へ達しない內にへとへとになり、快樂に近づけば近づく程、幸福は吾々から遠ざかつてゆくのである。

これに反して、人が自然の境遇から離れずにゐれば居る程、能力と欲望との差は少くなり、從つて彼は幸福に近づいて來る。彼は凡ての物を奪はれてゐるやうに見える時でも、さうでない時でも不幸の程度はその爲めに決して變らない。何となれば物が無いから不幸になるのではなくて、物が欲しいと感ずるからこそ不幸になるのだからだ。

現實の世界には限界があるが、空想の世界は無限である。吾々は前者を擴げることは出來ないから、後者を制限しなければならぬ。何となれば、吾々を眞に不幸にするところの一切の苦痛は、現實の世界と空想の世界との間の相違のみから生れるものだからである。身體の力と健康と良心の滿足とを除き去つてしまへば、あとの一切の此の世の幸福は感情次第だ。身體の苦痛と良心の苛責とを除けば一切の不幸は空想的のものだ。そんな理窟はわかり切つた平凡なことだといふ人があるかも知れない。それは私も認める。しかしそれを實地に應用することは決して平凡なことではない。而して吾々が今論じてゐるのは此の實地の問題だけなのだ。

世人は人間は弱いものだと言ふが、此の言葉は一體何を意味するのであるか？　此の弱いといふ言葉は相對的な言葉である。此の言葉が適用されるものについて相對的な言葉である。昆虫でも地虫でも、何でも欲望よりも能力があり餘つてゐるものは强者である。これに反して能力よりも欲望の方が大きいものは、象でも、獅子でも、征服者でも、英雄でも、神でも皆弱者である。

自分の本分を忘れて反抗した天使は、自分の分に從つて平和に生きてゐる幸福な人間よりも弱者であつた。人は自己の境遇に滿足してゐる時は甚だ強く、人間以上のものたらんと欲する時は甚だ弱くなる。故に諸君は能力を擴大すれば實力も增して來ると想像してはならぬ。事實はその反對で、若し諸君の誇りが實力以上に大きくなると實力は減つて來るのだ。吾々は吾々の力で出來る範圍の中心に留つてゐる範圍を限定して、昆虫がその巢の眞中にゐるやうに、吾々の力で出來る範圍の中心に留つてゐよう。さうすれば常に吾々自身に滿足して、決して吾々の弱さを嘆かなくなるだらう。何となれば吾々は決して弱さを感じないだらうから。

凡ての動物は丁度自己を保存するに必要なだけの能力をもつ。それ以上の能力をもつてゐるのは人間ばかりだ。此の餘分の能力が人間を不幸にするとは如何にも不思議ではないか。何の國に於いても、人間の腕でつくるものは生計の必需品を超過してゐる。若し人間が此の餘分の物を度外視し得る程賢明であつたなら、彼は多く有ち過ぎるといふことがないから、常に必要なものに不足はしない筈だ。ファヴォランは言つた『大なる缺乏は大なる富から生ずる、欲しいと思ふ物を手に入れる最上の方法は有つてゐる物を捨てることである場合がよくある』と。(註三) 吾々は吾々の幸福を增進する爲めに働いて、却つて折角の幸福を不幸に變へてしまふのだ。生きることだけしか欲しない人は皆幸福に生きる。從つて正直に生きる。それは、惡いことをしても彼にとつては何の利するところも無いからだ。

(註三) Nort. attic., 第九卷第八章

若し吾々が不死であつたなら、吾々は非常に不幸なものであつたらう。死ぬことは辛いに相違ない。しかしながら、人間はいつまでも生きてゐるものではなくて、いつか此の世の樣々の苦痛

が終つて、より良き生活が初まるといふことを希望してゐるのは樂しいことである。若し吾々に地上に於ける不死の生命をやらうと言ふものがあるとしても、誰が此のやうな忌はしい贈物を喜んで受けよう。(註四) そんなことになつたら、運命の冷酷と人間の不正とをつぐなふべき如何なる手段、如何なる希望、如何なる慰安が吾々にのこされるか? 無知の人は少しも先を見ないから、生命の價値を解せず、これを失ふことを惧れない。聰明な人は生命よりも一層貴重なものを認めて、これを生命以上に重んずる。半知半解の似而非學者のみが、吾々に死について考へさせて、死以上のものをさとらしめず、現世の生活を愈々益々不幸にするのだ。智者にとつては何うせ死ぬにきまつてゐるといふことは、それだけ生の苦痛を忍ばせる理由としかならない。若し吾々が一度は必ず死ぬものであるといふことを知らなかつたら、生命を維持してゆくなどといふことは到に合はない仕事だ。

(註四) もとよりこゝで私が云ふのは思慮ある人のことで、凡ての人をさしてゐるのではない。

吾々の精神上の疾患は凡べて輿論の賜物だ。たゞ一つ罪惡だけは例外で、これは吾々自身に責任がある。吾々の肉體上の疾患は自滅するか吾々を斃すか何方かだ。肉體の疾患を救治するものは時か死かである。けれども吾々は苦痛に堪へることが出來なければ出來ない程苦痛を感ずることが大きい。そして吾々は病氣の苦痛を忍んでゐればそれ程苦しまなくともいゝのを、これを癒さうと焦慮するので餘計に苦しむ。自然に從つて生きよ、苦痛を忍べよ、醫師を遠ざけよ。人間は所詮死を避けることは出來ない。けれども一度死ねばすむ。然るに、醫師は毎日病人に死を想像させる。彼等の虛僞の醫術は、病人の壽命を延ばす代りに、病人の樂しみを奪ひ取るのだ。私は、醫術が人間に何れだけ眞の貢獻をしたかをいつも疑問としてゐる。醫師にかゝらねば死ぬべ

き病人を醫師が癒したのも幾らかあることは眞實だ。だが、醫師の手にかけなければもつと長生きしたであらう人間を醫師が殺した例は幾百萬あるか知れない。賢明な人は、この樣な惡い富籤をひかぬがよい。病氣を忍ぶもいゝ、死ぬもいゝ、或は快癒するもいゝ。けれども就中最後まで生を味ふことが何よりだ。

人間のやることは萬事が馬鹿々々しさと矛盾に滿ちて居る。吾々は吾々の生命の價値がなくなつて來るにつれてそれを惜しむ。老人は青年よりも生命を惜しがる。彼等は人生を樂しむ爲めの準備にそれ迄の月日を費してしまつたのだから、死にたくないのだ。六十歳になつても未だ生活をはじめないのだから死ぬのは殘念で仕方がないのだ。人間は自己の生命を非常に愛して保存しようとするものだと考へられてゐる。そしてそれは眞實である。だが吾々が今日感じてゐる此の自愛は大部分人爲的のものであるといふことは知らない。自然のまゝだと人は生命を保存する手段が自分の力で及ぶ間だけしか生命を保存しようとしない。此の手段が自分の力で及ばなくなると、彼は無益に苦しまないで平然として死んでゆく。諦らめの根本原則を吾々に教へるものは自然である。野蠻人は、野獸と同じやうに、死に對してあまり强く逆らはず、殆んど不平をこぼさずにそれを忍ぶ。此の自然の法則が破られると、理性から生れる別の法則がつくられる。しかし、大抵の人はこれに氣が附かない。而して此の人爲的の諦らめは、自然の諦らめのやうに十分なものでもなければ完全なものでもない。

用心（プレヴォアイヤンス）！　此の用心といふ奴は、斷えず吾々を先へ先へとつれてゆき、屢々吾々が到底達する見込のないところまで吾々をつれてゆく。吾々のあらゆる不幸の眞の源はこゝにあるのだ。人間のやうな短い生命の生物が、常に、減多に行き着くことの出來ない遠い未來のことばかり考へて、確實に彼の手に握つてゐる現在を等閑視するのはまるで狂氣の沙汰ではないか？　此の狂氣の沙汰は年と共に增し、且つ年をとつて來ると疑ひ深く、用心深く、慾深かになつて、百年もたつてから贅澤が出來れば現在必要なものでも節約すると云ふ風になるから、益々禍ひである。斯くして吾々は、凡ての物に執着し、凡てのものにしがみ附き、時間、空間、人間、事物、現在あるもの、今後あるべきものが凡て吾々をやきもきさせる。現實の吾々は吾々自身の一小部分に過ぎなくなる。吾々は言はゞ地球の全表面に擴がり、此の大きな表面全體に亙つて苦痛を感ずるやうになる。四方八方で傷けられゝば、吾々の痛みがそれだけ增すことは怪むに足りない。世には、まだ自分で見たこともない國土を失つたことを嘆いてゐる王侯が如何に多いことだらう、西インド諸島に手をふれただけでパリで泣く商人が如何に多いことだらう！

斯くの如く人々を現實の彼等自身から引き離して遠くまでつれてゆくのは自然であらうか？　各人が他人の運命を見て始めて彼自身の運命を知り、而かも時としては誰よりも一番最後に自己の運命を知ること、自己については何も知らない先に、幸福に、或は不幸に死んでゆくことが自然の意志であらうか？　こゝに元氣のよい、快活な、强壯な、達者な一人の男がゐるとする。此の人に會ふと私は嬉しくなる、彼の眼は滿足と幸福を告げてゐる、彼は幸福の權化だ。そこへ郵便局から一通の手紙が來る。此の幸福な男はそれを眺める。手紙の宛名は彼自身だ。彼はそれを開封する。それを讀む。見る見る彼の樣子が變つて來る。顏色は蒼ざめて來る。彼は氣絶して卒倒する。吾に返ると彼は泣く、慟哭する、呻吟する。頭髮をかきむしる。彼の泣聲は四邊の空氣に反響する。馬鹿な、此の紙片が一體汝に何んな害を與へたといふのか？　汝の身體から手足でもぎとつていつたと言ふのか？　汝にどんな罪を犯させたと言ふのだ？　一體汝をこんなに悲

しませるやうな何んな變化を汝に及ぼしたと言ふのだ？

若し此の手紙が途中で迷つて着かなかつたら、若し或る慈悲深い手がこれを火の中へ投じたら、此の同時に幸福であり不幸である人の運命が何んなものであつたかゞ見物だ。彼れは實際不幸なのだと諸君は言ふだらう。成る程その通りである。しかし彼はそれに氣が附かなかつた。それでは彼は何處にゐたのか？　彼の幸福は空想的な幸福だつたのだ。私はそれを認める、健康や快活や幸福や精神の滿足は幻影に過ぎないと。吾々は最早や本來我々の居るべき所にはゐなくて、吾々のゐべきでない所に出てゐる。吾々の生活を生き甲斐あるものにする凡てのものをもつてゐながら、そんなに死を恐れて生きることが、何の益があるのだ。（註五）

（註五）Major par mortalium de natura maligniitate conqueitur quod in exiguum aevi gigniimur....non exiguum temporis habemus, sed multum perdimus. Satis longa vita est, si tota bene collocaretur... Praecipitat quisque vitam suam, et futuri desiderio laborat praesentium Tædio. (senec., de Brev. vit.,ca VII)「吾々の感情は吾々を吾々の彼方へつれてゆく、吾々は決して吾々のゐるべき所にゐないで、常に吾々の彼方にゐる。恐怖、欲望、希望等は、吾々を未來に飛躍させ、現在あるものについての吾々の、意見、考慮を奪つて、未來のもの、即ち、吾々がもうゐなくなつた時のことについて思はせる。」（モンテエニユ第一卷、第三章）

おゝ人よ！　汝の生活を汝自身の内に局限せよ。さうすれば汝はも早や不幸でなくなるだらう。自然が萬象の秩序の中で汝にあてがつた場所に止つてをれ、さうすれば何物も汝を其處から立ち退かせることはできないだらう。峻嚴な必然の法則に違戻するな。そして此の法則に反抗しようとして、天から授かつた力を浪費してはならぬ。天が汝に色々の力を與へたのは、汝の生命を擴げたり伸ばしたりする爲めでは決してないのだ。たゞ天が欲するだけ、而して欲する間だけ汝の

生命を保存せんが爲めなのだ。汝の自由や汝の力は汝の自然の力の及ぶ範圍までしか屆かないのだ。その外へ出ることは出來ないのだ。それ以外に出ると、凡てが皆拘束だ、幻影だ、迷はしだ。他人を支配しても、輿論に捉はれてゐては他人に使はれてゐると同じだ。何故かといふと、汝は他人の偏見によつて他人を支配してゐるのだから、つまり汝が支配してゐる人々の偏見に左右されてゐることになるからだ。汝の欲するまゝに彼等を導く爲めには、彼等の欲するまゝに汝を導かねばならぬ。彼等は考へ方を變へねばならぬだけであるが、汝は是非共行ひ方を變へねばならない。汝に近附く人々は、唯だ汝が支配してゐると考へてゐる人々の意見、或は汝を支配してゐる寵人の意見、或は汝の家族の意見、或は汝自らの意見を支配することさへ出來ればいゝ。若し汝がテミストクレス（註六）のやうな天性の英雄であつても、大臣や廷臣や牧師や軍人や侍僕や饒舌家や子供に至る迄、汝自身をまるで子供か何ぞの樣に頤の先で支配するだらう。汝が何をやつても、汝の實際の權力は汝の實際の能力以上には出でない。吾々は他人の眼で見なければならなくなるや否や、他人の意志で欲しなければならなくなる。予の國民は予の臣下だと汝は誇りかに言ふ。それはその通りだ。しかし汝は一體何者だ？　汝の大臣の臣下ではないか。そこで今度は汝の大臣は一體何者だ？　彼等の書記や寵人の臣下、彼等の侍僕の侍僕ではないか。凡ての物を取れ、凡ての物を僭奪せよ、さうして金錢を湯水のやうに撒き散らせよ。砲兵隊を設けよ、絞首臺や死刑用の車輪をつくれよ、法律を制定し、法令を發布せよ、探偵や、軍人や、死刑執行人や、牢獄や、鐵鎖を增せよ。あはれむべき小人よ、そんなものが一體汝に何の役に立つのだ？　汝には何の得る所もないのだ。相變らず盜まれ相變らず欺かれるのだ。汝の權勢は一向增しはせぬ。汝は常に自分の意志だと口では言ひながら、他人の意志に從つて物事を行つてゐるのだ。

（註六）テミストクレスは彼の友人等にかう云つた、「そこに居る此の小さい子の子供はギリシアの主權者だ。何故かといふに此の兒は母親を支配してゐる。その母親は子を支配してゐる。而して子はアテン人を支配し、アテン人はギリシア人を支配してゐるからだ」と。吾々が苦し王侯から漸次に密かに王侯を操つてゐる一番元の人間まで辿つていつたならば、如何に多くの大帝國が取るにも足らぬ子供の手に支配されてゐるかを見出すことだらう！

自分の意志のまゝに振舞ふ人は、自分の意志を實行するために自分の手以外に他人の手を借りる必要のない人のみである。從つて、凡ての善の中で第一に位する善は權力ではなくて自由である。眞に自由な人は、自分で出來ることだけしか欲しない、そして自分の意のまゝを實行する。これが私の根本原則である。これを幼年時代に適用すればいゝのである。さうすれば一切の教育の規則は、それから生じて來るのである。

社會は人間を非常に弱くした、人間から彼自身の力をつかふ權利を奪つたばかりでなく、何よりも先づその力を不充分ならしめることによつて弱くした。それだから弱ければ弱い程人間の欲望は增して來る、それだから大人に比して子供が弱いのだ。たとひ大人が強くて、子供が弱くとも、それは大人の力が絶對的に子供の力より強いからではない。それは大人は自然自己に滿足することが出來るが、子供にはそれが出來ないからである。故に大人はより多く意志を有し、子供はより多く氣紛れをもつてゐることになる。氣紛れといふ言葉は、眞に必要ではなく、而かも他人の助けを借りなければ滿すことの出來ないところの一切の欲望をさすのである。

私は此の弱い狀態がどんなものかといふ理由を既に述べた。自然はこれに對して父母の愛情を備へておいてくれる。しかし此の愛情は度を過したり、足りなかつたり、濫用されたりする處れがある。今日の文明の中に生活してゐる親達は、その子供に、まだ年もいかぬ中から彼等の仲間

入りをさせる。元來子供のもつてゐない必要までも子供に與へて、子供の弱さを和げる代りに、却つて益々子供を弱くする。更に又彼等は子供から自然が要求しないものを要求したり、子供が自分の意志を果す爲めにもつてゐる僅かばかりの力を大人の意志に從はせたり、子供の弱さから又は大人の愛情から生れる相互依存を全然屈從に變へてしまつたりして、益々子供を弱くする。

賢明な人は自分の位置に止まつてゐることが出來る、けれども子供は自分の位置を知らないから、それを守つてゐることは出來ない。吾々の間には、子供が彼の位置から出て行く拔道が一千もある。子供に子供の位置を守らせるやうにするのは子供の世話をする人の役目だ。而かもこれは生易しい仕事ではない。子供は動物であつてもならないし大人であつてもならない、子供は子供でなければならぬ。子供には自分の弱さを知らせねばならぬけれども、その爲めに苦しませてはならぬ、子供は賴らせねばならぬけれども服從さしてはならぬ。子供は要求せねばならぬけれども命令してはならない。子供が他人に從ふのはたゞ彼自身に必要があるからである。他人の方が自分よりも子供に役に立つものが何であるかをよく知つてゐるからである、他人の方が子供の爲めに何が益になつて何が害になるかを子供よりもよく知つてゐるからである。何人も子供に少しも利益にならぬことを子供に命令する權利をもつてはゐない。父親でさへもそんな權利はもつてゐないのだ。

人間の偏見や諸種の制度が吾々の自然の性向を害はない間は、子供の幸福も大人の幸福と同じく、自分の自由を樂しむことにある。けれども子供のもつ自由は子供の弱さの爲めに制限されてゐる。自分の爲たいことをしてゐる人は、自分でさへそれに滿足してをれば幸福である。自然の狀態に生活してゐる人もその通りだ。自分の爲たいことをしてゐる人でも、自分の力以上の欲望

をもつてゐる人は幸福でない。それと同じ樣な境遇にある子供も亦その通りだ。子供は、自然の狀態にありながら、恰度文明社會に於いて大人が享有すると同じやうな、不完全な自由しか享有することができない。吾々文明人は皆他人なしに生きてゆくことは出來ないから、その點に於いて再び弱い不幸なものになつてゐる。吾々は人間になるやうにつくられたのだが、法律や社會が再び吾々を子供の狀態に引きずりこんだのだ。富豪や大人物や、國王等は凡て子供なのだ。彼等は、吾々に何時でも彼等の賴り無さを慰めて貰へることを知つて、そのことから無邪氣な虛榮心さへ感じ、彼等が一人前の人間なら決してして貰へないやうな色色な世話をして貰つて、それで大得意なのだ。

エミイルー

此等のことは極めて重要であつて、社會組織の一切の矛盾を解決するに役立つものである。賴りあふといふことには二つの種類がある。卽ち一は事物との賴りあひで、これは自然的のものである。他は人間同志の賴りあひでこれは社會的のものである。事物との賴り合ひは何等道德的性質をもつてゐないから、少しも自由を傷けず、決して惡德を生まない。人間同志の賴り合ひは亂雜なものであるから、(註七)あらゆる惡德を生む。そしてこれに依つて、賴られる者も賴る者も互に墮落するのである。若し社會に於ける此の害惡を救濟する何等かの手段があるとすれば、それは人間に代ふるに法律を以てすることである。個々人の一切の意志の力の作用よりも强い眞の力を一般意志に賦與することである。若し國家の法律が、自然の法則のやうに、如何なる個々人の力も打ち勝つことの出來ない剛直性を有するやうになれば、その時は人間同志の賴り合ひは再び事物間の賴り合ひとなり、自然の狀態が齎す便益と、文明狀態が齎す便益とがすつかり國家の內部で結びつけられるだらう。人間が惡德に陷るのを防いでゐる自由と、人間を美德にまで向

上させる道德とが結びつけられるだらう。

(註七) 拙著「政治的權利の諸原則」Principes du Droit Politique (譯者曰く「民約論」を指す) に於いて、如何なる個人の意志も社會組織の中で秩序づけることが出來ないことを證明してある。

子供には唯だ事物にのみ賴らせるやうにするがいゝ。さうすれば子供の敎育の進行と自然の順序とが一致してくる。子供が無鐵砲な意志を通さうとした時には、肉體的の障碍だけを與へてやるがいゝ。卽ち子供のしたことから自然に罰が生じて來るやうにしてやるがいゝ。さうすれば子供は此の次に同じやうなことが起つた場合にそれを思ひ出す。子供に惡いことをしてはならぬと禁じなくとも、子供が惡いことが出來ないやうに仕向けてやれば十分だ。經驗か或は力の不足といふことだけを法の代りとすべきだ。子供には子供の欲しがるものを何でも與へてはならぬ。子供には子供に必要なものを與へるやうにしなければならぬ。子供に何かやらせる時は子供に服從の觀念を起させないやうにし、子供の代りに何かしてやる時には子供に命令の觀念を起させないやうにしなければならぬ。子供が自分でしても諸君がしてやつても、等しく自由を感じるやうにさせなければならぬ。子供が我儘を通す爲めにではなく、自由である爲めに必要であり、而かも子供にそれが不足してゐる力だけを、子供に補つてやるがいゝ。さうすれば子供は諸君に助けて貰ふのを何となく恥かしいやうに思つて、一刻も速く諸君の手を借りないで、自分で自分のことを立派にすることが出來るやうにならうとする。

自然は子供の身體を鍛へ、子供を成長させる爲めに、種々獨特の方法をもつてゐる。何人もこれに逆らつてはならない。子供が歩き度いと思ふ時に、子供にじつとしてをれと强制してはならない。又子供がその場所にじつとしてゐたいと思ふ時に、子供に行けと强制してもならない。子

供の意志が、吾々の過失によつて傷けられない間は、子供は決して無益なことを望みはしない。子供は跳びたければ跳び廻らせるがいゝ。走りたければ走り廻らせるがいゝ。大聲が出したければ大聲で叫ばせるがいゝ。子供の運動は凡て、發育を求めてゐる彼等の體質の必要から出るものである。けれども子供が自分の力だけでは出來ないことをしようと望んだり、他人にそれをして貰はうと望んだりする時は警戒しなければならぬ。その時は、よく注意して眞の必要、自然の必要と、漸く生れかけて來た我儘からの必要、即ち私が今言つたやうな生命の過剰から生じた必要以外の必要とを識別しなければならぬ。

子供が、あれが欲しい、これが欲しいと言つて泣く時には何うしなければならぬかは、私は既に言つた。唯だ一つ附け加へておきたいことは、子供が欲しいと思ふものを言葉で要求することが出來るやうになつてゐるにも拘らず、それが一刻も早く欲しい爲め、或は拒絶されるのを打ち敗かす爲めに泣いて要求を押しつけるやうなことがあつたら、きつぱりと拒絶しなければならぬといふことだ。若し子供が必要の爲めに何かして欲しいと言葉で言つたなら、諸君はその必要が何であるかを知つて、子供の要求を滿してやらねばならぬ。けれども子供の涙を見て何かしてやるのは、子供に涙を流すことを奬勵するやうなものだ。諸君の好意を疑ふことを敎へるやうなものだ。諸君が親切からするのではなくて、泣くのが煩さいからするのだと思はせるやうなものだ。子供は諸君を親切でないと信ずると意地惡くなる。諸君を弱いと思ふと强情つ張りになる。若し拒絶する氣がないものなら、いつでも子供が何かして欲しいと合圖をしたら一度ですぐにしてやるがいゝ。頑固に拒絶して焦らしてはならぬ。だが一旦拒絶したら斷じてそれを翻してはならぬ。

何よりも注意すべきは、子供に空虛な馬鹿丁寧な言葉を敎へないことだ。こんな言葉を敎へる

と子供はそれを利用して彼の周圍にゐる人々を凡て彼の意志に從はせる。自分の欲しいと思ふものをすぐに手に入れるまじなひの言葉としてこれを使ふやうになる。金持ちの家庭の鹿爪らしい敎育は、必ず子供に丁寧らしい横柄をもたせずにはおかない。それは、何人も逆らふことの出來ないやうな言葉を子供に敎へてそれを使はせるからだ。金持ちの子供には、言葉の調子にも態度にも少しも賴むとか願ふとかいふやうなところはない。彼等は他人に物を賴む時でも命令する時と同じ位横柄だ。寧ろ命令する時よりも賴む時の方が却つて横柄な位だ。まるで賴む時の方が相手が服從することが確實だと思つてゐるらしい。「何卒」といふ言葉は彼等の口にかゝると「して貰ひ度い」といふことを意味し、「お願ひします」といふ言葉は「命令する」といふことを意味することがすぐにわかる。いつでも命令してゐながら勝手に言葉の意味だけ變化すればいゝとはさてもさても天晴れの上品さではないか！　私はエミイルを横柄にするくらゐなら、粗野にしておく方がましだと思ふから、エミイルが「お願ひします」と口先で言つてその實命令するよりも、口では「これをしなさい」と言つてゐながら心の中で賴むやうにさせたい。私の重要視するのはエミイルが使ふ言葉ではなくて、彼がその言葉に附してゐる意味なのだ。

あまり嚴格過ぎるのと、あまり寬大過ぎるのとは孰れも避けねばならぬ。若し諸君が子供を苦しませておけば、諸君は子供の健康、子供の生命を危險にさらし、彼等を實際不幸にすることになるのだ。若し諸君が子供をあまり大切にして、何のやうな不便をも經驗させずにおくと、諸君は彼等に大なる不幸を與へる準備をすることになるのだ。彼等を纖弱く、臆病にすることになるのだ。彼等を人間本來の狀態から連れ出すことになるのだ。だが彼等は諸君が何んなにしたつて何時か又そこへ歸つてこなければならない。諸君は自然が子供に與へる苦痛を免れさせようとし

て、却つて自然が與へない苦痛を子供に與へるのだ。諸君は私が前に、何時來ることか、それとも來ないのかわかりもしない遠い將來のことを考へて子供の現在の幸福を犧牲にすると言つて非難した、あの思慮の足りない父親達と同じ誤謬に私自身が陷つてゐると言ふだらう。

しかしそれは違ふ。何故かと言ふと、私は少しばかり私の生徒に苦痛を嘗めさせたとて、その代り彼に自由を與へるから、それで十分埋め合せができる。小さい惡戯小僧が雪の上で遊びながら、寒さに凍えて、紫色になつて、指を動かすことさへ出來ないでゐることがある。彼等は身體を暖めに行くことを禁められてはゐないのだ。しかし彼等は行かうとはしない。若し誰かゞ無理に彼等を引張つていつてやつたら、彼等は寒さの嚴しさよりも拘束の嚴しさを百倍も強く感ずるだらう。それだのに諸君は何を不憫だなぞと思ふのだ？　私が諸君の子供に、彼等が喜んで受けたがつてゐる不自由以外には不自由を與へないといふことが彼等を不幸にすることになるのか？　私は子供を自由にさせておいて、子供の現在の爲めをはかつてゐるのだ。私は子供がこれから先に受けねばならぬ苦痛を忍ぶことができるやうに子供を鍛へて、彼の將來の爲をもはかつてゐるのだ。若し此の子供が私の生徒になるか諸君の生徒になるかを選ぶとしたら、彼はほんの暫らくでも何方にしようかと躊躇するだらうか？

諸君は、誰にもせよ彼自身の本來の位置以外にその人の眞の幸福があり得ると思ふのか？　その人を人間の凡ゆる苦痛から等しく免れさせようとするのは、その人を人間の位置からつれ出すことでは無いか？　私はかう思ふ、大きな幸福を感ずる爲めには、小さい苦痛を知つておかねばならぬ。これが人間の本性なのだ。肉體があまりに安樂をすると精神が腐敗してくる。苦痛を知らない人は、同胞人類に對する人情も知らなければ、相憐の味はひも知らない。かういふ人の心は何物にも動かされない。かういふ人は他人と交際が出來ない、同胞の中に一人まじつてゐる怪物なのだ。

諸君は、諸君の子供を不幸にする最も確實な方法を知つてゐるか？　それは彼が欲しいと思ふものは何でも手に入れることが出來るやうな習慣をつけてやることだ。何となれば、彼の欲望は、容易に滿して貰へるから、絶えず欲望は募つて行く。すると早晩諸君はそれを滿してやらうと思つても力が足りない爲めに何うしても拒絶せねばならなくなる。此の思ひがけない拒絶は、欲しいと思つたものが得られないことよりも以上に、子供に苦痛を與へることになるからだ。最初に子供は諸君のもつてゐるステッキを欲しがる。間もなく彼は諸君の時計を欲しがる。次には空を飛んでゐる鳥を欲しがる。空に輝いてゐる星を欲しがる。見るものを何でも欲しがる。神ならぬ諸君に何うして彼の欲望を滿足させることが出來ようぞ？

凡そ人間はその自然の性向として、自分が取ることの出來るものは何でも自分のものと考へるものである。此の意味に於てホッブスの說は或る點まで眞理である。即ち吾々の欲望が增すにつれて、これを滿す手段を增してゆけば、各人は萬物の主人となれる。だから、欲しいと思ふものは何でも手に入れることの出來る子供は、自分を宇宙の持主のやうに考へ、凡ての人を自分の奴隸のやうに考へて來る。そして何時か他人が何うしても彼の要求を拒絶せねばならぬやうなことが起つて來ると、命令しさへすれば何でもして貰へると思つてゐる彼は、此の拒絶を、反抗的行爲か何かのやうに思ひ込む。諸君が何んなに道理を言つて聞かしても、幼ない子供には道理はわからぬから、この子供はそれを皆ないゝ加減な口實だとしか思はない。そこで彼の目には何もかも不親切に見える。他人が良からぬものだといふ感じが起つて來て彼の天性をひがませる。彼は

凡ての人を憎み、他人の親切を有難がることは知らないで、他人が反對すれば何んなことにでも腹を立てる。

此のやうに憤怒の俘となり、氣短かな感情で荒んでゐる子供が幸福になれるとは私に何うして思へようか？　何うして幸福なことがあるものか。彼は暴君なのだ。彼は最も卑しい奴隷である と同時に、世の中で一番みじめな人間なのだ。私はこんな風に教育された子供達を見たことがある。彼等は、他人に肩で打つつかつて家を打ち壞して欲しがつたり、鐘樓の上についてゐる相風鶏をとつて來て貰ひたがつたり、樂隊の音が長く聞いてゐたい爲めに、聯隊の行軍を停めて欲しがつたりして、相手がすぐにそれに服從しないと、他人の言ふことには少しも耳を傾けようとしないで、四邊の空氣が裂けるやうな大聲で泣き出した。彼等の機嫌を取らうとして何んなに氣をもんでも凡て無益であつた。これまで何を欲しがつても、すぐにそれが取つて貰へたところから、彼等の欲望がいやが上にも募つてゐたので、彼等は到底取ることの出來ないものまでも執拗に欲しがり、そのために到る處で抵抗、障碍、苦痛、悲哀だけしか見出さなかつたのだ。彼等は始終ぶつぶつ不平を言ひ、始終强情を張り、始終ぶりぶり怒つて、終日泣いたりこぼしたりした。こんな子供が一體幸運なのだらうか？　弱さと我儘とが一緒になると無分別と不幸としか生じない。二人の甘やかされた子供が、一人は卓を叩き、一人は海を鞭ちつゞけさせておくがいゝのだ。で氣のすむまで卓を打たせ、海を鞭ちつゞけさせておくがいゝのだ。

子供の時分からこんな風に命令と我儘の考へで不幸にされてゐたら、彼等が成長して他の人間との關係が增大し複雜になりはじめて來たらそれはどうなるだらう？　凡ての物が彼等の前に平伏して彼等の言ひなり次第になつてゐると思つてゐた彼等は、世間へ出て、凡ての物が彼等に抵

抗することがわかり、彼等の一擧手一投足の下に動くと思つてゐた宇宙の重味で彼等自身が壓しつぶされるのを發見した時何んなに彼等は驚くだらう！

彼等の横柄な態度、彼等の子供じみた虚榮は、自分の身に屈辱と侮蔑と嘲弄とを招くだけだ。彼等は水を飲むやうに恥辱を飲む。此の悲慘な經驗によりて彼等はやがて自分の境遇も自分の力も知らないのだといふことを敎へられる。あらゆる事をすることが出來ないものだから、彼等は自分には何も出來ないのだと考へる。片つ端から思ひがけない障碍で撥ねつけられ、侮蔑でこき下ろされて、彼等は卑怯になり、臆病になり、萎靡してしまつて、以前に柄になく增長してゐたと同じ位今度は柄になく卑下して來るのだ。

さて又根本原則に歸らう。自然は、子供を、他人から愛せられるやうに、助けられるやうに造つたけれども、自然は彼等を他人から服從されたり、恐れられたりするやうに造つたであらうか？　自然は他人を怖けさす爲めに、子供達に嚴めしい態度や、嚴格な眼付や、荒々しい脅すやうな聲を與へたであらうか？　獅子の咆哮が百獸を震駭せしめ、その恐ろしい頭を見ると群獸が戰慄することは、私にもよくわかる。けれども、役人の一團が、長官に引率され、鹿爪らしい禮服を着用してゐながら、襁褓にくるまれてゐる赤坊にお叩頭をして、勿體振つた言葉使ひで挨拶をし、赤坊はそれに答へる代りに鼻汁を垂らして泣いてゐることがある。世の中にこの光景位、不似合な、厭はしい、滑稽な光景は又とない。

子供を子供として考へると、世の中に子供くらゐ弱い、頼りない、周圍のものに壓倒され易いものがあらうか？　子供くらゐ他人の憐れみと保護との必要なものがあらうか？　子供は自分の傍へ近附いて來る人に、自分の弱さに同情させて助けて貰ふ爲めに、その愛らしい顏を見せ、い

たいたしい樣子を見せてゐるやうに思はれるではないか？　從つて我儘な强情つ張りの子供が、周圍にゐる凡ての人々に命令し、その人々に見離されたらすぐに死んでしまはねばならないやうな大切な人々に、臆面もなく横柄に振舞つてゐるのを見るくらゐ順序を顚倒した、癪に觸ることが又とあらうか？

また一方では子供は弱いといふことの爲めに色々な束縛を受けてゐるのであるから、その上吾々の出來心で束縛を加へ、僅かばかりしかない、從つて迚もそれを濫用することの出來ない、而かもそれを奪つたところで彼等にも吾々にも殆んど何の益もない子供の自由を奪ふのは亂暴極まることだといふことがわからない人があらうか？　凡そ世の中に高慢な子供くらゐ物笑ひに價ひする子供がないとすれば、臆病な子供くらゐ憐憫に價ひするものもない。大人になれば社會的奴隷とならねばならぬのに、何を好んで子供の時にまで個人的拘束を加へるのか？　自然が吾々に與へない拘束からは、暫時の間でも免れて生きるやうにしようではないか、さうして子供に自然の自由を樂しませて、せめて暫くでも奴隷狀態の中で染みこむ惡德から遠ざけてやらうではないか。嚴格な家庭教師や、子供の奴隷になつてゐる父親達は、次々に私の許へいゝ加減な抗議を申し込んでお出でなさい。さうしたら私は彼等が彼等自身の教育法を賞めちぎる前に、もう一度彼等に自然の教育法を教へてやらうと思ふ。

私は再び實地に返らう。諸君は、子供が欲しがるからといつて彼に物を與へないで、子供に必要だからといふ理由でそれを與へるやうにしなければならぬ。(註八)又子供に服從させて物事をさせないで、必要に應じて物事をさせるやうにしなければならぬ。これは前に私の言つた通りだ。かうして行けば、服從といふ言葉と命令といふ言葉とは子供の辭書から取り除かれてしまふだら

う。義務といふ言葉、責任といふ言葉は猶更のことだ。だが力といふ言葉、必要といふ言葉、無力といふ言葉、拘束といふ言葉が子供の辭書の大部分を占めるやうになるに相違ない。理性ができるまでは、道德的存在とか社會的關係とかの觀念をもつことは出來ない。だから吾々は出來るだけ、此等の觀念を表はすやうな言葉を使はないやうにしなければならぬ。それは子供が此等の言葉に間違つた觀念を結びつけないためだ。若し子供がこれに間違つた觀念を結びつけると、それを壞すには何うしたらいゝかわかりもしないし、わかつたところでそれを壞すことは出來ないからだ。最初に間違つた觀念が頭の中に這入ると、それが彼の誤謬と惡德の萌芽となるのだから、取りわけ此の第一歩には細心の注意をしなければならぬ。子供が感覺的事物の刺戟だけしか感じない間は、子供の觀念を感覺だけに限らせるやうにするがいゝ。そして子供がどちらを向いても自分の周圍に物質の世界だけしか認識しないやうにするがいゝ。さうしなければ、子供は諸君の言ふことには少しも耳を傾けなくなるか、或は諸君が子供に話して聞かせる道德的世界について、いゝ加減な觀念をつくつて、諸君は一生それを消すことが出來ないやうになるものと覺悟しなければならぬ。

（註八）苦痛は屢々必然にやつてくるから、時々は快樂が必要であるといふことを吾々は知らなければならぬ。だから子供に決して滿してやつてはならぬ唯一の欲望は、他人を服從させようとする欲望だけである。故に子供が何を要求しても、吾々は、如何なる動機から子供がそれを要求するに至つたかといふことに取りわけ注意しなければならぬ。子供に眞の快樂を與へることが出來るものなら、出來るだけ子供の要求を滿してやるがいゝ。子供が出來心や、我儘を振舞ひたさから要求するものは、皆拒絶してやるがいゝ。

子供と話をして子供の理性を養へといふことはロックの一大主張であつた、今日ではそれが大

流行になつてゐる。しかし私には、それが人氣を博してゐるからといつてそれを信ずるのは正當とは思はれない。私に言はせると、大人と一緒にあまり多く話をした子供くらゐ馬鹿なものはない。人間の凡ゆる機能の中で、理性は、言はゞ爾餘の一切の機能の合成物に他ならぬものであつて、その發達の最も困難で且つ最も遲いものである。ところが吾々は初めにできる色々な機能を發達させるために一番あとで出來る理性の助けを借りようと言ふのだ！　立流な教育の完成は理性を備へた人を作ることであるのに、吾々はその理性によつて子供を教育しようと主張するのだ。これでは終りから始めるやうなものだ。道具で物をつくらずに物で道具をつくるやうなものだ。若し子供に理性がわかつてゐるなら、子供は教育して貰ふ必要はないだらう。ところが諸君は幼い時から子供にわかりもしない言葉で話しかけて、彼等に口答へをさせ、他人の言葉を一々とがめさせ、子供を自分の教師と同じくらゐ物識りであると思はせ、子供を議論好きにし、我儘にする習慣をつけるのだ。そして吾々が彼等に合理的動機によつてさせたいと思ふことを凡べて、貪慾、恐怖、或は虚榮等の動機からでなければさせることができないやうにする。吾々は常に合理的な動機に此等の動機を附加せねばならなくなつてしまふ。

エミイル

吾々が子供に與へる、或は與へ得る道德的教訓は、殆んど凡べて次のやうな形式に歸することが出來る。

教師　そんなことをしてはいけません。

子供　何故してはいけないの？

教師　それは惡いことだからです。

子供　惡いことだつて！　惡いことつてどんなこと？

教師　貴方が禁じられてゐることです。

子供　禁じられてゐることをするのが何故惡いの？

教師　いひつけをきかないからといつて、あなたは罰を受けます。

子供　僕はちつとも人に知れないやうにやります。

教師　人は貴方のしたことを見つけ出します。

子供　僕は匿します。

教師　さうすれば貴方は詰問されます。

子供

さうしたら嘘をつきます。

教師　嘘をついてはなりません。

子供　何故嘘をついてはいけないの？

教師　それは惡いことだからです、云々。

これは避けることの能きない循環論法だ。その外へ出ると、諸君の言ふことはもはや子供にはわからない。こんな教訓では大して役に立たないではないか？　此の對話の代りになるものがあるなら是非教へて貰ひたいものだ。ロック自身だつてこれには屹度困つたに相違ない。善惡を辨別したり、人間の義務の道理を知つたりすることは、子供にできる仕事ではない。

自然は大人になる迄は子供は子供とさせて置きたいのだ。若し吾々がこの順序を變へようとすると、よく成熟しない、風味のない早熟の果實が出來て、すぐに腐つてしまふだらう。吾々は若い博士や、年老つた子供をもつことになるだらう。子供の見方、考へ方、感じ方は一種獨得のものだ。それを吾々の見方、考へ方、感じ方に代へようとする位馬鹿げたことはない。だから十歳の子供に判斷を求める位なら、子供に五尺の身長を求める方がましだ。實際そんな幼い子供に理性が何の役に立たう？　理性は力の制動機だ。そして子供には制動機の必要はないのだ。

諸君は諸君の生徒に從順の義務を說き聞かせようとして、强制したり、脅しつけたりする。又更に惡いのは、おだてたり、褒美を呉れると約束したりする。すると子供は利益におびき寄せら

れ、或は無理矢理に强制されて仕方なしに道理がわかつたやうな顏をしてゐる。さうすると子供は大人同志がさうであると同じやうに、從順な方が自分の得になり、不從順だと損がいくといふことをすぐに見拔く。しかし、諸君は子供の氣に入らないやうなことばかりしか子供に命じないし、それに他人の命令によつて物事をするのは誰だつて嫌だから、彼等はこつそり自分の氣の向いたことをやつて、彼等の不從順が他人に知れさへしない間は別に惡い事ではないと思つてゐる。ところがそれが他人に見附かると、すぐに惡いことを自分で白狀してしまふ。それはたゞもつと惡いことになりはしないかと惧れるからだ。義務を果さねばならぬといふ道理を知ることは彼等の年齡では無理だ。この道理を眞に子供に納得させることの出來る人は世界中に一人だつてゐない。たゞ刑罰に對する恐怖や、勘辨して貰ひたいといふ希望や、面倒や、答へることが煩さい等のために子供は吾々が要求するだけの自白をすべてしてしまふのだ。そして吾々は子供をうるさがらせるか或は脅しつけるかして置いて子供を納得させたつもりでゐるのだ。

その結果はどうか？　第一に諸君は子供にわかりもしない義務を押しつけて、子供に諸君の横暴に對する不平を抱かせ、諸君を嫌はせることになる。次に諸君は、子供に、報酬をかすめ取り、罰を免れる爲めに、僞り匿し、欺き、嘘をつくことを敎へることになる。それから最後に、彼等にいつも祕密の動機を表面の動機で被ひ匿す習慣をつけて、斷えず諸君をごまかす術を、諸君自ら子供に敎へ、諸君が彼等の正體を知ることが出來ないやうにさせ、時に臨んで口先ばかりで諸君や他の人をあしらふやうにさせることになる。法律は良心に對して義務的なものではあるが、大人に對して矢張りこれと同じ强制力をもつてゐると、諸君は言ふ。それは私にもわかつてゐる。しかしながら、こんな大人は何者であるか、それは敎育によつて墮落させられた子供に他ならぬ

ではないか？　こんな大人になることこそ正しく避けねばならぬことなのだ。子供には力を用ゐよ、而して大人には理性を用ゐよ。それが自然の順序だ。賢者には法律は要らない。

諸君の生徒はその年齢に應じて取扱つてゆくがいゝ。先づ最初に彼を彼の居るべき場所におき、彼がもはや其處から出て行きたいといふ氣を起さなくなる迄、しつかりとそこに置いてやらねばならぬ。さうすれば彼は知慧の何たるかを知る前に、此の最も大切な教訓を實行するやうになる。子供には決して命令をしてはならぬ。何んなことでも絶對に命令してはいけない。諸君が子供に命令をする何等かの權威をもつてゐるといふことを子供に鵜の毛程も想像させてはいけない。子供にはたゞ彼が弱いこと、そして諸君が強いこと、それだから彼の力量と諸君の力量とが異ふ以上は彼は何うしても諸君の自由になるより外はないのだといふことだけを知らせてやればいゝ。此のことは彼に知らせ、了解させ、感得させねばならぬ。そして早くから彼の高慢ちきな頭に、自然が人間に課する冷酷な軛、凡ての有限の生物かその下に壓しつけられねばならぬ、重い必然の軛を感知させてやらねばならぬ。而かも此の必然性は事物の中に存在するものであつて、決して人間の出來心の仕業ではない（註九）といふことを了解させねばならぬ、彼を抑制してゐる馬銜は實力であつて決して權力ではないといふことを了解させねばならぬ。子供がしてはならぬことを、決して口で禁じてはいけない。說明もせず、道理も言つて聞かせないで、子供がそれを出來ないやうに妨害してやるがいゝ。子供に與へようと思ふものは、子供が欲しいと言つたら願つたり賴んだりしない內に直ぐに與へるがいゝ。取りわけ無條件で與へることが肝腎だ。喜んで與へるがいゝ。澁らずに氣前よく與へるがいゝ。しかし、一たび拒んだら何處までも斷乎として拒み、どんなに强情を張つても、それに動かされてはならぬ。一度「否」と言つたら、これを金城鐵壁

たらしめよ、さうすれば子供はそれに對して、五六度もぶつゝかつて來れば力を消耗してしまつて、もはやそれを打ち破らうとしなくなるだらう。

（註九）子供は彼の意志に反する凡ての意志、及び、彼に理解のできない意志は皆出來心だと見做すものだと信じてよい。所が子供は彼自身のむら氣に逆らふものは何一つ理解することが出來ないのだ。

からしていけば諸君は、たとひ子供が自分の欲するものが得られない場合にでも、彼を忍耐强く、平靜に、あきらめをよく、おとなしくさせることが出來るのだ。何となれば人間は天性として、他人の惡意でさへない限り、事物の必然性なら、辛抱强く耐へ忍ぶものだからである。子供は「もうちつとも無い」といふ答へに對してはそれを嘘だとさへ思はれなければ、決して逆らふものではない。またそこには決して中半の道がない。諸君は絶對に何事も子供に强要しないか、でなければ初めから子供を完全に服從させるか、いづれかの道をとらねばならぬ。子供を、自分自身の意志に從はうか、諸君の意志に從はうかと躊躇逡巡させ、斷えず、何方につかうかと迷はせて置くのが一番惡い教育法だ。私は子供が自己の意志に從ふのを百倍も好むものである。

世人が子供の教育に手を染めるやうになつて以來、彼等を導く手段として、競爭、嫉妬、羨望、虛榮、貪慾、さもしい臆病等のやうな凡ゆる最も危險な感情、すぐに醱酵して身體がまだ出來上りもしない內にすぐに精神を腐敗さしてしまふやうな感情より外の手段に氣がつかなかつたといふことは、不思議なことである。世人が子供達の頭の中へつめ込まうとする大人びた教訓の一つ一つは、皆彼等の心の底に惡德の種を植ゑつけてゐるのだ。馬鹿な教師達は子供達に善とは何であるかといふことを教へる爲めに彼等を意地惡にして置きながら、素晴らしいことをやつたつもりでゐるのだ。そして彼等は吾々に大眞面目で、人間といふものは元來こんなものだと嘆

息をもらす。さうだ、諸君がつくつた人間はそんなものだ。

世人は凡ゆる手段を試みた。しかしたつた一つ、成功すること請け合ひの唯一の手段だけを試みなかつた。それは卽ち放縱に流れない自由だ。出來ることはさせる、出來ないことはさせぬといふ原則だけによつて、意のまゝに子供を導いてゆくことが出來ない人は、苟くも子供の教育などに手を出してはならぬ。子供自身は何が自分に出來て、何が出來ないといふ範圍はわからないのだから、諸君は意のまゝに子供の周圍の出來ることゝ出來ないことゝの範圍を擴げることも狹めることも出來る。子供は必然の鎖で抑制され、壓迫され、拘束されるだけだから、敢へてそれに就いて不平を言はない。事物の力だけで從順にされ、素直にされて、惡德は彼の心に芽を出す機會を失つてしまふ。何となれば、情慾をおこしても何の效果も無ければ、決して情慾がおきるものではないからだ。

諸君の生徒にはロ先ではどのやうな教訓をも與へてはならぬ。彼には經驗からしか教訓を受ければさしてはならない。彼にはどんな種類の罰をも科してはならぬ。何となれば彼には過失を犯したといふことがわからないからだ。彼には決して謝罪をさせてはならぬ。何となれば彼には何が諸君の氣に入らなかつたのか分からないからだ。子供の行爲には全然道德的意味がない、だから子供には道德的に惡いことは出來ないのであつて、罰を科せられたり、叱られたりするわけはないのである。

私は既に讀者が、此の子供を吾々の子供なみに判斷して恐れてゐることを知つてゐる。しかし此の讀者は間違つてゐる。諸君が諸君の生徒達に加へる不斷の拘束は却つて彼等のやんちやを刺戟するのだ。彼等は諸君の眼の前で溫和なしくしてゐればゐるだけ、諸君が居なくなるとすぐに

騷々しくなるのである。彼等は平生諸君にいぢめられてゐるから、諸君のゐない間にその埋め合せをしなければならないのだ。二人の都會の生徒が田舍へ行くと、一村の子供全部を合せたよりもひどい惡戲をする。都會の子供と田舍の子供とを一人づゝ一室に入れて置くと、田舍の子供がまだ動き出しもしない內に都會の子供は室內にあるものを凡てひつくり返したり、壞したりしてしまふだらう。これは何故かと言ふと、外でもない、都會の子供はたまに與へられた放縱な時間を急いで浪費するのだが、田舍の子供は何時でも自由が得られるから、敢て氣を揉んで自由に振舞ふにも及ばないからだ。ところが田舍の子供で始終、おべつかをつかはれたり、拘束を受けたりしてゐる子供は、私が望んでゐるやうな狀態からは更に一層遠く隔たつてゐるのである。

第二篇

自然の最初の運動はいつでも正しいものだといふことを、爭ふべからざる原則と假定しよう。人間の心中には最初からの邪惡といふものはない。如何にして、何處から這入つて來たかといふことの說明の出來ない惡德は一つもない。人間が生れながらにしてもつてゐる唯一の自然の感情は、自己を愛する感情、卽ち廣義の利己心だけである。此の利己心はそれ自身としても、又吾々に對しても善いものであり且つ有用なものである。而して此の利己心は他人に對して必然的關係をもつてゐるものでないから、此の點ではもともと無差別なものであつて、たゞそれを適用しそれに關係を與へることによつてのみ良くも惡しくもなるのである。だから此の利己心を指導するもの、卽ち理性が生じて來るまでは、他人が見てゐるからとか他人が聞いてゐるからとかいふ理由、卽ち一言で言へば他人との關係によつては何事も子供にさせないで、たゞ自然が彼に要求することだけをさせるやうにすることが肝腎である。さうすれば彼は良いことの外は何もしなくなるだらう。

私は子供が物を破損したり、自分で怪我をしたり、高價な道具が手のとゞくところにあつても大丈夫それを壞したりする氣遣ひがないなどといふのではない。子供は惡いことはしないでも他人に損害を與へることはあり得よう。何故かと言へば惡い行爲と惡くない行爲とは惡意の有無によつてきまる、ところが子供には決して惡意はないからだ。若したゞの一度でも子供が惡意をもつたが最後、もう萬事休してしまふ、此の子供は殆んど陶冶し難い惡人になつてしまふのだ。

理性の眼から見れば少しも惡くないことでも貪慾家の眼には惡い事のやうに見える。だから子供等が粗忽をしても構はないやうに自由に放任して置く時には、壞されては困るものを子供の傍から遠ざけ、壞れ易い物や、貴重なものを子供の手のとゞくところに置かぬやうにするがいゝ。子供等の室には粗末な頑丈な家具を備へつけ、鏡類や陶器製の器物や贅澤品の類は一切置かないやうにするがいゝ。私のエミイルは田舍で育てるのだから、私は彼の部屋は百姓の部屋と少しも變つたところがないやうにしてやる。彼は滅多に部屋の中にはゐない筈だから何の爲めに骨を折つて部屋を裝飾してやる必要があらう？　しかしこんな餘計なことを言ふのは私の間違ひだ。彼は自分で彼の部屋を飾るだらう、どんな風に飾るかはすぐにわかるだらう。

若し、諸君が色々と注意しても、尙ほ子供が何かを掻き亂したり、何か大切な物を壞したりすることがあつても、諸君は諸君の怠慢の爲めに子供を罰してはならない、決して不平をならべてはならない。非難の言葉は一語も子供にはわかりはしない。子供が諸君に迷惑をかけたのだといふことを感づかせさへもしてはならぬ。まるでその器具がひとりでに壞れたのだといふやうな顏をしてゐるがいゝ。諸君が何も言はずにゐることが出來れば、諸君は大したことをしたのだと考へていゝ。

こゝで私は一切の教育の中で、最も偉大な、最も重要な、そして最も有益な原則を示してもよいかと思ふ。それは急がば廻れといふことだ。凡庸な讀者諸君、私の矛盾語（パラドクス）を許して頂きたい。よく反省して見るときは矛盾語（パラドクス）に陷らざるを得ない、而かも諸君が何と言はうとも、私は、偏見をもつた人になる位なら寧ろ矛盾をもつた人になる方が好きだ。人生で最も危險な時期は生れてから十二歳に至る間の時期だ。此の時期には色々の非行や惡德が萌芽して來るがそれを絕滅する手段はまだもつてゐないのである。そしてこれを絕滅する手段が備はつて來た時には、もう惡德は深く根を張つてゐて、それを拔き去る事が出來なくなつてしまつてゐるのだ。若し子供達が一足飛びに乳呑兒から理性を備へた大人に飛び移つでしまふものなら、今日世上に行はれてゐる教育にも相當の取柄はあるだらう。しかし自然の發育に應じて教育して行く爲めには、今日の教育とは全然反對の教育が彼等にとつて必要である。精神の種々の機能がすつかり發達する迄は、彼等に少しも精神をつかはせてはならぬ。何となれば、たとひ諸君が炬火を見せても、彼等の精神が盲目である間はそれを認知することは出來ないからだ。況んや廣漠たる思想の曠野に於いて、立派な眼をもつてゐてさへも朦朧としか判らない理性の道を辿つてゆくことは、子供には絕對に不可能だからだ。

故に、最初の教育は純然たる消極的のものでなければならぬ。この教育は道德や眞理を教へることにあるのではなくて、子供の心が惡德や間違つた精神に冒されぬやうに保護してやることにあるのである。若し諸君が何も爲ないでゐることが出來、且つ何も子供にさせないでゐることが出來れば、そして若し諸君が、子供が十二歳になるまで身體だけを强壯に健康に育てゝいつて、彼が右の手と左の手とを區別することも出來ないやうにさせておくことが出來れば、やがて諸君

の與へる最初の教訓を聞いた時から、子供の理解の眼は自然に開いて理性を見分けるやうになるだらう。かやうな子供は偏見も習慣ももつてゐないから、彼の心中には諸君の努力のきゝめを弱めるやうなものは何一つないに相違ない。故に彼は間もなく諸君の手によつて最も賢明な人間になり、諸君は最初何もしないでゐて、而かも驚くべき教育の成果を擧げることになるであらう。

世間で行はれてゐる習慣の反對を行ければ減多に間違ひはない。世間の父親や教師達は、子供を子供にしようとしないで學者にしようとするものだから、すぐに子供を叱つたり、折檻したり、懲戒したり、煽動てたり、脅したり、あゝしてやるとか、かうしてやるとか言つて約束したり、諭したり、理窟を言つて聞かせたりする。これではいけない、もつと條理のたつたやうにやらねばならぬ。諸君の生徒には決して道理を言つて聞かせてはならぬ。取りわけ、子供が嫌ひなことを尤もだと思はせる爲めに道理を言つて聞かせてはならぬ。何となれば、いつも道理を言つてきかせて嫌なことばかりさせて行くと、子供は道理を煩さがるやうになり、まだ道理が分かりもしない内からこれを信じなくなるだけだからだ。子供の肉體、器官、感官、體力は十分働らかせてやるがいゝ。だが子供の精神は出來るだけ長く遊ばせて置かねばならぬ。凡ての情操は、子供にそれを辨別する判斷がつくまでは、起らないやうに警戒しなければならぬ。變つた印象が子供の心にはいつて來ないやうに防止しなければならぬ。さうして、惡を避けようと思へば、善を急いではならぬ。何となれば善は理性の光で照される迄は善ではないからだ。遲れゝば遲れるだけ得をしたと思ふがいゝ。何も失はずに目標に進んで行くことが出來ればそれ　非常な儲けものである。子供には十分子供時代を享樂させるがいゝ。要するに、子供に何か教訓を與へる必要があつても、明日まで延しておいても危險のないものなら、今日は控へておくがいゝ。

此の教育法の有效なことを確證する點がいま一つある。それは子供の特別の天分に關する點で、それはその子供にどんな道德的訓練が最も適するかを知る爲めには是非とも知つてゐなければならないものだ。各人の心はそれぞれ獨特の型をもつてゐるから、それに從つてこれを制御してゆく必要がある、さうして吾々の骨折りを無駄にしまいと思へば他の型によらないで、その子供のもつてゐる型によつて制御してゆくことが肝腎である。思慮深い人は、長い間じつと子供の天性の趨向を見きはめ、一言もものを言はずに先づ十分にこれを觀察するがいゝ。最初は、彼の性格の萌芽を全く自由にしておいて、自然にそれが現れて來るまゝに拋つて置くがいゝ。その完全な姿相を見たいと思ふなら、如何なる拘束をも加へてはならぬ。諸君は、此の自由に放任して置かれた時間はそれだけ子供が損をしたのだと思ふかもしれぬが、それはまるで反對だ。彼は此の時間を最も有效に使用したことになるのだ。何故かと言へば、かうして置けば諸君は、やがて來るべき一層貴重な時間に一瞬間をも失はないやうにすることが出來るのだ。これに反して、諸君が先づ何をしなければならぬかゞわかりもしない内に教育に着手したら、諸君の教育は出鱈目になる。間違ひをしては元へ戻つて來なければならなくなり、目標に近づかうとしてあせればあせる程目標から遠ざかつてゆくことになるだらう。だから一文惜みの百知らずの吝嗇家の眞似をしてはならない。幼い子供の内に時間を犧牲にし給へ。さうすれば、その時間は、子供が大きくなつてから、しこたま利子がついて返つて來るのだ。名醫は患者を一目見たゞけで俄に處方箋を書きはしない。何も指圖をしない内に先づ病人の體質をよく診察し、それから徐ろに手當を加へる。しかし彼は、大急ぎで治療にとりかゝる醫者ならば殺してしまふかも知れない病人を立派に治す。

だが吾々は、子供を無感動な、自働人形のやうな人間に育てあげる爲めには、何處で育てたら

いゝか？　子供を月の世界に置いたらいゝか？　それとも無人島へつれて行つたらいゝか？　或は彼を凡ての人々から遠ざけたらいゝか？　彼は始終その周圍の世界に樣々の情慾をもつた他人を見たり、それを學んだりはしないだらうか。彼は同じ年輩の他の子供を見ないだらうか？　兩親や、隣人や、乳母や、家政婦や、下男や、それから教師さへも――教師だつて結局天使ではないのだから――此等の人々を彼が見るやうなことはないだらうか？

此の抗議は、有力な、尤もな抗議だ。しかし私は自然教育といふものが容易な事業だと諸君に言つたことがあるか？　人々よ！　諸君が善いことを凡べて困難にしてしまつたからと言つて、それが私の過失だらうか？　私は此の教育が困難なことは知つてゐる、それは認める。恐らく此の困難は打ち勝ち難いものだらう。だが常に、これを豫め避けようと努力すれば、必らず或る點までは豫防することが出來る。私は吾々がどのやうな目的をたてねばならぬかを示したまでゞあつて吾々が此の目的に達し得るものであるとは言はない。けれども私は言ふ、此の目的の最も近くまで行つた者が最も成功したものであると。

諸君は、一個の人間を造らうと企てる以前に、先づ諸君自身が人間にならねばならぬといふことを銘記しなければならぬ。諸君は自ら子供の模範とならねばならぬ。子供がまだ自覺をもつてゐない内なら、子供が見ても差支ない物の外は、子供の目を刺戟しないやうに子供の周圍を按配してゆく餘地がある。諸君自身凡ての人に尊敬せられるやうにせよ、先づ第一に他人に愛せられるやうにせよ、さうすれば彼等は諸君の氣に入るやうに力めることになる。諸君は子供の周圍にある凡ての人々の師とならなければ子供の師になれない、さうして此の權威は人格の力が基礎になつてゐなければ十分とは云へない。財布の底をはたいて氣前を見せたり、金を手づかみにして

人に與へたりしたとて何の役にもたゝない。私は金錢で他人の愛を得たといふ人の例は未だ嘗つて知らない。諸君は貪慾であつたり、無情であつたりしてはならぬ。又救つてやることの出來る不幸な人をたゞ憐んでゐてはならぬ。だが、諸君が幾ら財布の口を開いても、それと同時に心の口も開かなければ無駄になるだらう。相手の心の口もやはり閉されてゐるだらう。諸君は諸君の時間を與へなければならない。諸君の注意を與へなければならない。諸君自身を與へなければならない。何となれば、諸君が何をしても、人は、諸君の金錢は諸君自身ではないといふことにいつでも氣がついてゐるからだ。金錢を惠んでやるよりも同情と親切とを盡してやる方が有效で且つ眞に爲めになるといふことの證據は澤山ある。不幸な人や病人は金錢の施しよりも、どれ程慰安に渴してゐることだらう！　虐げられた人々には金錢よりもどれ程保護が有難いことだらう！相爭つてゐる人々を調停して裁判沙汰を避けるやうにしてやれ。子供等には義務を守らせ、父親には寛大にさせてやれ。幸福な結婚には便宜を與へ、障碍を取り除いてやれ。他人から正義を拒まれてゐる弱者、强者に壓迫されてゐる弱者の爲めには、諸君の生徒の兩親の信用を惜しまずに使用してこれを助けてやれ。不幸な人々の保護者なることを忌憚なく宣言せよ。正しく、情深く、親切であれ。金品ばかりを施さないで慈悲を施せ、慈悲の行ひは金錢よりも不幸を治する力をもつてゐる。他人を愛せよ、さうすれば他人も諸君を助けるだらう。彼等の兄弟となれ、さうすれば他人を助けよ、さうすれば他人も諸君を愛するだらう。

こゝにもまた私がエミイルを、彼等の教師を見習つて最下等に墮落してゐる人々から遠ざけ、都會の惡風から遠ざけて田舍で育てたいと思ふ一つの理由がある。都會の惡風は、表が美しく塗りたてゝあるから、子供にとつて誘惑的で、感染し易いものであるが、百姓の無作法には少しも

虚飾が無く、ありのまゝに無骨をむき出してゐるから、それを眞似ようとする氣さへ無ければ、本來子供等を誘惑するよりも寧ろ嫌がらせるものである。

田舍では、教師が子供に見せたいと思ふ事物を遙かに容易く取捨撰擇することが出來る。教師の名聲、彼の談話、彼の模範は、到底都會に於てはもつことの出來ない權威をもつだらう。彼は凡ての人の役に立つので、誰も彼もが彼に感謝されようと熱心し、彼の尊敬を得ようと努力して、實際教師が望む通りに彼の弟子の前で振舞つてくれるやうになるだらう。そして惡德を直すことは出來ないにしても、それを世間にさらけ出すやうなことはないだらう。そして此の場合吾々の目的を達する爲めにはそれだけで十分なのだ。

エミイル

諸君自身の過失の爲めに他人を責めてはならない。子供等は惡事を見た爲めに墮落するのではなくて、諸君が惡事を教へるから墮落するのだ。諸君は諸君の教へる生徒等に、或る一つの觀念を與へる爲めに常に說教をしたり、訓戒したり、理窟を言つて聞かせたりする。その時諸君は自身で善いと信じてゐる觀念一つに對して、何の價値もない他の觀念を二十も與へる。諸君は諸君の頭の中には種々の考へを一ぱいもつてゐるが、諸君が子供の頭にどんな影響を及ぼすかは一向御存じがない。諸君は絕えず子供にやりきれない程色々な言葉を浴びせかけるが、一體諸君は、此等の言葉の意味を子供が一つも誤解しないと思つてゐるのか？　諸君の難かしい持つて廻つた說明を子供等が自分勝手に解釋しないと思つてゐるのか？　諸君の言葉を材料にして彼等は自分の頭でわかる範圍內でこれを組みたて、いつか機會があつたら、それを用ゐて諸君に食つてかゝらうとしてゐるのだとは考へないのか？

先づ或る小さい子供に教訓を與へて置いて、その子供が何と言ふか聽いて見るがいゝ。子供の

意のまゝに喋べらせ、質問させ、好きなことを言はせて聽いて見るがいゝ。さうすれば、諸君は諸君の言つたことを子供が飛んでもない具合に解釋するのを見て驚くだらう。子供は何もかもごつちやにし、逆樣にしてしまつて、諸君をいらいらさせる。屢々思ひがけなく食つてかゝつて諸君を手古摺らせる。そしてたうとう諸君を沈默さしてしまふか、さもないと諸君に沈默させられてしまふかだ。何時もは非常に話し好きな人が沈默してゐるのを見て、彼は何う考へるか？　若し一度でも子供が此の味をしめ、それに氣がついたが最後、教育はもうおしまひだ。この瞬間から萬事がすつかり駄目になる。子供はもはや教はらうとはしないで、諸君をやり込めようとするやうになる。

熱心な教師達よ、率直に、愼しみ深く、且つ言葉數を少くせよ。他の人々の行爲を止める場合は別だが、その他の場合には決して早まつて手を出さないやうにせよ。私は絕えず繰り返して云ふ、若し出來るなら良い教訓でもなるべく與へないやうにするがいゝ。それは折角良い教訓を與へても惡いものになる虞れがあるからだ。自然が人間の第一の樂園としてつくつた此の地上に於ては、無邪氣な子供に善惡の區別を知らせようと思つて惡魔の役目を稽古させないやうにせねばならぬ。子供が外部の手本を見習ふことを防ぐことは迚も出來ないのだから、せめて諸君は百方注意して、此の手本を子供の精神にぴつたり合ふやうなものにして與へてやらねばならぬ。

感情の激發は、それを見てゐる子供に大きな影響を及ぼす。何故かといふと激烈な感情はすぐに外部に發露して甚だ目につき易いために子供の心を動かし、子供の注意を奪ふからだ。取りわけ憤怒の激發は最も騷々しいものだから、怒つてゐる人の傍に居ればそれに氣が付かずにゐる譯にはいかない。諸君は、この時こそ教育者が得意の教訓を切り出す好機ではないかと問ふか知れ

ぬが、そんなことは駄目だ。何うして、何うして！　得意の教訓などは以ての外だ、一言も言つてはならぬ。子供が諸君の傍へ來るなら來させて置け。すると子供は眼の前に見た光景に驚いて、きつと諸君にそのわけをいろいろ質問するに相違ない。それに對する答へは簡單だ。その答は子供の五官を刺戟したもので用が足りる。子供は赤く熱中した顏、きらきらした眼、こはい身振り等を見、叫聲を聞く。凡てが、身體の落ちついてゐない徵候だ。そこで諸君は子供に向つて、誇張したり、內密話のやうな風をせずに、穩やかに平然とかう言ふがいゝ、『此の人はかわいさうに病氣なのだよ。熱病にかゝつてゐるのだ』と。かうすれば諸君は、僅かの言葉數をもつて、病氣とその結果とに關する觀念を子供に與へる機會が得られるわけだ。何故なら病氣も亦自然から來るものであり、必然的に人間を束縛するものだから、子供も自分がその束縛を受けてゐるのだといふことを知つて置かねばならないからだ。

こんな風に考へさせることによつて——而かも此の考へは嘘ではないのだ——子供にひどく怒るのは病氣だと思はせ、早くから、子供にあまりひどく怒らない習慣をつけてやることが出來ないだらうか。そして諸君はこの種の考へを、適當の時機に與へてやると、それは此の上なく退屈な道德的なお說教と同じ位に健全な效果があるとは信じないか？　信じないならそれでいゝが、この考へを與へて置くと、それが將來如何に役立つかを考へて貰ひたい！　卽ち諸君は將來、若し必要が起つた場合には、剛情に反抗する子供を、病人扱ひにし、室內に閉ぢ込め、必要に應じて寢臺の上に寢かせ、一定の食物をたべさせて、子供が我と自分で我儘の募つてくるのを恐れ、且つ憎むやうにさせる權威をもてるのだ。何故かといふと子供はそれを決して懲罰だとも思はず、自分の病氣を癒すために必要な非常手段だと思ふからである。萬一諸君自身が、何かの拍子で、

冷靜を失つて腹を立てるやうなことがあつたら、決してこんなことがあつてはならんのだが、諸君は自分の惡いことを子供に隱さうとはしないで、率直に、やさしく、『お前は私を病氣にしたよ』と言ふべきだ。

尙ほ、大切なことは、子供は極く單純な考へで育てられて來たのだから、子供が無邪氣に、變な馬鹿々々しいことを言つても、これを彼の目の前で注意したり、彼が氣づくやうな風にそれを人に語つたりしてはならぬといふことである。不謹愼な哄笑は六箇月間の辛苦を水の泡にし、一生取り返しのつかないやうな害毒を與へることがある。私は幾度も繰り返して言ふが、子供の敎師にならうと思へば、先づ第一に自己の敎師にならねばならない。吾が幼ないエミイルが、近所の二人の女達が烈火のやうに怒つて喧嘩をしてゐる眞最中に、二人の中で一番ひどく怒つてゐる女のそばへ進んでいつて、同情に堪へないといつたやうな調子で『貴女は病氣なんですね、お氣の毒に』と言つたと想像する。此の取つてもつかぬやうな言葉を聞くと、見物人は間違ひなく滑稽に感ずるに相違ない。喧嘩をしてゐる當の本人も多分可笑しがるだらう。その時に私は笑ひもせず、叱言も言はず、讃めもしないで、彼の言葉がどんな效果を他人に與へたかを彼が氣がつかない內に、或は少くとも彼がそのことを考へない內に、彼が欲すると欲しないとに拘らず、急いで彼を側の方へつれていつて、他の物に彼の氣をまぎらせ、そのことを一刻も速く忘れさしてしまふやうにする。

私は、凡ゆる枝葉の問題に入るつもりでは毛頭ない。たゞ一般の原則を說明し、最も困難な場合をとつて實例を示せば足りるのだ。私は此の社會の中にあつて、子供が十二歲になるまで、人間同志の間の關係や、人間の行爲の道德性について何等の觀念をも子供に與へないで育てるとい

ふことは不可能だと思ふ。だから、此等の已むを得ない觀念を出來得る限り遲く與へるやうにし、何うしてもこれを避けることが出來なくなつたら、單に、子供が何でも彼でも自分の自由になると思つたり、譯もわからず、見境ひもつかずに他人に惡いことをしたりしないやうに、差し當つて必要なものだけに限るやうにすれば十分だ。中には長い間何等の危險もなしに、最初の無邪氣を失はずに育てゝゆくことの出來る溫和しい性質の子供もあるが、又中には亂暴な性質の子供もある。かういふ子供は早くから狂暴な性質が發達してくるから、急いで大人にしてやらないと、やがては鎖につなぐ必要が生じてくる。

吾々の最初の義務は吾々自身に對するものである。吾々の最初の感情は吾々自身に集中する。吾々の一切の天性の運動は、先づ最初は自己の保存及び自己の幸福と關係してゐる。故に最初の正義感が吾々の心に生ずるのは他人に對する義務からではなくて、自己に對する義務からである。ところが子供に向つて先づ彼等の義務を云々して、決して彼等の權利を語らず、先づ當然なすべきことの反對を教へ、彼等が理解することの出來ないこと、彼等に無關係なことを教へるのは、世間で一般に行はれてゐる教育のいま一つの間違ひだ。

だから若し私が、今想像したやうな子供の一人を教導しなければならなかつたとしたなら、私は私自身にかう言ふだらう。子供は決して人間に向つて打ちかゝるものではない。物に向つて打つてかゝるものだ(註一〇)。そして間もなく彼は經驗によつて、自分より年長の人や、力の優れた人は誰でも尊敬するやうになるだらう。ところが物の方は決して自身で防禦することが出來ない。そこで先づ第一に子供に與へなければならぬ觀念は、自由の觀念ではなくて所有の觀念である。而して彼が所有の觀念をつくることが出來る爲めには、彼は何等かの物を所有してゐる必要があ

ると。彼の着物や、道具や、玩具等を取りあげて、これがお前の財產だと言つたとて何にもならぬ。何となれば、成る程此等のものを彼は自由にすることは出來るけれども、何故に、又如何にしてこれが彼の所有になつたかといふことは彼にはわからないからだ。人から與へられたから彼のものになつたのだと言つて聞かせても、矢張り駄目である。何故かといふと、與へるためには所有してゐなければならぬからだ。故に、彼の所有よりも先に一つの所有があるわけだ。ところが此の所有の原則こそ吾々が彼に說明せんとするものだからだ。おまけに、人に物を與へるといふ事は一つの契約であるのに、子供は契約が何であるかを理解することが出來ない(註一一)。讀者諸君よ、私は切望する。此の例並びにその他の多くの例によりて、諸君は子供の頭の中へ、彼等には到底理解することの出來ない言葉をつめこんで置いて、それで立派に子供に教訓を與へたつもりになつてゐるのだといふことを、よくよく留意されんことを。

(註一〇) 子供に、大人を目下の人として一緒に遊ばせてはならぬ。否、同輩として一緒に遊ばせてもいけない。若し子供が誰かを本氣で打つやうなことがあつたら、それが假令下男であらうと、或は死刑執行人であらうと、子供が二度とそんなことをしないやうに、必らず利息をつけて打たれた人に打ち返させるがいゝ。私は愚かな家政婦が、子供の亂暴を面白がつて、子供に打つことを奬勵し、笑ひながら打たれてゐるのを見た。子供には力がないから打たれても別に痛くはない。しかしながら怒つた子供が人を打たうとするのは、人を殺さうとするのと同じであつて、子供の時に人を打たうとする者は、大人になれば人を殺さうとするやうになるといふことを、彼の女達は夢にも考へてゐないのだ。

(註一一) 多くの子供が、一旦他人に與へた物を取り返したがつて、對手がそれを渡さないと泣くのはこの爲めである。人に物を與へるといふことがなんであるかをよく辨へて來れば、そんなことはなくなる。たゞさうなれば最初に輕々しく與へないやうになるだけである。

だから吾々は所有の起源にまで溯らなければならない。何となれば、最初の所有の觀念はそこ

から始まるに相違ないからだ。子供は田舎に住んでゐれば、野長仕事に就いて何等かの觀念を得るだらう。眼と暇とさへあればそれは得られる。而かも子供はそれを二つともつてゐるからだ。如何なる年齢に於いてもだが、特に子供の時分には、吾々は、創造し、模倣し、生產し、自分の力と活動のしるしを發揮したがるものだ。子供は園丁が植物の種を蒔いたり、植ゑつけたり、育てたりしてゐるのを一度見たら、もう自分で園丁の眞似をしようとするだらう。

私は、前に述べた主義に從つて、彼の此の欲望に決して逆らはない。それどころか私はそれに贊成し、彼と趣味を共にして一緒に働く。それは彼を喜ばせる爲めではなくて、自分で樂しむためにだ。少くも彼にはさう思はせるやうにする。私は彼の下働きとなつて、彼の腕が丈夫になるまで、彼の代りに土を耕してやる。彼はそこに一本の蠶豆を植ゑて、此の土地を自分の所有とする。そしてこれは、ヌニエス・バルボアが、南アメリカの南部海岸に、スペイン國王の名に於いてスペインの國旗を樹て、かくして南アメリカをとつたのよりも、確かに神聖な尊敬すべき所有である。

吾々は毎日此の蠶豆に水をやり、それが成長してゆくのを喜んで見てゐる。私は彼に、これはお前のものだと告げて、更に此の喜びを增してやる。そして、此の時にお前のものだといふ言葉の意味を彼に說明してきかせ、彼がその土地の中へ、彼の時間、勞働、骨折り、彼自身の人格を加へたのであるといふこと、その土地の中には彼自身の何物かゞあるのであつて、彼の意志に反して他人が彼の腕をつかんでゐようと欲するときに彼が自分の腕を振り離すことが出來ると同じやうに、誰に對しても彼はこの土地を自分のものだと主張することが出來るのだといふことを、彼に納得させてやる。

ところが或る日、彼は、手に撒水器をもつてそこへやつて來ると、何といふことだらう！ 無慘にも、蠶豆は跡かたもなく皆根こぎにされて、土は掘り返され、場所さへも判らなくなつてしまつてゐる。あゝ、私の仕事、私の勞働、私の骨折と私の汗との美しい果實はどうなつたのか？ 誰が私の所有を奪ひ去つたのか？ 誰が私の蠶豆を盜んだのか？ 子供の幼ない心には反抗の焰が燃える。はじめて不正の感じが彼の心に苦痛を注ぎこむ。涙がぽろぽろと流れ出る。可憐な子供は四邊の空氣も震ふやうな大聲をたてゝ泣く。私も彼の悲み、彼の怒りに同情する。吾々は周圍を探し、取調べ、搜索する。たうとうそれは園丁の仕業だといふことを發見して、園丁を呼んで來る。

しかし、吾々は大變な勘違ひをしてゐるのである。園丁は吾々の不平の原因を知ると、吾々よりも一層大きな聲で彼の不平を鳴らす。一體何と言ふことです！ 私の仕事をこんなに臺なしにしたのは貴方がたぢやありませんか！ 私はこゝへマルト瓜の種子を蒔いて置いたんです。この種子は大變珍らしいものだと言つて貰つたので、大きくなつたら貴方がたにも御馳走しようと思つて樂しみにしてゐたのですよ。ところがどうです、貴方がたは、此處へつまらない蠶豆を植ゑる爲めに、もう芽を出してゐた私の瓜を臺なしにしてしまつたぢやありませんか。この種子は掛替へのない種子なんです。貴方がたは私に取り返しのつかない間違つたことをなさつたのです。そして貴方がた自身も美味しい瓜を食ふことが出來ないやうにしてしまつたのです。

ジャン・ジャック

私たちを許して下さい、ロベエルさん。貴方はこゝに貴方の勞力と骨折とを仕拂ひました。私たちが貴方の仕事を臺なしにしたのは、重々私たちが惡いことは私にわかります。しかし私たち

は貴方に別のマルト瓜の種をもつて來てあげます。そして私たちはこれから、私たちよりも先に、他の人が手をつけてゐるかどうかを知るまでは、土地を耕さないことにしませう。

ロベエル　それがようございます！　さうすればもうわざわざこんな仕事を爲さることはいりますまい。何故といひますなら、もう耕してない荒蕪た土地はありませんから。私は、親父が開拓して呉れた土地を耕してゐるのです。誰もさうしてゐるのです。そして貴方がたが御覽なさる土地には皆、ずつと以前から持主がついてゐるのです。

エミイル　ロベエル小父さん、それではマルト瓜の種子が臺なしになるやうなことはしよつちうあるでせうね？

ロベエル　どういたしまして、坊ちやん、貴方のやうにいたづら好きの坊ちやんにはそんなに度々お目にかゝりませんからね。誰だつて隣の家の庭に手を觸れるやうなことはないのです。誰だつて自分の仕事を邪魔されたくないから、他人の仕事も尊重するのです。

エミイル　だけど、僕には庭がないんだもの。

ロベエル　そんなことは私の知つたことですか？　貴方がたが若し私の庭を荒しなさると、私はこれから私の庭で貴方がたを遊ばせません。御承知でせうが、私だつて私の骨折を無駄にされたくはないのですから。

ジャン・ジャック　何とか一つロベエルさんにそこの所を折れて頂くわけには參らんでせうか？　そして私ども、つまり私の幼い友達と私とに、この庭の隅を耕さして頂くことにして、その代り、出來た作物の半分をロベエルさんにあげるといふやうな具合に話をつけて頂けないものでせうか。

ロベエル　それなら私は無條件で耕さしてあげます。しかし記憶えてゐて下さい、若し貴方がたが私の瓜に觸つたら私も貴方がたの蠶豆を掘り返してしまひますよ。

子供に極く初歩の種々の觀念を教へ込まうとする此の企ての中で、吾々は所有の觀念といふものはその源をたづねると自然に、勞働による先取權といふ觀念にまで溯つてゆくことを知る。これなら簡單明瞭でどんな子供にでも理解ができる。こゝまで來れば、所有權及び交換の觀念までは一歩しかない。そこまで行つたら、一寸停止しなければならぬ。

尙ほ、諸君には、私が、こゝで二頁位に書いた説明は、實際には恐らく一年もかゝる仕事だといふこともわかる。といふのは道德的觀念の發達を記すのに、あまりぐづぐづしても居られないし、又一歩一歩に力を入れて説明してゐることも出來ないからだ。若い教師諸君は、此の實例をよく考へて、何事によらず、諸君の教訓は言葉よりも行爲で示すべきであるといふことを記憶されんことを私は切望する。何となれば、子供といふものは自分の言つたことや他人から言はれたことはすぐに忘れてしまふけれども、自分のしたことや、人からされたことは容易に忘れないものだからである。

此のやうな教訓は、既に私が言つたやうに生徒の性質が溫和であるか、或はあばれ者であるかにより、それを與へる必要が早くから生ずる場合とおそくまで生じない場合とあるから、これを與へる時期を適當に加減しなければならぬ。此の教訓の與へかたは一目瞭然である。けれども困難な事柄に於いては重要なことを一つでも逸してはならないから、もう一つ例を擧げよう。

諸君の氣むづかしい子供は、觸るものは何でも壞してしまふ。その場合に諸君は怒つてはならぬ。子供が壞しさうなものは皆子供の手の屆かない所へやつて置くがいゝ。子供が自分の使つてゐる道具を壞したら、直ぐに代りのものを與へないで、それが失くなつたことの不便を子供に感じさしてやるがいゝ。若し子供が自分の室の窓を壞したら、風邪を引いてもかまはないで、晝も夜も風が這入り放題にしておくがいゝ。子供が馬鹿になるよりは風を引いた方がましだからだ。彼が諸君に不便を與へたことはこぼさないで、第一に子供に不便を感じさせるやうにするがいゝ。そして最後に何も言はないで窓を修繕させるがいゝ。若しそれでも亦彼が窓を壞したら、今度は方法を變へて、彼に無愛想に、しかし少しも怒らないでかう言ふがいゝ。窓は私のものだ、私が自分で入れさせたのだ、そしてそれを壞さないやうに大事にしてゐるのだと。それから子供を窓のない暗がりの中に閉ぢこめてしまふがいゝ。すると子供は思ひがけない遣り方をされて、大きな聲で泣き出す。それでも誰もそれを開けてやらないでゐる。するとすぐに彼は泣き疲れてしまつて、調子をかへる。彼は不平を訴へ、ぶつぶつとこぼす。そこへ召使が現れて來る。いたづら子供はそこから出してくれと賴む。それには何とも答へないで召使は私も窓硝子は壞さないやうに氣をつけてゐるのですと答へて去つてしまふ。數時間もそのまゝにしておけば、遂に子供は倦怠を感じ、自分のしたことをきもに銘じて來る。その時に誰かゞ行つて、もうこれから決して窓

硝子を壞さないから、その代り自由にして貰ふやうに約束してはどうかといふやうに暗示する。丁度それは彼にとつて誂へ向きだ。そこで子供は諸君に來て會つて呉れと賴むだらう。すると諸君は行つてやる。彼は諸君に、もう決して壞しませんからと誓言をする。そしたら諸君はすぐにそれを快諾して彼に『それはいゝ考へだ。お互にその方がいゝ。何うして貴方はもつと早くそれに氣がつかなかつたのか』と言つてやる。それから諸君は、その約束に念を押したり、駄目を押したりしないで、喜んで子供を抱擁してやり、恰も彼が宣誓でもしたかのやうに、これを神聖で犯すべからざる約束だと考へて、すぐに彼を彼の室へつれて歸る。こんな風にしたなら、子供はこの約束の信用と效力とについてどんな考へを持つと、諸君は考へるか？　若し私が間違つてゐないとすれば、前から墮落してゐる子供は別として、かうした指導法を試みて見た後で、故意に窓硝子を壞すやうな子供は地上に一人も無いであらうと思ふ。このことをすつかり順序を追うて考へて見るがいゝ。このいたづら兒は蠶豆を植ゑるための穴を掘つてゐながら、それはやがて彼自身の智識が彼を埋めてしまふ穴を穿つてゐるのだとは夢想だもしてゐなかつたのだ(註一二)。

(註一二)　その上、子供の約束を守る義務が、それを守るのが利益だといふ點だけで彼等の心の中にしつかり植ゑつけられないとしても、彼等の内心に生長しつゝある意識が、間もなく此の義務を、良心の法則、生得の原則として彼の心に刻みつけるであらう。而かもこれが發達するためには適當な經驗を得てくるだけで澤山だ。この最初の一擧は人間の手で刻みつけられるのではなくて、萬能の神によつて吾々の心に刻みつけられるのである。契約と契約によつて生じた義務との第一法則を人間社會から取り去れば、人間の社會の凡てのことは空の空なる幻影となつてしまふ。自分の利益ばかりで約束を守る人の約束は、約束なぞしないと同じ位あてにならぬ。或はせいぜいのところで狡猾な博徒のやうに、先にもつと大きな利益があるから約束を破らずにゐるだけなのだ。この原則は重大至極なものであつて、もつと深く考究する値打のあるものである。何となれば人間の自己の内部に於ける矛盾爭鬪は此處に始まるからだ。

今や我々は道德の世界に這入つて來た。こゝに惡のための入口が開放される。約束や義務とともに欺瞞と虛僞とが生まれる。してはならぬことをすることが出來るやうになるや否や、すぐに吾々はそのしてはならなかつたことをかくさうとする。利益でした約束はすぐもつと大きな利益がそれを破らせる。たゞ何うしたら罰せられずに約束を破ることが出來るかといふことだけが問題となつてくる。すると吾々は自然に隱匿したり嘘をついたりする。吾々は惡を未然に防ぐことが出來なかつたものだから、今度は惡を罰しなければならない破目に陷る。これは誤謬をもつて始つた人生の不幸だ。

私が前にも度々言つたやうに、罰を罰として子供に科してはならない。それは常に彼等の惡行の自然の應報として來るやうに仕向けなければならぬ。そして諸君は彼等が嘘をついたからといつて咎めず、嘘をついたからといつて一々彼等を罰しないで、彼等が嘘をついた時には嘘をつくことから生ずる惡い結果が悉く彼の頭上にふりかゝつて來るやうにさせねばならぬ。例へば嘘をつけば眞實を言つてもそれを信じて呉れる人がなくなるやうにするとか、惡いこともしないのに、いくら辯解しても、惡いことをしたといつて責められるとかいふ風に仕向けねばならぬ。しかし吾々は嘘をつくといふことが子供に對してどんな意味をもつてゐるかを說明しよう。

嘘に二つの種類がある。それは過去に關する事實の嘘と、未來に關する當爲の嘘とだ。第一の嘘は、吾々がしたことをしないと言つたり、しないことをしたと言ひ張つたりする時につく嘘だ。卽ち一般的の言葉で言ふと、事實に反したことを、知つてゐながらわざと言ふ場合だ。第二の嘘は、吾々が實行する氣のないことを約束する時、卽ち一般的に言へば、實際思つてゐることゝ反對の企圖を人に告げる時に起る。この二種の嘘は時には混淆してゐる時もある(註一三)。だがこゝ

では此の二つの相違を考へて見ようと思ふ。

(註一三) たとへば惡いことをした爲めに訴へられた罪人が自分を善人だと云つて辯護する場合には、彼は事實と當爲との嘘を二つとも吐いてゐるのだ。

他人の援助の必要を感じてゐる人、及び何時も他人の親切を受けてゐる人は、他人を欺いたところで何の利益もない。反對に他人がありのまゝに見て呉れた方が彼の爲めになる。でないと他人に何うしたら彼の利益になるかを見誤られる虞れがある。だから現實の事實について嘘をつくことが子供にとつて不自然だと言ふことは明らかであつて、子供が嘘をつく必要は、服從の法則から生ずるのだ。服從することが辛いから子供は出來るだけこつそりと服從を避け、その場ですぐに罰を受けたり叱られたりしたくないといふ考へを壓倒してしまふ。自然な自由な教育を受けてゐる子供ならどうして諸君に嘘をつくものか？　何を諸君に隱し立てをする必要があらう？　諸君は子供を叱りもせず、罰しもせず、子供に何も無理な要求をしないのだから、必ず子供は彼の幼いお友達に對すると同樣に、無邪氣に凡てのことを諸君に打明けて話すだらう。子供は誰に告白するのがより危險かといふやうなことはわからないのだ。

當爲に關する嘘は、それよりも一層不自然である。何となれば、するとか止めるとかいふ約束は契約であつて、それは自然の狀態から外れ、自由に牴觸してゐる。加ふるに子供のする約束は凡てそれ自身無效なものである。彼等の狹い眼界は現在以上には出ないから、彼等は約束をしながら自分で何をしたのか知らないでゐる。子供は約束をしながら嘘を吐いてゐるといふことが殆んど出來ない。何となれば彼等が嘘をつくのは現在その場だけのやりくりをする爲めだから、現

在その場に結果を生じない手段は何であらうと凡て同じだからだ。子供が未來の事を約束するのは、本當は何にも約束しないのと同じなのだ。彼等の想像力はまだ眠つてゐて、未來と現在とに擴がることが出來ないのである。若し彼に、明日窓の外へ飛び下りると約束すれば、鞭で打つことを許して、その代りに一包の菓子をやるといつたら、彼は二つ返事で約束するだらう。法律で子供の約束を無效と見做してあるのは此の爲めだ。だから父親や教師が、この約束は必ず履行しなければいけないと嚴格に要求して子供に履行させたとしても、それはたゞ子供が約束しなくとも履行したに相違ない場合だけに限るのである。

子供は約束しても、何をしたのか知らずにゐるのだから、約束をしながら嘘を吐いてゐるといふことは出來ないわけだ。然し約束を破つた時は別問題だ。それは一種の溯及的嘘言（マンヴァンジ・ド・トロアクチブ）である。何となれば、彼はその約束したことはよく記憶えてゐる。しかしそれを守ることがそんなに重大なことだといふことを知らないのだ。子供は未來を見越すことが出來ないから、事物の結果を豫見することも出來ない。從つて約束を破つても、子供は少しも彼の年齢に相應な理性に反したことをしたわけではないのだ。

だから子供の嘘言は、凡てその教師の仕業だといふことになる。そして彼等に眞實を言ふことを教へようとするのは、彼等に嘘を吐くことを教へることに他ならぬのである。諸君はどんなに規則を立てたり、取締つたり、教へたりすることに熱中しても、それでは目的を達するに十分な手段が見つからない。それで諸君は根柢のない格言や、理由のない教訓によつて、子供の精神にどうかして新しく喰ひ入らうとする。諸君は子供が何も知らないで正直でゐるより、色々な教訓を知つて嘘を吐くのがいゝと思つてゐるのだ。

生徒に對して實地の教訓しか與へず、彼等が賢くなるよりは善良である方を望んでゐる吾々は、子供が僞り隱しをすることを慮れるから、子供に眞實を言へとは强要しない。又子供が破りたくなるやうな約束を、彼等に對してしない。

若し私の留守の間に、誰か惡いことをして誰がしたのか私にわからない時には、私はそれについてエミイルを咎めたり、これはお前がしたのかと訊ねたりはしない（註一四）。何となれば、そんなことをするのは取りも直さず彼にそれを否認することを教へるに他ならないではないか？　若しも彼が氣むづかしい氣質の子供で、何うしても何か約束しなければならぬやうな場合には、私は、注意して私の方からは言ひ出さないで彼から言ひ出させるやうに仕向ける。そして彼が約束を果したら、いつでも、即座に眼に見える利益が生じて來るやうにし、若し約束を果さなかつたら、この嘘の爲めに種々の災厄が彼の上に降りかゝつて來るやうにする。而かもこの災厄は教師の復讐から來るのではなくて、事物の秩序から自然に生じて來るやうに仕向ける。しかしながら、エミイルにはこのやうな殘酷な手段に訴へる必要はない。それどころか、彼はずつと遲くなるまで嘘をつくといふことがどんなことか知らず、それを知つても嘘をつくのが何のためになるのかわからないものだから、きつと何うして人は嘘をつくのだらうと非常に驚くにちがひない。私は殆んどさう確信してゐる。私が彼の幸福を他人の意志や、他人の判斷から獨立させればさせる程、私は彼から嘘を吐いても何の利益にもならないやうにしてやることになるのだ。このことは極めて明白である。

（註一四）このやうな質問くらゐ不謹愼な質問は又とない。特に子供に罪がある場合は尙ほ更だ。そこで、若し子供が、自分の僞たことを諸君が知つてゐると思へば、子供は諸君が彼にわなをかけようとしてゐるのだと思ひ、必ず諸君に反抗す

るやうになる。又若し、子供が、諸君が知らないと思へば、子供は、何うして自分の過失を他人に見附かるものかと考へる。かうして、諸君の不謹慎な質問のために、子供ははじめて嘘をつくことの誘惑に陷るのである。

吾々は急いで教へようとしなければ、急いで强要しなくともすむ。そして、適當な時期が來るまでゆつくりとしてゐて何も要求しないでゐられる。やがてその時になると、まだ墮落してゐない子供なら、自分で修養する。けれども、教師が輕卒で、何うしていゝかわからず、分別もなく、選擇もせず、やたらに、あれやこれやと約束をさせると、子供はうるさがり、約束にうんざりして、これを輕んじ、忘れてしまひ、遂には蔑視するやうになり、まるで約束を無效の古證文のやうに見なして、約束をしたり破つたりする約束ごつこに馴れつこになつてしまふ。だから若し諸君が、子供に約束を守らせたいと思ふなら、無暗に約束をしないやうに氣をつけねばならぬ。

エミイルル

私がこゝに述べて來た細かい事柄は、子供に課されるその他の一切の義務に對しても、多くの點に於いてあてはまる。かうした義務はたゞ子供にその義務を憎ませるばかりでなく、實行出來なくしてしまふものだ。諸君は子供に美德を說法してゐるつもりで、子供に凡ゆる惡德を愛させるやうにするのだ。惡德を禁じながら惡德を與へてゐるのである。諸君は子供等を信心敬虔にしようとして、子供等が教會が厭になるまで、子供等を教會へ連れて行く。諸君は子供等が神樣に禱らないでもいゝ幸福な時間を望むやうになるまで、子供等にお禱りを喋舌ることを教へる。諸君は子供に慈善を教へ込まうとして、自分自身ではまるで施物を與へることがいやであるかのやうに、子供にばかり物を與へさせるのである。施物を施さねばならぬのは教師であつて斷じて生徒ではない。彼がどのやうに生徒を變するにしても、彼は此の名譽を生徒と競はなければならないのだ。教師は生徒は施物をするにはまだ若すぎるといふことを判斷させなければならないのだ。

施物は自分の與へたものゝ値打を知り、且つ自分の同胞がそれを必要だといふことを知つて居る大人のすることである。かういふことを何も知らない子供が、施物をしても何の功德も無い。子供は慈悲から施物をするのでもなければ、親切からするのでもない。おまけに、諸君のすることと自分でしたこととの經驗によつて、施物を與へるのは子供ばかりであつて、大人になれば慈善の必要がないのだと信じて來ると、子供が物を與へるのは殆んど恥づべきことである。

子供が與へさせられるものは、彼等がその價値を知つて居ないものばかりだといふことは注目すべきである。即ちそれは彼等がポケットに携へてゐる金屬片であつて、子供にとつてはたゞポケットに入れて置くだけの役にしかたゝぬものだ。子供は一片の菓子を與へるよりも、寧ろ百枚の金貨をよろこんで與へるだらう。しかし此の氣前のいゝ子供に、彼に取つて貴重な物、玩具、菓子、自分のおやつを與へさせようとする時、諸君は本當にその子供を氣前のいゝ子供にしたか何うかといふことが解るであらう。

世人は此の外に又別な手段を行ふ。即ち彼等は子供が與へた物を直ぐに又子供に返してやる。そこで子供は自分に戻つて來ることをちやんと知つてゐるから何でも他人に與へる習慣が付くのである。私は此の二種の氣前の好さ、即ち子供等が自分に取つて無用な物を與へるか、又は自分に戻つて來るのをちやんと知つてゐる物を與へるか以外には、子供の氣前の好さを殆んど見たことがない。ロックは最も物惜しみをしない人は最大の分前を得るものだといふことを、經驗に由つて子供が信ずるやうに仕向けるがよいと言つた。これは表面だけ子供を氣前好くして實際は慾張りにするものだ。ロックは而かも附言して、子供等はこれに由つて氣前の好い習慣を作るであらうと言つた。さうだ、卵を一つ與へて牛を一頭取り返さうとする高利貸的な氣前の好い習慣が

出來る。しかし本當によい物を與へるといふ問題になると、こんな習慣などはお拂ひばこだ。彼等は返して貰へなくなると、決して與へなくなる。注意する必要があるのは、手の習慣ではなくて心の習慣である。吾々が子供に敎へる此の他の一切の德行もこれと似て居る。そして吾々は此等の立派な德行を說法して、子供の少年時代を悲哀の裡に浪費するのだ。何といふ美事な敎育だらう！

敎師諸君、こんな見掛け倒しは捨てたまへ、善良と親切とを旨としなさい、諸君の模範が生徒の記憶に刻みこまれ、心の中に沁み込むやうにしなさい。私は自分の生徒に自分の慈善を見て慈善をさせようとは急がないで、それを彼の年頃では出來ない一つの名譽として、おまけに彼が私の眞似をする事が出來ないやうにさへして置いた上で、彼の眼の前で慈善行爲をして見せようと思ふ。何故かといふと子供が大人の義務をそのまゝ子供の義務だと考へ込まないやうにするのが最も重要な事柄だからである。若し子供が、私が貧しい人を助けてゐるのを見て、それに就いて私に尋ねたなら、その時こそ彼の質問に答ふべき時機である（註一五）。『さうだ、金持は、貧乏な人々のおかげで金持になることが出來たのだから、財產なり勞働なりによつて生活することの出來ない人々を皆養つてやると約束をしたのです』。『それなら貴方もさう約束したの？』と彼は問ひ返すだらう。『その通りです。私はたゞさういふ條件づきで私の手を通つて行く財產の持主であるといふに過ぎないのです』。

（註一五）私は子供の好きな時には此の質問に答へないで自分の好きな時に答へる。でないと私自身が彼の意志に服從することになり、又敎師の身分として此の上ない最も危險な從屬狀態に私自らを置くことになるからだ。此の事をよくわきまへて居なければならぬ。

この道理がわかつた後にも、そして吾々がどうすれば子供にそれがわかるかといふことを知つた後にも、エミイル以外の子供は私の眞似をして、金持のやうに振舞ふことがあるかも知れない。かういふ場合には、私は少くとも子供が見榮を張らずにそれを行ふやうに心掛ける。私は私自身の權利を子供が奪つて、子供が物を與へる場合に隱れて與へるやうにさせたい。それは彼の年頃にはよくある欺瞞であり、又私が彼に對して許し得る唯一の欺瞞である。

私は總て此等の模倣的德行が猿眞似的の德行に過ぎないといふこと、どんな善行でも他人が行るから行るといふのではなく、善行であるから行るといふ場合に於いてのみ、それが道德的善となるのであるといふことは承知して居る。しかしながら心が未だ何事をも感じない年頃には、諸君は子供の習慣にさせてやりたいと望む行爲を子供に模倣させて、遂に子供が分別を以つて、善を愛する心から、その行爲を行ふことが出來るやうにしてやらなければならない。人間は模倣する者である。獸類だつてさうである。模倣の趣味は巧く調節された自然性である。それが社會に於いては惡德に變るのだ。猿は人間を恐れてゐるから人間を模倣する、そして他の動物を輕蔑してゐるからそれを模倣しない。猿は自分より優れてゐるものゝすることは善い事だと考へる。ところが人間界のあらゆる人眞似役者どもはその反對に、立派な事柄を眞似てそれにけちをつけ、それを滑稽なものにしてしまふ。彼等は彼等の卑賤な感情の中へ立派なものを引き下げようとする。又彼等は自分が崇拜してゐる事柄を眞似ようとしても、手本を選む上にその惡趣味が現はれる。彼等は自分が賢明になり又は立派にならうとはしないで、寧ろ他人を瞞着しようとしたり、或は自分の才能に對する賞讃を博しようとしたりする。彼等の模倣はいつも吾々が自己の外に出ようとする欲望の中にその根源を有してゐる。若し私の敎育が成功したらエミイルは確かにこん

エミイル

な欲望を抱かないであらう。そこで吾々はかういふ欲望から生れる外見的な善は棄てなければならない。

諸君の凡ゆる教育法を深く研究して見給へ。諸君はそこに、殊に德行及び道德に關する一切の事柄に於いて、悉くあべこべなものを發見するだらう。子供に相應はしい唯一の道德的教訓であつて、しかも人生の如何なる時期に於いても最も重要な教訓は、他人を害するなといふ教訓である。善いことをせよといふ教へでさへも、此の教訓に從屬してゐなければ、危險であり、虛僞であり、矛盾する。世の中に少しも善いことをせぬ人間があるか？　誰だつて善い行ひはしてゐる。惡人でも善人でも同じことだ。惡人は百人を犧牲にして、一人を幸福にしてゐるのだ。そしてこれから吾等の凡ゆる不幸が生じて來るのだ。最も崇高な德行は消極的なものであり、又最も困難なものである。何となればそれには見榮がない、それを爲た人間の心を非常に喜ばせる樂しみ、即ち、誰かゞ自分のしたことを悅んでゐるといふ考へさへも起させないからである。おゝ若し自分の仲間に何等の害をも加へない人があるとすれば、彼は必然的にどんな善行をしたことになるであらう！　その爲めには如何に百折不撓の精神と堅忍不拔の人格とが必要なことであらう！　吾々がそれを成しとげることがどんなに偉大であり困難であるかを知るのは、此の格言について考へてみる時ではなくてそれを實行しようとする時だ(註一六)。

(註一六)　他人を害するなといふ教へは、人間の社會から出來るだけ獨立せよといふ教へを含んでゐる。何となれば社會に於いては、一人の人の幸福は必らず他の人の不幸となるからだ。此の關係は事物の本質に存するものであつて何人もそれを變ずることは出來ない。諸君は此の原則に照らして社會的生活をしてゐる人間と孤獨的生活をしてゐる人間とを比較し、何方がいゝかを研究せられたい。或る知名の著述家は、惡人以外には孤獨で生活する者はゐないと言つてゐるが、私はむしろ

善人以外には孤獨で生活する者はゐないと言ふ。此の言葉は前の言葉よりも多少金言的ではないとしても、前者よりも一層眞實であり且つ一層論理的である。若し惡人が一人でゐたならば、彼は何んと害惡をすることが出來ようか。惡人が他人を害するためにわざを拵へるのは、彼が他人の間に居る時である。若し此の議論を善人に應用しようと思ふならば、此の註を附けた文章の中に私の回答がある。

以上によつて、子供に教訓を與へるに當つて私が諸君に注意して貰ひたいと思ふ事柄が、いくらかわかるであらう。そして此の教訓を與へないと子供自身にも他人にも害を及ぼし、特に後日子供に矯正することの困難な惡い習慣をつけることが往々にしてあるのだ。だが此の教訓を與へる必要は、適當に育てられた子供には滅多に起らないものであるといふことを信じてよい。何となれば子供の心に惡德の種子さへ蒔かなければ、子供等は强情張りや、意地惡や、嘘吐きや、慾ばりにはならないからである。故に私が右に述べた事柄は、一般的な規則といふよりも寧ろ例外の場合に當てはまるのである。しかし子供がその本來の位置を脫して、大人の惡德に感染する機會が多ければ多いほど、此等の例外の場合が生ずることが多い。世間の中で育てられた子供には、世間と交渉の少い處で育てられた子供に對してよりも、一層早熟の教育を與へなければならない。そこで此の孤獨的教育は、子供が自然に成熟するに十分な餘裕を與へるといふ點だけから言つても優れる居るのである。

これとは全く反對の種類の例外がある。幸ひにも生れながらにして自己の年齡の水準以上の天分を具へてゐる生徒がそれだ。世の中には生涯子供の域を脫しない人々があるやうに、言はゞ全く子供の時代を通らずに、生まれながらにして殆んど大人と變りない人々がある。だが困つたことには、此等の場合は極めて稀れであり又甚だその見分けがつかぬ。ところで母親達は皆、世の

中には神童の子供もあるといふことを知ると自分の子供こそその神童だと思ひ込む。甚だしきは子供には全く普通な平凡な發育の徴候を非凡な天才の徴候だと間違へる。活潑なこと、血氣盛んなこと、輕卒なこと、潑剌たる無邪氣さ等は皆少年時代の特徴であつて、これ等はこの子供がただの子供であることを最も好く示すものだ。遠慮や慣習に拘束されることがなく、始終喋らせられ、何を言つてもかまはぬ子供が、偶然に何か賢しい事を言ふのが不思議だらうか？　若しそんなことが一度もなかつたらそれこそ不思議だ。一千の嘘の中でまぐれあたりにも一つも本當の事を豫言しない占星者が不思議だと同じやうに不思議だ。嘘ばかり言つてゐてもいつかは眞實にぶつゝかると、かつてアンリ四世は言つた。誰でも何か氣のきいた洒落を言はうと思へば、平凡なことを矢鱈に喋つてゐればその内にはぶつゝかる。社會に名を揚げる爲めにそれだけしか持合せのないお歴々を、神よ、惡から守護したまへ！

素晴らしい思想が、子供の頭へ浮んで來ることがあるかも知れない、といふよりも寧ろ素敵な言葉が子供の唇から洩れることがあるかも知れない。それは素晴らしい値打のダイヤモンドが彼の手に這入ることがあるかも知れないやうなものだ。だが此の場合、その思想でもダイヤモンドでも、子供のものではない。此の年齢の子供では眞に彼のものといふものは何一つない。子供の發する言葉はその言葉が吾々に對して有つてゐる意味を、その子供に對しては有つてゐないのだ。同じ言葉でも大人と子供とでは意味がちがふ。たとひどんなに多くの考へを子供がもつてゐたとて、その考へは子供の頭の中では秩序も聯絡もないものだ。彼の考へることには何一つきまつたもの、確かなものはないのだ。諸君の所謂神童なるものを調べて見給へ。たまには彼の精神活動が極めて敏活で、明晰な想想が雲間を洩れて出ることを發見するであらう。ところが此の同じ精

神が恰も深い霧に包まれてゐるかのやうに遲鈍で活氣のないやうに見えることが一層屢々あるだらう、時には子供は諸君を追ひ越すこともあるが、時には動かずにゐることもある。そこで或る瞬間には諸君は彼を天才と呼び、次の瞬間には彼を馬鹿と呼ぶだらう。然しそれはどちらも間違つて居る、彼は子供なのだ。或る瞬間には高く空中を飛翔するが、忽ちにして又巣の中へ舞ひ落ちて來る鶯の子なのだ。

故に外觀には頓着しないで、子供はその年齢に從つて取扱ひ、且つ彼の力を過度に使用させてはならぬ。でないと凡てが蒸發してしまふ惧れがあるからだ。そして最初の酒氣が發散してしまつたら、殘餘のものは、後年になつて熟となり眞の力となるやうに保存し壓縮して置くがいゝ。でないと諸君の時間と骨折りは失はれ、諸君のやつたことはすつかり臺なしになるだらう。そして諸君が愚かにも此の醉ひ易い酒氣にうつかり陶醉してしまつたら、その後には、氣の抜けた搾糟だけしか殘らなくなるだらう。

それを消耗してしまはないやうに心せねばならぬ。子供の幼い頭腦が自然に溫まつて來て、沸騰し始めたら、はじめの内は自由に醱酵させて置くがいゝ。そして諸君が手を加へてそれを促進し

愚鈍な子供は成長すると普通の人間になる。私はこれ以上に一般的な、而かも確實な經驗を知らない。本當の馬鹿と、强盛な精神の徴候である表面的の見掛けだけの馬鹿とを識別することくらゐ困難なことは又とない。一見したところでは此の二種の極端が同じやうな徴候を示してゐるといふことは不思議に思はれる。が、それは當然さうなければならぬことだ。何故かといふと人間が未だ本當の觀念を有つてゐない年頃に在つては、天才と天才でないものとの相違は、凡才は虚僞の觀念ばかりを取り入れるが、反對に天才は虚僞の觀念ばかりしか見出さない爲めに、どの

やうな觀念をも全く受け入れないといふ點だけだからである。それ故に、一方は何も出來ないし、他方は自分に適したものが何もないために、兩方とも馬鹿のやうに見えるのである。此の兩者を識別することの出來る唯一の徵候は、偶然の機會であらはれる。卽ち天才は偶然の機會から理解することの出來る觀念にぶつゝかることがあるが、馬鹿は何時までたつても同じである。小カトオは子供の時には、家の中で白痴のやうに見えた。彼は默つてゐておまけに强情であつた。誰も彼を馬鹿だと思つてゐた。彼の叔父が始めてロオマの獨裁官のシイラの控（アンチシャンブル）の間で彼の人物を認めたのであつた。若し彼が此の控の間へ行かなかつたら、彼は大人になるまで馬鹿で通つただらう。若しシイザアが生まれなかつたならば、世人は、彼の不幸な天才を見拔き、且つ其の遠大な抱負をずつと前に豫言した此の同じカトオを恐らく生涯夢想家扱ひにしたであらう。性急に子供を判斷する人々はよく間違つた判斷をするものだ。彼等は子供自身より一層子供じみてゐることが屢々ある。私は自分がその人の友人であることを名譽としてゐる一人の中年の人物を知つてゐる（註一七）。彼は家族や友人から馬鹿だと思はれてゐた。ところが彼の素晴らしい頭腦はひそかに成熟してゐたのだ。一朝にして彼は哲學者としてその名を現はした。私は後世の人々が彼に當代の最も偉大な思想家、最も深奥な哲學者の中の名譽ある高い位置を與へるだらうと信じて疑はぬ。

（註一七）これはアベ・ドウ・コンヂヤックをさしたものである。

幼年時代を尊重せよ。そして善にまれ惡にまれその判斷を急いではならない。例外の天禀が自ら顯はれ、それが證明され、確かにさうだとわかるまでは何時までも、滅多に特殊の教育法を採用してはならぬ。諸君が自然の仕事に代つて教育に手を出す前に長い間自然に仕事をさせて置くがいゝ。でないと諸君は自然の仕事を邪魔する惧れがある。吾々は時間の價値を知つてゐるから

それを空費したくないと諸君は言ふ。諸君は、時間を惡用するのは全く何もしないでゐるより以上の大きな時間の空費であり、間違つた教育を受けた子供は、全く教育を受けぬ子供よりも一層愚鈍であるといふことを知らないのだ。諸君は子供が何もしないで幼年時代を暮らすのを心配してゐる。何んといふことだ。幸福でゐることが何もしないことだと思はれてゐる國家の中で、唯だお祭だり、走つたり、することが何もしないことなのか？　子供は全生涯の中で二度とこんなに忙しいことはないだらう。プラトオは、極めて莊重な教育論だと思はれてゐる。彼は子供等に遊ぶことを十分に教へてりや、遊戲や、歌や、娛樂でのみ子供等を教育して居る。彼は子供等に遊ぶことを十分に教へてしまへば、已に彼の目的を達したつもりなのだと思はれる位だ。又セネカは古代ロオマの青年に就いて次のやうに語つた、「彼等は何時でも立つてゐた、彼等は坐つて學ばねばならぬやうなことは一切教へられなかつた」（註一八）と。その爲めに彼等は成人の後に値打が下つただらうか？　だから諸君は、所謂怠けてゐるといふことを決して恐れることはないのだ。生命を全部有效に使ひたい爲め、睡眠することを欲しない人があつたら、諸君は何と思ふか？　諸君は言ふであらう、彼は氣狂ひだ、彼は時間を有效に使つてゐるのではない、彼は自ら時間を避けてゐるのだ。睡眠を避けようとして、死に向つて走つてゐるのだと。此の二つの場合は同じことであつて、幼年時代は理性の睡眠であるといふ事をよく考へねばならぬ。

（註一八）Nihil liberos suos docebant, quod discendum esset jacentibus. Epist. 88.…これと同じ文句はモンテエニュにも見出される。Liv. II. chap. XXI　彼は又次のやうにも言つてゐる（Liv. I. chap. XXV）「プラトオが、その法律に於て、彼の都市の青年の遊びにどれ程留意し、彼等の競技、遊戲、歌、跳んだり踊つたりすることをどれだけ細說してゐるかは驚くべきものだ。彼は體育の方面に多くの教訓を說いて、學問や文學については、あまり意を拂つてゐない」等。

子供が一見容易に覺えるやうに見えることは子供の破滅の基である。世人は此の容易に覺えるといふことは彼等が何も覺えてゐないことの證據でさへあるといふことに氣がつかないのだ。子供の滑らかな、すべ〳〵した頭腦は、さながら鏡のやうに與へられた物を反映する。だがあとには何物も殘らず、何物もその中へはしみ込まない。子供は言葉だけは記憶してゐるが觀念は反射し返されてしまふ。子供の言葉を聞いてゐる人たちには皆その言葉の意味が解るが、當の子供にだけは意味がわからないのだ。

記憶と理性とは全く異つた機能だが、此の二つは別々には決して本當に發達する氣遣ひはない。理性の生ずる以前では、子供は物の寫象(イマージュ)は受け入れるが觀念(イデー)は受け入れない。そして此の兩者の間には次のやうな相違がある。即ち、寫象は單に感知し得る物體そのまゝの畫に過ぎぬが、觀念は樣々な關係に依つて決定された物體の概念(コンセプション)である。寫象は、これを想起する精神の中に單獨に存在し得るが、一切の觀念は他の觀念を假定する。想像する時には單に見ればいゝのだが、認知する時には比較する。吾々の感覺は純然たる受働的なものであるが、吾々の知覺又は觀念は判斷を下す能動的精神から生まれる。此のことはすぐ後で證明する。

だから、私は、子供は判斷する事が出來ないから從つて眞の記憶をもつてゐないと言ふのである。彼等は音響、形、感覺等を記憶してゐる。又稀れには觀念も、更に一層稀れには觀念と觀念との關係をも記憶してゐることがある。諸君は私の說に反對して、子供等が幾何學の初步を學ぶことがあるのは私の說に對する反證だと思つて居る。ところがそれはまるで反對だ。それは私の說を證明してゐるのだ。諸君は、子供等が自分自身で推理することは勿論できないのみならず、他人の推理を記憶することすらも出來ないといふことを證明して居るのだ。何故かといへば、子

供等がその獨特の方法でやる可愛らしい幾何學といふものを驗べて見たまへ。さうすれば子供等が圖形と證明の文句とを丸呑みに記憶して居たに過ぎないといふことがわかる。だから少しでも新しい故障が出るともう駄目だ。圖形を逆にするともう何も出來ない。彼等の知識は凡て感覺以上には出でない。理解まで達してゐるものは全くない。彼等の記憶すらも他の機能と殆んど變りはない。だから彼等は成長した曉には、多くの場合、子供の時に習つた言葉の意味を再び習はなければならないのである。

けれども私は子供が全く何等の推理(註一九)をも有つてゐないなどとは全然考へて居ない。反對に、彼等は彼等の認知したものゝ中で、現在の、且つ感知し得る利益に關する事柄に關しては、立派に推理すると私は思つて居る。たゞ世人が思ひちがひするのは子供の知識についてゞある。といふのは世人は子供等がもつてゐない知識を、もつて居るものと思ひこみ、子供等に理解の出來ない事柄を推理させるからである。今一つの間違ひは子供等に全く關係の無い事柄、例へば將來の利益であるとか、成長した曉の幸福であるとか、或は彼等が成人した時に世人の尊敬を博するとかいふ事柄に、子供等の注意を向けさせようとすることである。未來を先見する力を全然もたない者に話しかけられたときは、かういふ事柄は絕對に無意味な言葉でしかない。ところが此等の可憐な子供に强制される一切の勉强は、彼等の精神には全然緣のない物に向けられてゐるのだ。だから吾々は子供が、何れだけの注意を此等のものに拂ひ得るかを判斷しなければならぬ。

(註一九) 長い著作を書くに當つては、同じ言葉に常に同じ意味を與へることは不可能であるといふことに私は物を書いてゐるうちに百度も氣がついた。吾々の思想の細かい變化を遺憾なく表現することの出來る名辭や語調や文句を十分に供給することの出來るやうな豐富な言語はないのである。凡ゆる名辭の意義を限定し、限定されたものに絕えず定義を置き換

へる方法は非常にいゝことであるが、然し實行し難いことだ。何故かといふと如何にして吾々は循環を脱することが出來るか。若し言葉を使はずに定義をすることが出來ればそれでいゝだらうが。それにも拘らず、私は吾々の貧しい言葉でも意義を明白にすることが出來ると思ふ、それは常に同じ言葉に同じ意味を與へることに由つてゞはなく、吾々が言葉を使用する度毎に吾々がその言葉に與へた意義がその言葉と結合してゐる觀念に由つて十分に限定され、その文字の使つてある文句が一種の定義となるやうにすることによつてゞある。時としては私は子供は推理が出來ないと言ひ、時としては子供に極めて精密な推理をさせる。しかし此の場合私の考へは矛盾してゐないと私は思ふ。けれども私の言ひ表はし方が屢々矛盾してゐることは否むことができない。

エミイル

自分の生徒に與へてゐる教訓の功能を得意然として並べる先生方は、それとは別のことを言ふ義務があるのだ。しかし彼等自身の行爲によつて、彼等の考へも私の考へと別段變りのないことがわかる。何故なら、結局彼等は何を生徒に教へて居るのか？　言葉だ！　言葉だ！　言葉ばかりだ！　彼等が子供等に教へて居ると自慢してゐる色々の知識の中で、彼等は、子供等に本當に有益なものを選むのを注意して避けてゐる。何故ならそれは事物の知識であり、從つて彼等にはそれを考へることに成功することが覺束ないからだ。ところで吾々が術語さへ知つてゐればその學問を知つてゐるやうに見える學問、即ち紋章學、地理學、年代記、語學等は、大人にさへ非常に緣の遠い研究であり、況んや子供には一層緣の遠い研究であつて、若し此等の學問の何れかが生涯の中に一度でも子供に役に立つたらそれこそ不思議だ。

諸君は私が無用な教育云々の中に、語學の研究まで加へたのを見て驚くだらう。だが諸君は私がこゝで極く幼い子供の學問の話をしてゐるのであることを忘れてはならない。そして私は諸君が何と言はうとも、天才は別として、さうでない限りは、十二歳乃至十五歳までの子供で本當に二箇國語を覺えたものがあるとは斷じて信じない。

第二篇

若し語學の研究が單に單語の研究、即ちそれを表現してゐる文字や音の研究であるならば、これは子供にふさはしい研究であるかも知れない。しかしながら言語は符牒が變ればそれが表現してゐる觀念も變つて來る。精神は言語でつくられ、思想は語句で染められる。共通なものは理性だけだ。各國語の精神はそれぞれ獨自の形式を有つて居る。そして此の差異は、半ば國民性の相違がその原因となり、或は結果となつて居る。此の推測は、全世界の總ての國民に於いて、言語は風俗の變遷に伴つて變り、風俗と共に保存され或は變化してゐるといふ事實に依つて確められてゐるやうに思はれる。

慣習に依つて子供は此等の諸種の形式の中の一を教へられる。そしてそれは彼が大人になるまで記憶してゐる唯一の言語である。二箇國の言語を覺える爲めには、彼はその觀念を比較することが出來なければならない。識別するのさへやつとやつとの觀念を、何うして彼が比較することが出來ようか？　凡ゆる事物が彼にとつて千樣の符牒をもち得る。だが夫々の觀念は一つの形式しか有ち得ない。そこで彼は唯だ一の言語を學ぶことが出來るに過ぎない。諸君は數箇國の言語を知つてゐる子供があると私に言ふかも知れぬが、私はそれを否認する。私は五六箇國語を話すと思つてゐる神童達を見たことがある。私は彼が最初はドイツ語で話し、次ぎにそれをラテン語で、それからフランス語で、イタリヤ語で話すのを聞いた。成程彼等は六箇國の言葉を用ゐた。しかし彼等はいつでもドイツ語ばかりを話してゐたのである。一言で云へば諸君はその望む通りの澤山の類語を、子供に教へることが出來る。けれども諸君は單語を變へてゐるばかりで言語を變へてゐるのではない、彼等は一箇國語だけしか知ることはできないのである。

子供等が死語を特に教へられるのは、人々が彼等の無能を蔽ふためである。死語になると、も

うそれを檢證する審判者がゐないからだ。此等の言葉を日常に用ゐる習慣は久しい以前に消滅してゐるから、彼等は書物の中に書いてある死語を眞似て滿足し、それでその死語を話すのだと稱して居る。若し先生のギリシヤ語やラテン語が斯のやうな代物であるとすれば、子供のギリシヤ語やラテン語は推して知るべきだ。子供等は自分では少しも理解しない此等の言葉の初歩をやつとのことで暗記させられる。先づ彼等はフランス文をラテン語に反譯することを學び、少し進むとシセロの章句を散文に綴り合はせたり、又はヴァージルの詩句を韻文に綴り合はせたりすることを學ぶ。かうして彼等はラテン語が話せると思つて居る。そしてこれに故障を申し込む人はゐないのだ。

何事の研究に拘らず、象徴されて居る事物の觀念がなければ、それを象徴してゐる符牒は無價値である。ところが子供の教育は此等の符牒に限られて居る、そして何人も未だ嘗つてそれが表象してゐる事物の意味を子供に理解させる事に成功した例はない。諸君は地球の有樣を子供に教へてゐるつもりだが、その實は地圖を教へて居るに過ぎない。諸君は、都會の名や、國の名や、川の名を子供に教へるが、それは諸君が子供に見せてゐる紙の上より以外にあるものだとは子供は思はぬ。世界とは何であるか？　それは厚紙でこしらへた球體であると書き出した地理書を私は何處かで見たのを記憶してゐる。子供の地理は正確にその通りである。私は地球の地理や宇宙學を二年間も勉强した後で、自分の學んだ原則の助けを借りてパリからサン・ドニイまで歩いてゆける十歳の子供は一人もないと斷言する。此等の子供の中の一人でも、父親の庭に揭げてある案内圖を見て、庭内の廻りくねつた路を迷はずに歩ける者が無いことを斷言する。ところが此の幼い先生方が北京でもイスパーンでもメキシコでもその他世界の凡ゆる國の位置を十分知つてゐるのだ。

私は子供には眼だけしか必要でない學問をさせるがいゝといふ說を聞く。そんな都合のよい學問があればそれでいゝかも知れない。だが私はそんな學問は一つも知らない。

子供に歷史を教へるのは更に滑稽な間違ひだ。世人は歷史は單に事實を集めたものだから子供にでも意味が解ると想像してゐる。ところで此事實といふ言葉はどういふ意味を有つて居るか？諸君は、歷史の事實を決定する諸關係は容易に把握できるもので、それによつて觀念が子供の精神の中に容易に造られるものであると思つてゐるのであるが？　諸君は事件の眞の知識はその原因及び結果の知識から引き離すことが出來ると思ふか？　又道德と歷史とはあまり、關係がなく兩者は別々に知り得ると思つてゐるのであるか？　若し諸君が人間の行爲の中に、外部的の、而して純然たる物理的の運動しか認めないなら、諸君は歷史から何物を學ぶのであるか？　絕對に何物も學ぶものはない。歷史の研究から興味を取り去つてしまへば、それは諸君に快樂も教訓も與へはしないのである。若し諸君が人間の行動を道德的關係に依つて評價しようと思ふなら、此等の道德的關係を諸君の生徒に理解させようとして見るがよい。さうすれば諸君は直ぐに子供等が歷史を學ぶに足る年齡に達してゐるか何うかが解るであらう。

讀者諸君、諸君に話をしてゐるのは學者でもなければ哲學者でもなく、普通の人間であり、何等の學說をもゝたぬ、如何なる學派にも屬しない眞理の愛好者であり、他人と交涉することも少なく、他人の偏見を吸收する機會も少なく、他人との交際に當つて感じた事柄に就いて、反省する時間を一層多くもつてゐる隱遁者に過ぎないといふことを常に記憶してゐて貰ひたい。私の議論は原理よりも事實に立脚して居るのである。そして私の議論をしてゐるうちに思ひついた澤山

の實例を絶えず引用して諸君に語ることが、諸君に私の議論を判斷させる最良の方法であると思つてゐるのである。

私は自分の子供等と其の教育とに、非常に力をつくしてゐる或る田舍の家庭の善良な主婦の許で數日を暮らしたことがあつた。或る朝、私が長男が學習してゐる所へ行くと、その時彼の家庭教師は、彼に古代史を十分に教へてしまつて、アレキサンダーの話を復習し、醫者フイリップの有名な逸話をきかせてゐた。それに關しては繪をかいた人もあるし、またたしかに繪にかくだけの値打のあるものである(註二〇)。中々如才のない家庭教師は、アレキサンダーの勇氣に關して色色な意見を述べた。私はその意見は嫌ひであつたが生徒の心に彼を輕蔑させる念を起さしてはならないと思つてそれに就いては爭はなかつた。食事になつた時に、家族の人々はスランス流に此の子供に色々おしやべりをさせることを忘れなかつた。此の年頃の子供につきものゝ躁やぎと、きつと賞められるといふ確信との爲めに、子供は澤山のたわいもないことをしやべつたが、その話の中には時々うまい言葉が出てきたので、そのために他の馬鹿げた言葉を忘れさしてしまつた。

ところがたうとう醫者フイリップの話が出た。子供は極めて明晰に且つ巧みにそれを話した。それから彼の母親がひそかに要求し且つ子供自身も期待してゐた月並みの賞讃の御褒美があつた後で、人々は子供の言つた事柄について論じあつた。大抵の人はアレキサンダーの無鐵砲を非難した。又或る人は家庭教師の例に倣つて彼の決斷と勇氣とを賞めた。そこで私はこゝに列席してゐた人々は一人として此の話の取り所を本當に知つてゐないといふことを知つた。それで私は彼等に言つた。『私の考へではアレキサンダーの行爲には少しの勇氣も少しの決斷もないやうですね、若しあるとすれば、それは皆んなから威張に過ぎんですよ』と。すると皆の者がそれはから威張

だと私に贊成した。私は怒つてそれに應答しようとしたら、それまで默つて私の傍に坐つてゐた一人の婦人が、私の方へ屈んで耳に口を寄せて低聲で『ジャン・ジャックさん、默つていらつしやい、皆の人には貴方の仰言ることは解りやしませんから』と言つた。私はその婦人を眺めた、そして尤もだと思つて口を噤んだ。

(註二〇) Quinte-Curce, Liv. III. chap. VI を見よ。モンテエニュもこれと同じ話を語つてゐる。『アレキサンダーはバルメニオンの手紙によつて、彼の最も親しい醫師のフイリップはダリウスに買收されて、彼を毒殺しようとしてゐることを知つてゐた。彼はその手紙をフイリップに見せると同時に、彼が差し出した飲み物を一息にのんだ。(V, v. I. chap. XXII)

食後私は此の子供が自分で極めて巧妙に話した物語の意味を、全然理解してゐないのではないかといふ疑ひが色々その子供の徵候から起つて來たので、彼の手を取つて一緒に公園へ散歩に行つた。そして私は色々と彼に質問して見て、彼が誰よりも一番アレキサンダーの放膽な勇氣を崇拜してゐることを發見した。しかし諸君は彼が此の勇氣が何處にあると考へてゐたと思ふか？それは、少しも躊躇せずに且つ少しも嫌な顏をせずに、一息さに不愉快な飲料を飲んだといふ點だけなのだ。半月足らず以前に藥を飲まされた此の可憐な子供は、そして非常な努力をしてやつとのことでそれを飲んだ此の子供は、今だに口の中に藥の味が殘つてゐたのだ。死だとか毒殺だとかいふことは彼に取つてはたゞの不快な感覺としか考へられないのだ。而して旃那といふ藥が彼の考へることの出來る唯一の毒藥なのだ。然しアレキサンダーの決斷は此の子供の幼い心に非常な印象を與へたことは認めなければならない。そして此の次ぎに藥を飲まねばならぬときには、彼はアレキサンダーにならうと決心をしたことは認めなければならない。私は、彼には意味の解

らないに定つた事柄を說明することは見合はせて、彼の殊勝な決心を勵ましてやりながら、子供に歷史を敎へることができるつもりでゐる父親や敎師の呑氣さ加減を獨りで笑ひながら家に歸つた。

國王だとか、帝國だとか、征服だとか、戰爭だとか、革命だとか法律だとかいふやうな言葉を、子供に言はせるのは容易なことだ。しかし此等の言葉に明確な觀念を與へるといふ問題になると、これを說明することは園丁ロベールの會話の場合とは非常に異つて來る。

私がジャン・ジャックさん、默つていらつしやいと言つたゞけでは不滿足な讀者諸君は、それでは君は不幸なアレキサンダーの行爲の中で、どこに感心するのか、と私に尋ねるだらうと思ふ。困つたものだ！　話して貰はなければならぬやうでは諸君にはそれはわかりつこはないのだ。それはかうだ。アレキサンダーが德を信じてゐたことだ。彼が德のために首を賭けたことだ。彼自身の生命を賭けたことだ。彼の偉大な精神が斯くの如き德を信ずるやうにできてゐたことだ。その藥を一服飲んだといふことは、彼の抱いてゐた信仰の崇高な告白だつたのだ。これ以上に立派な信仰の告白をした人は決してない。若し現代にアレキサンダーがゐるなら、このやうな行爲によつてそれを見せて貰ひたいものだ。

言葉だけの知識がない限りは子供に適した學問は一もないわけだ。若し子供が本當の觀念を持つて居ないとすれば子供は本當の記憶をもつてゐないわけだ。何となれば感覺だけしか保存してゐないやうな記憶は私は記憶とは呼ばないからだ。子供の頭の中に彼等にとつて何等の意味も現はしてゐない符牒のカタログを刻みつけたところで何の役に立たう？　事物そのものを敎へさへすれば子供にその符牒が分らずにゐようか？　何故に子供にそれを敎へるのに無益な手數を二度も繰り返させるのだ？　而かも諸君は彼等にとつて何等の意味も無い言葉を學問だと思ひこませて、彼等に何といふ危險な偏見を植ゑつけることだらう？　子供が最初におぼえる言葉、子供が自分自身は效用を知らないで、他人の言葉によつて敎へられる最初の事柄、これが子供の判斷を臺なしにする第一歩である。彼は此のやうな損害から回復することが出來るまでは、長い間馬鹿者達の眼には卓絕した人物と思はれてゐるに違ひなからう(註二一)。

(註二一)　大抵の學者のやりかたがこの子供等のやりかたと似て居る。博學多識は深山の觀念からよりも深山の形象から生じたものである。日附だとか、固有名詞だとか、地名だとか、その他觀念から孤立した、或は觀念を伴なはない一切の事柄は專ら符牒によつて記憶されてゐるに過ぎない。そしてこれ等のものは吾々が讀んだ書物の右の頁だとか左の頁だとか、或は吾々が始めてそれを見た時の繪だとかを一緒に聯想せずには滅多に思ひ出すことができない。最近數世紀間の學問は大抵此の種類の學問であつた。現代の學問はそれとは別である。今日では誰も研究や觀察はしない。たゞ夢想する。而して惡夜の夢にすぎないものを物々しくも吾々に哲學だなどといつて押しつける。君も夢想家ではないかと私に言ふ人があるだらう。成る程その通りだ。しかし私のやりかたは他人のやりかたとはちがふ。私は夢を夢として與へる。そして覺めてゐる人々に有用なものがその中にあるかどうかを見出すことは、讀者に一任するのである。

それではいけない、自然が子供の腦髓をどんな印象でも受けることのできるやうに柔軟に造つたのは、王樣の名前や、年代日附や、紋章學や、天文學や、地理の術語のやうに子供にとつて現在何の意味も無い言葉や、何時になつても役に立たない言葉を刻みつけて貰つて、あたら幼年時代を棒に振らせるためではない。それは子供が認知する事ができ、且つ子供に役だつ凡ゆる觀念、子供の幸福に關係のある一切の觀念、他日子供に自己の義務を理解させる凡ゆる觀念が早くから子供の頭に消し難い文字として刻みつけられ、その子供の性質と能力とに適當した方法で一生の間自分で自分を導いてゆかせる爲めなのだ。

書物などは研究しなくとも子供の持つことの出來るやうな記憶力はぼんやり遊んでは居ない。

見る物、聞く物が總て彼に印象を與へ、彼はそれを記憶する。彼は大人達の言行を自分で記錄してゆく。そして彼を取り圍むものは凡てが一卷の書籍であつて、彼はその書物の中で、彼の判斷力が記憶を利用することができるやうになるまで、斷えず、無意識に彼の記憶を豐富にしてゆくのである。此等の事物を選擇すること、子供の認知することのできる事物を斷えず子供に示し、子供の知つてはならぬ事物を子供から隱すやうに注意すること、これが子供に此の最初の能力卽ち記憶力を發育させる眞の方法である。而して此の方法に依つて、若い時代に於ける彼の教育に役立ち、一生を通じて彼の行爲に役立つ知識の倉庫を彼につくつてやるやうにしなければならない。成る程此の方法では所謂神童はできぬ。又これでは家政婦や家庭教師の手柄にはならぬ。だが此の方法は怜悧で、强壯な人物、心身共に健全な人物、子供の時には賞讃を博さないが、大人になつてから尊敬される人物を作るのである。

エミイルは何物をも暗記しないだらう、寓話さへも暗記しないだらう。どんなに無邪氣な面白いラ・フォンテエヌの寓話さへも暗記しないだらう。何となれば寓話の言葉が寓話でないのは歷史の言葉が歷史でないのと同じだからである。寓話は面白いものであると同時に子供を惑ばすものだといふことを考へず、子供は虛僞の事柄ばかりを面白がつて、眞理は見逃してしまふものだといふことも考へず、子供に面白い教訓を與へようとすれば子供は却つてそれから何物も得なくなるといふことを考へもしないで、寓話は子供の教訓だなどと言ふ程、何うして世人は目が見えないのだらう。寓話は大人の教訓にはなるかも知れぬが子供には赤裸々に眞理を話してきかせねばならぬ。眞理をつゝんでやつたが最後、子供はそれを開いて見るだけの勞はとらないのだ。

子供は皆ラ・フォンテエヌの寓話を聞かされるが、一人もその意味の解るものはない。萬が一

意味が解つたら猶更大變だ。何故かといふと寓話の中の寓意は子供には咀嚼のできない程複雜な不釣合なものなので、子供に美德を敎へるよりも却つて惡德を敎へるからだ、『また逆說(パラドクス)だ！』と諸君は叫ぶだらう。さうかも知れない。しかしそれが眞理か何うかを研究して見よう。

子供は自分の敎はつた寓話を理解する者でないと私は斷言する。何となれば如何に吾々がそれを單純なものにしようとしても、吾々が寓話から抽き出さうとする敎訓には、何うしても子供には解らない觀念がはいつて來る。詩で書いた寓話は子供が記憶するには便利だが、その爲めにそれを理解する事は一層困難になる。そこで面白いといふ事の爲めに明晰といふ事が犧牲にされる。さて偶々同じ書物に載つてゐるといふ爲めに子供に敎へられてゐるに過ぎない、全く子供には理解もできなければ效能もない澤山な寓話を引用するのは止めて、著者が特に子供の爲めに書いたと思はれる寓話だけについて言はう。

ラ・フォンテエヌの全集の中で、子供らしい無邪氣さが際だつて目に附くのは五つ六つの寓話に過ぎない。私は此の五つ六つの中から最初のものを例にとらう(註二二)。何となれば此の寓話の寓意は誰に讀ませても最上のものであるし、子供には最も理解し易く、且つ覺えるのに最も興味があるので、その爲めに、わざわざ著者が卷頭に載せたものであるからだ。若し著者の目的が、本當に子供に理解させ、子供を面白がらせ、且つ子供に敎訓を與へるに在つたなら、此の寓話は確かに彼の傑作である。そこで、それをずつと讀んでいつて簡單に吟味することを私に許して貰ひたい。

(註二二)　これはフォルメイ氏が指摘されたやうに最初の寓話ではなくて二番目の寓話である。

鴉と狐

寓話

Maître corbeau, sur un arbre perché,

（鴉先生はとまつてゐる、樹の上に）

先生！　この言葉はそれ自身ではどういふ意味か？　固有名詞の前にあるとどういふ意味になるか？　此の場合にはどういふ意味か。

エミイル

鴉とは何か？

とまつてゐる樹の上にとは何か？　一般にはとまつてゐる樹の上にとは言はないで、樹の上にとまつてゐると言ふ。そこで詩歌に於ける語位の轉換のことを説明せねばならぬ。韻文と散文との區別を説明しなければならぬ。

Tenait dans son bec un fromage.

（嘴に乾酪をくはへて）

どんな乾酪か？　それはスイスの乾酪だつたらうか、ブリイの乾酪だつたらうか、オランダの乾酪だつたらうか？　若しこの子供が鴉を見たことが無かつたとしたら、鴉のことを子供に話して何になるか？　若し子供が鴉を見たことがあるとしたら、鴉が嘴に乾酪をくはへてゐるといふことをどんな風に解するだらうか？　形象は常に自然からとつて來ねばならぬ。

Maître renard par l'odeur alléché

（狐先生その香にいざなはれ）

又しても先生だ！　しかし狐には此の稱號はよく似合ふ。彼は自分の商賣の狡智を修業した先生だ。こゝで狐がどんなものかを説明し、本當の狐の性質と寓話の中に始終ひきあひに出される狐の性格とを區別してやらねばならぬ。

第二篇

いざなはれ、この言葉は今は廢語で通用しない。そのことを説明しなければならぬ。それは韻文にしか使はれてゐないといふことを言つてきかせなければならぬ。子供は何故韻文では散文と異つた言葉使ひをするかと問ふであらう。さうしたら諸君はどう答へるか？

乾酪の香ひにいざなはれ！　樹の上にとまつてゐる鴉のくはへてゐる此の乾酪を、林の中か或は穴の中にゐる狐が嗅ぎつけるとすれば、その香ひは大變な香ひであつたに相違ない。こんな風にして諸君の子供に正しい批評的精神を與へようとするのか、正しい説にしか屈せず、他人の話の眞僞を判別する批評的精神を與へようとするのか。

Lui tint à peu près ce language:

（こんな言葉で彼に話しかけた。）

こんな言葉！　それでは一體狐は物を言ふのか？　狐の言葉は鴉に分かるのか？　賢明な教師よ、よく注意し給へ。この問ひに答へる前に君の答へをよく考へたまへ。それは君が考へてゐたより遙かに重大な問題だ。

Eh! bonjour monsieur du corbeau!

（今日は、鴉君！）

君！　子供はこの稱號が尊稱であることを知る前に、嘲弄の意味に使はれてゐることを知る。

鴉（ムサシコガネイ・コルボー）君と口にいふ人々は、この「君」といふ言葉を説明する前にいろ〳〵なことをしなければならぬ。

Que vous êtes joli ! que vous me semblez beau !

（君はすばらしい男前だね。全くいゝ男だ！）

これは蛇足だ。無用の言葉だ。子供は、同じことが別の言葉で繰り返されてゐるのを見て、ぐづぐづ話すことをおぼえる。諸君がこの無用の言葉は、作者の手際で、言葉を重ねて讃辭を強く見せようとする狐の下心になつてゐるのだと言つたところで、そんな説明は私にならいゝが私の生徒には駄目である。

エミル

Sans mentir, si votre ramage,

嘘は言はぬが、若し君の啼聲が

嘘は言はぬが！ では時々嘘をつくのか？ 若し諸君が子供に、狐は嘘をつくから嘘は言はぬがなどと言ふのだと教へたら、彼はどう思ふであらう？

Répondant à votre plumage,

君の羽に似つかはしかつたら

似つかはしい！ この言葉はどういふ意味か？ 聲と羽のやうな全く性質の異つたものを子供に比較させて見るがいゝ、さうすれば子供がどれだけ理解するか分からう。

Vous seriez le phénix des hôtes de ces bois

君は此の森の棲み者の中の不死鳥になれるだらう

不死鳥！ 不死鳥とは何か？ こゝで吾々は突然古代の嘘、殆んど神話の中へ投げこまれる。

此の森の棲み者！ 何といふ比喩的な言ひ廻しだ。おべつか者の狐は、彼の言葉を鹿爪らしくして、それを重々しくして、言葉に魅力をつけようとしてゐるのだが、子供はこんなこみ入つた狡計を理解するだらうか？ 彼は、鹿爪らしい言ひ廻しとはどんなことで平明な言ひ廻しとはどんなことであるかを理解するだらうか、知ることができるだらうか？

A ces mots, le corbeau ne se sont pas de joie,

此の言葉に、鴉は喜んで有頂點になり

此の周知の言ひ表はし方を十分理解するためには、これまでに非常に強い感情を經驗してゐる必要がある。

第二篇

Et, pour montrer sa belle voix,

彼の好い聲を聞かせようと思つて

此の一行及び此の寓話全體を理解するためには、子供は、鴉の好い聲とは何であるかを知る必要がある、といふことを忘れてはならぬ。

Il ouvre un large bec, laisse tomber sa proie

大きな嘴を開いて餌物を落した。

此の一行は大變見事なものだ。言葉の調子だけで實景がまざまざと浮んで來る。私には鴉が大きな醜い嘴を開いた姿が見える。乾酪が枝の間から落ちる音が聞える。けれども此の種の美は子供には一向分かりはしない。

Le renard s'en saisit, et dit : Mon bon monsieur,

狐はそれを受けとめて言つた、おい君、

こゝで、もう既に親切はからかひにかはつてしまつてゐる。たしかに諸君は早速そのことを子供に敎へるであらう。

Apprenez que tout flatteur

おぼえておき給へ、凡ておべつか者は

一般の格言だ。こんなものに用はない。

Vit aux dépens de celui qui l'écoute.

聽き手のお蔭で生きてゐるのだ。

十歲の子供でこの意味のわかるものは一人だつてない。

Cette leçon vaut bien un fromage, sans doute.

此の敎訓はたしかに乾酪位の値打はあるよ。

エミイル

これはわかる。そして意味は立派なものだ。けれども、敎訓と乾酪とを比較することが出來て、而かも乾酪よりも敎訓がいゝといふ子供は極く僅かしかないだらう。だから彼等に、此の文句は嘲弄の文句だといふことを理解させねばならぬ。子供にとつては何といふ難かしいことだらう！

Le corbeau, honteux et confus,

鴉は恥ぢ入つて、まごついて

又しても無用の重複文句だ、けれど今度のは辯解の道がない。

Jura, mais un peu tard, qu'on ne l'y prendrait plus.

もうおべつかには乘るまいと誓つた、けれどももう後の祭りだつた。

誓ふ！ 子供に誓ひが何であるかを說明しようとするやうな馬鹿な敎師があらうか？

隨分詳しく述べた。けれども此の寓話の中の凡ての觀念を分析して、此の各々の觀念を更にそれが成立して居る一層單純な、要素的な觀念に還元する爲めには、まだまだこれでに少なすぎる。だが子供に解るやうにする爲めにこんな分析が必要だと考へるものが一體あるだらうか？ 吾々の中には自分自ら子供の立場に立つことの出來る程の哲人は一人もないのだ。さて寓話の敎訓に移らう。

私は敢へて訊ねる。世間には自分の利得の爲めに、阿つたり、虛言をついたりする人々がありといふことを、抑も六歲の子供に敎へる必要があるだらうか？ 小さい子供等を愚弄してその蔭で子供等の愚かな虛榮心を嘲笑する人々が世の中には居るといふことだけなら、せいぜい子供等に敎へることが出來よう。しかしながら乾酪の爲めに凡てが臺なしにされて居る。何うして自分の乾酪を嘴から落さないやうにしようかといふことよりも、如何にして他人の嘴から乾酪を落させてやらうかといふことを、諸君は子供達に敎へて居るのである。これは私の第二の逆說であるが、第一の逆說と等しく重要なものである。

寓話を學んでゐる子供等を注意して視ると、子供等がその寓話を實地に應用する機會を得た場合には、大抵必ず作者の意圖とは正反對に、寓話を利用するものだといふことがわかる。即ち寓話は、諸君が防止したいと思ひ矯正したいと思つてゐる缺點を、子供達から防いでくれる代りに、却つて他人の弱點を利用する惡德を子供等に好ませるやうにするのである。上記の寓話をきかせると子供等は皆鴉を嘲笑するが狐には心をひかれる。その次の寓話では諸君は子供等に蟋蟀を手本にさせようと思つてゐるが、それは大違ひだ、子供等はきつと蟻の方を選ぶだらう。一體卑下

することは誰だつて好まない、誰だつて立派な役割を選ぶ。これは利己心から出た選擇である、極めて自然な選擇である。だが子供等の爲めにはこれは極めて怖ろしい教訓だ。自分が他人から要求されたことを拒絶することのできるやうな無情な、貪慾な子供ほど、世の中に忌むべき怪物はない。しかし蟻はそれ以上の事をする、蟻は拒絶するばかりではなく、嘲笑しながら拒絶することを教へるのである。

ライオンが或る役――通例は最もすばらしい役割――を演ずる凡ての寓話では、子供等はきつとそのライオンを氣取る。そしてその子供が、何か自分の主宰で物を分配する時には、彼はライオンを眞似てみんな自分で卷きあげようと熱心に心を配るのである。しかし若しライオンが蚊の爲めに一杯喰はされた場合には別問題だ。その時は子供はライオンをすて〻蚊になる。此の時は子供は公然と攻撃することの出來ない者を、いつか一突きに刺し殺さうとすることを學ぶのである。

痩せた狼と肥つた犬との寓話からは、子供は諸君が彼に教へるつもりの節制の德は學ばないで、放縱の教訓を學ぶ。私は此の話を聞いて烈しく泣いて居た少女を見たのを何時までも忘れないであらう。此の話は從順の教訓として彼女に話して聞かせたのであつた。そこで何故この少女が泣いたのかはじめは分らなかつたが、遂にわかつた。その可憐な子供は鎖で繫がれることを嫌つてゐたのだ。彼の女は頸の皮が剝がれるやうに感じた。彼女は狼でないことを悲しんで泣いてゐたのであつた。

かくて前に引用した第一の寓話からは、子供は最も卑劣な阿諛の教訓を學び、第二の寓話から殘忍の教訓を學び、第三の寓話からは不正の教訓を、第四の寓話からは腹いせの教訓を、第五の

寓話からは不從順の教訓を學ぶのである。これ等の教訓の最後のものは私の生徒には無用のものだが、諸君の生徒にもあまり適當なものでない。諸君は矛盾した教訓を與へてそれから何物を得ようと期待するのであるか？　恐らく私を寓話に對して反對させるところのその同じ教訓が、諸君に對しては寓話を擁護する理由を提供するのであらう。社會には言葉の教訓と行爲の教訓とが必要である。而して此の二種の教訓は全く別物である。前者は教義問答の中に含まれて居り、人はそれに一任してゐる。後者はラ・フォンテエヌの子供の爲めの寓話と、母親の爲めの小話との中に含まれて居る。同じ作者が此の雙方に役立つてゐるのだ。

さて、ラ・フォンテエヌさん、吾々は仲直りしようではありませんか。私の方では貴方の書物を私の愛讀書とする事を約束します。貴方の寓話を愛讀し、そして貴方の寓話で自ら修養する事を約束します。何故なら私は貴方の寓話の意味を取り違へることはないでせうから。が私の生徒には、此の生徒がその四分の一も解らない事柄を學ぶことが、彼に對して何程爲めになるかといふことを貴方が私に證明して下さるまでは、又彼に理解できる話では彼が決してその意味を變へて、瞞されたもの〻悪い所を矯正する代りに、悪者を模倣するやうなことのないことを貴方が私に證明して下さるまでは、私はこの話を一つも私の生徒に學ばせないといふことを承知して貰ひたいのです。

かうして私は子供等の凡ての課業を追つ拂つたと共に、子供等を最も不幸にする第一の道具、即ち書物を追ひ拂つたのである。讀書は幼年時代の呪ひである。諸君が子供等に與へてゐる唯一の仕事がそれなのだ。エミイルには十二歳になるまで書物がどんなものかといふことさへも知らせない。『然し、子供には少くも讀み方だけは教へておかねばならぬ』と言ふ人もあるであらう。

それは私も贊成だ。讀書が子供にとつて役にたつたやうになつた時には子供は讀み方を知つてゐなければならぬ。だがそれまでは讀書は子供を退屈させるばかりだ。

何事によらず子供に物事をさせる場合に、子供を服從させてさせるのが悪いとすれば、子供等は、實際何かの役にたつとか、或は面白いとか、いづれにしても、彼等が、現在すぐに利益があると認めた事柄だけしか學ぶことができぬといふことになる。これ以外に、どんな動機が彼等に學ばせることができようか？　現在居ない人と語つたり、居ない人の言葉を聞いたりする術、遠方にゐる人々に仲介なしに吾々の感情、意志、慾望を直接に傳へる術は、如何なる年輩の人々でも明白に知ることのできる有用な技術である。そんなに有益で且つ愉快な此の技術が、一體何うして子供等に對して苦痛になつたのであらうか？　子供が自分の意志に反してそれを學ぶことを強ひられ、それが子供のまるで理解し得ない目的に用ひられるやうに變へられてしまつたからだ。子供だとて自分が苦しめられる道具の使用法に熟達しようといふ好奇心はもたない。しかしその道具を彼の快樂の手段とすれば、忽ちにして子供はひとりでにそれを學ぶやうになるだらう。

人々は子供に讀書を教へる最良の方法を見出さうとして大騒ぎをして居る。『ビューロー』（文字を集めて言葉を作ることが出來るやうになつてゐる函）や、カードが發明されて、子供の室はまるで印刷工場にされて了つてゐる。ロックは骰子を用ひて讀むことを教へようとした。如何にも素敵な考案だ！　が何といふ無益な努力だ！　此等の方法の何れよりも一層確かな方法がある、その方法は誰も忘れてしまつて居る。それは知りたいといふ慾望を起させることである。諸君の生徒には先づ此の慾望を起させねばならぬ。そして『ビューロー』や、骰子はすてるがいゝ、さうすればどんな方法でも役に立つだらう。

現在の利益、これが大きな原動力である。確實に多大の效果を齎らす唯一の原動力である。エミイルは時々彼の父親又は母親、或は親戚や友人達から、御馳走や、散歩や、舟遊びや、町のお祭りへの招待狀を受けとることがある。それ等の通知は簡單で明瞭で、立派に書いてある。誰かゞそれを彼の爲めに讀んでやらなければならない。だが必要に臨んで何時でも誰かゞ居るといふ譯には行かぬし、よしゐたところで、その人は前日彼自身がその人に無愛想であつたと同じやうに中々おいそれと子供のたのみをきいてやらぬ。その內に時間は經過して機會を逸して了ふ。結局その通知は彼の爲めに讀んで聞かされるが、その時はもう旣に遲い。若し彼自身が讀むことさへ知つてゐたらこんなことはなかつたのに！　その內に彼は極めて短く、內容の極めて面白い別な通知を受け取る。彼はそれを判讀しようとする。讀んで貰らはうと頼んでも皆それを拒絶する。彼は全力を盡して、遂に半分ばかりの意味が解る。それには明日クリームを食べに行かうといふやうな事柄が書いてある。何處へ？　誰と一緒に？　それは彼に解らない。彼は解らない部分を理解しようとどんなに努力することであらう！　だから私はエミイルに『ビューロー』が必要だなどとは思はない。次に書き方の教育に就いて語らうか？　否な、私は教育論の中で此等のくだらないことを弄んでゐるのを恥とするものである。

私は重要な格言を一言だけ附け加へて置かう。それは急がば廻れといふことである。私はエミイルが十歲に達するまでに、完全に讀み書きが出來るやうになることを殆んど確信してゐる。といふのは正に私が彼を十五歲になる以前に讀み書きが出來るやうにしようなどといふことをてんで氣に掛けてゐないからだ。だが私は、讀書を有効に役だゝせる凡ての事柄を犧牲にして、それで讀書術を得るよりは、全然讀書することを知らない方がいゝと思つてゐる。若し彼が永久に讀

書を厭ふやうになつてしまへば、彼に取つて讀書が何んの役に立たう。"Id imprimis cavere oportebit, ne studia, qui amare nondum potest, oderit, et amaritudinem semel perceptam etiam ultra rudes annos reformidet." (まだ學問を愛し得ざる人をして學問を厭はしめることのなきやう、教育を受けざる數年間を過ぎた後にさへなほ教訓の苦しさを怖れさせる知きことのなきやう、注意すべきである。) (註二三)

(註二三) Quintil. lib. I, cap. 1.

私が消極主義を主張すればするほど、それに對して益々多くの反對說が起つてくるのを私は感ずる。若し君の生徒が君から何物も學ばないとすれば、彼は他人から學ぶであらう。若し君が眞理を敎へて誤謬を斥けるやうにしなければ、彼は虛僞を學ぶであらう。君が彼に偏見を敎へることを恐れても、彼はその周圍の人々から偏見を受けるであらう。偏見は彼の五感から這入つて行くであらう。偏見は彼の理性が十分に發達する以前にそれを破壞して了ふであらう。又彼の心知は長い間の不活動の爲めに鈍感になり、物質的な事柄の爲めにのみ占有されて了ふであらう。若し吾々が少年の時に考へる習慣を養つて置かなければ、吾々は一生思考力を失ふであらうと。

エミイル

私は此の反對論を容易に駁することが出來ると思ふが、さて何故私はあらゆる反對論に答へなければならないのか？ 若し私の敎育法その物が諸君の反對論の回答となれば、それでよし、若しならなければそれは何の役にも立たないのだ。だから私は說明を續けよう。

若し諸君が私が今まで述べて來た案に從つて、現在行はれてゐるのとは正反對な規則に從つてゆくなら、若し諸君の生徒の精神を遠方へ連れて行つてしまはないなら、乃至諸君が生徒の精神を始終他處にうろつかせ、遠い國や、遠い世紀や、世界の果や、甚しきは天國へ生徒を連れて行つたりしないで、生徒を常に彼自身の地位に置き、直接に彼に接觸する事柄にのみ注意させるやうにするならば、諸君は彼が知覺、記憶、並びに推理さへ出來ることを發見するであらう。これが自然の秩序である。感性を有する物は活動的になるに從つて、彼の判斷力は體力に應じて發達して來る。彼の體力が自己保存に必要である程度以上に有り餘るやうになるまでは、他の目的の爲めに此の餘剩の力を用ひる爲めの眞の思考力は發達しない。そこで諸君が生徒の理知を開發しようと思ふなら、理知が制御すべき體力を養はなければならない。生徒を賢明にしようと思ふなら彼の肉體を絕えず運動させ、肉體を强健にしてやらねばならぬ。彼を働かせ、彼を活動させ、走らせ、叫ばせ、絕えず運動させよ、先づ彼を體力に於いて大人にせよ、さうすれば軈て彼は理性に於いても大人になるであらう。

勿論此の方法に由つて敎育しても、若し諸君が常に彼を監督し、命令を與へ、絕えず、此處へ來い、彼方へ行け、休息せよ、あれをせよ、これは爲てはならぬ、といふ風に一々指圖をしたのでは、彼はいぢけた人物になるであらう。若し諸君の頭で常に彼の腕を指圖してやつたなら、彼自身の精神は無用なものになるであらう。しかし諸君は吾々の間にきめた約束を記憶してゐて實ひたい。若し諸君が術學の徒に過ぎないなら、諸君はわざわざ時間をさいて私の書物をよむには及ばないのだ。

心身の活動が相携へて進んではならないかのやうに、又、精神の活動が常に肉體の活動を指導してはならないかのやうに、肉體の活動が精神の活動を妨げるなどと想像するのは、あはれむべき間違ひである。

世の中には絕えず肉體の活動に從つてゐる二種の人々がある、農民と未開人とがそれだ。此の兩者は、いづれも精神の開發には殆んど少しの注意も拂はない。農民は粗野で鈍感で無器用であ

エミイル

る。未開人は鋭敏な感覺を有するばかりではなく、精神が極めて智巧であるので名高い。換言すれば、世の中に農民ほど鈍感な者はなく未開人程鋭感な者はない。何うしてこんな差異が生じたのであるか？　農民は自分が言ひ付かつた事柄や、父親のするのを見た事柄、或は自分が若い時分からやつて來た事柄をするだけで、從來の習慣以外には決して出ない。いつも同じ仕事ばかりをしてゐる殆んど自働人形のやうな農民の生活では、習慣と服從とが理性の代りをつとめてゐるのだ。

未開人の場合は全く異つてゐる。彼は一定の場所に固着して居ない。彼には極つた仕事がない。服從すべき目上が無い。彼は自分の意志以外に何等の法律を知らない。そこで彼は何か仕事をする毎に一々理性に訴へざるを得ない。彼は前もつて結果を考へなければ動くことも歩くことも出來ない。そこで肉體を運動させればさせる程、益々精神が敏速になる。彼の體力と彼の理智とは一緒に發達し、相携へて進んでゆく。

賢明なる教師よ、吾々兩者の生徒の中で何方が未開人に似てゐ、又何方が百姓に似てゐるか、檢べてみよう。諸君の生徒は絶えず彼に指圖をする權力に服從してゐる。彼は命令の言葉を持つて始めて行動する。彼は命令されない限りは、空腹を感じても食べようとはしない、渴しても水を飲まない。面白くても笑はない。悲しくとも泣かない。手も差し出さない。足も動かさない。間もなく彼は命令されなければ呼吸する事も敢てしなくなるであらう。諸君は、彼の代りに凡ての事柄を考へてやつてゐながら、一體彼に何事を考へさせようとするのであるか？　諸君が注意して彼を安全にしてやつてゐるのに、彼は自分で注意する必要があるだらうか？　彼は諸君が彼の生命や幸福を引受けてゐるのを知つてゐるから、自分はその責任を免かれたのだと感じて居る

のだ。彼の判斷は諸君の判斷に依存して居る。彼は、彼に爲てはいけないと禁じてない事柄なら何事をやつても危險でないといふことを十分に承知して無反省にそれをやる。彼に雨を豫知する何の必要があるだらうか？　彼は諸君が彼の爲めに空を注視してゐるのを知つてゐるのだ。彼は散歩の時間の長さを測る必要があるだらうか？　彼は諸君が食事時間に遲らせるやうなことがあるとは思つて居ないのだ。彼は止めろといふ迄は食べてゐる。諸君が止めろと言つた時には止める。彼は自分の胃の腑の教へる事を聞かないで、諸君の命令に從ふのだ。諸君がどれほど子供の身體を柔弱にして元氣を失はせたつて子供の理解力に屈伸性を與へることはできはしない。まるで反對だ。諸君は、彼の目に殆んど重要でないと思はれる事柄に彼のもつてゐる少しばかりの推理力を使用させて、彼に對し彼の有する理性の信用を失はせてゐるのだ。彼は、自分の理性が少しでも役に立つたことを一度も知らないために、遂にそれを無用のものと斷定するやうになるのだ。若し彼の推理が間違ふと、彼はその爲めに叱られる、これが一番悪いことだ。しかも彼は屢々叱られるので殆んどそれを意に介しなくなる。極めて有りふれた危險は最早彼を驚かすに足りなくなる。

それでも諸君は彼に知慧があるといふことには氣付くであらう。私がずつと前に話した樣な調子で婦人とお饒舌をするときのために彼はそれをもつてゐるのである。けれども彼が危險に遭遇した場合や、困難な事情の下に在つて決斷を下さなければならないやうな場合には、彼は最も粗野な勞働者の子供よりも百倍も愚鈍で且つ臆病であることが分るであらう。

私の生徒、といふよりは寧ろ大自然の生徒は何うだらう。彼は早くから自己の能力の達し得る程度に滿足するやうに訓練されて居るから絶えず他人から助力を求めるやうな習慣はついてない。

況んや自分の學問を見せびらかすやうな習慣はついて居ない。その代りに彼は自分に直接關係のある凡ての事柄に就いて判斷し、前もつて用心し、推理する。彼はお饒舌はしないで實行する。彼は世間一般に何事が行はれてゐるかといふ事に就いては一言も言はないが、自分自身に適した事柄なら何でも、十分わきまへてゐる。彼は絶えず活動してゐるから、多くの事柄を觀察し、多くの結果を認めざるを得ない。彼は早くから澤山の經驗を得る。彼は人間からは教訓を學ばず、自然から教訓を學ぶ。彼に教訓を與へようとするものがどこにもゐないから、彼はそれだけよく自分で學ぶ。そこで心身は同時に働くのである。彼は他人の考へではなく、絶えず自分自身の考へによつて行動するのだから、思想と行爲とをたえず結び付ける。彼の健康と體力とが發達すると共に、彼の知慧と判斷とが發達する。これが後年に至つて、一般には相容れないものだと考へられてゐるもの、即ち肉體力と精神力、賢哲の理智と運動家の元氣とを兼有するに至る方法である。大抵の偉人は兩者を兼ねてゐるものだ。

若い教師よ。私は君に一つの難かしい術を教へよう。それは訓戒せずに監督する術、全く何事も爲ないでゐて何でもするといふ術なのだ。實を言へば此の術は君の年頃では少々無理だ。といふのはこれは先づ第一に君の才能を示すにふさはしい方法でもなければ、生徒の親達に君の眞價を示すにふさはしい方法でもない。しかしながらこれこそ成功するための唯一の道である。君は先づいたづら小僧を作らなければ、決して賢明な人物を作ることに成功しないだらう。これはスパルタ人の教育であつた。スパルタ人は書物に嚙り付くことの代りに御馳走を窃むことを教へられた。此の爲めにスパルタ人は成長の曉に粗暴な人間になつたらうか？　彼等の返答の力と妙味を知らぬ人があらうか？　常に勝利の準備が出來てゐるので、彼等は凡ゆる種類の戰鬪にその敵

を打破した。而して饒舌のアテン人は、スパルタ人の攻擊を恐れると同樣にその言葉を恐れたのであつた。

最も周到に配慮された教育に於いては、教師は、命令を發する。そして自分が支配者だと思つて居る。だが本當の支配者は子供なのだ。子供はあとで自分の好きな事柄を諸君にしてもらふ爲めに、諸君が彼に要求した事柄をするのだ。彼は常に一時間の勤勉に對して、八日間の愉快といふ報酬を諸君に拂はせることが出來るのだ。諸君は事毎に彼と契約を結ばなければならない。此等の契約は諸君の欲する處に從つて提議され、子供の欲する處に從つて實行されるのだが、いつも子供の思ふ通りになる。殊に、若し諸君の遣方が甚だ拙劣であつて、子供が契約中の自分の義務を實行すると否とに拘らず、或る利益を彼が必ず得ることが出來るやうな條件を作つた場合には、必ず子供の欲する通りになるものである。教師が子供の感情を讀むよりは遙かに子供の方がよく教師の意向を讀むのが普通である。そしてそれはその筈である。何故かといふと子供の方では、自分の自由に放任されてゐるときなら自己保存の爲めに使用したにちがひない一切の智慧を、彼の自然の自由を彼の暴君の鎖縛から救ひ出す爲めに使用するからである。ところが、子供を理解する事にそれ程の興味をもつてゐない教師の方では、時として子供に怠惰を樂しませ、又は空想に耽らして置く方が、自分に取つて利益な事があるからである。

諸君の生徒に對しては反對の方針を執るがいゝ。子供には自分が主人だと思はせておいて諸君自身が本當の主人になるやうにするがいゝ。一見したところでは自由かと見える服從ほど、完全な服從はない。かうすれば意志その物を捕へることができる。何も知らない、何も出來ない、何の知識も有たない可憐な子供は、全然諸君の思ふまゝになるではないか？　諸君は彼に關係のあ

る限りの全部の環境の支配者ではないか？　諸君は彼を欲するまゝにさしておいて、欲するまゝに彼を動かすことが出來るではないか？　彼の仕事も、遊戯も、快樂も、苦痛も、皆諸君の支配の下に在つて、彼はそれを知らずにゐるではないか？　勿論、彼は自分のしたいと思ふ事柄だけしかしないに相違ない。しかしながら彼は、諸君が彼にさせたいと思ふ事柄だけしかしようと思はないに相違ない。諸君が豫想しない處へは彼は一歩も進まないやうになり、彼が何を言ふか諸君に豫想の出來ないことは彼は一言も云はないやうになるに相違ない。

かういふ狀態の下に於いては、子供はその精神を粗暴にすることなしに、その年齡に相應しい體育に專念することが出來る。即ち氣に入らない命令を逃れる爲めに、益々狡猾になるやうな事なしに、凡ゆる周圍のものを彼の現在の幸福のために最も有效に利用する事に沒頭するやうになるだらう。そして、諸君は、彼が自分の力で出來る事をする爲め、また他人の考への助けを何等借りずに眞に事物その物を享樂する爲めに彼が考へ出す手段の巧妙なことに一驚を喫するであらう。

エミイル

子供をこんな風に彼の意志のまゝに自由に放任して置いても彼の我儘を增長させることにはならない。彼が自分に適する事柄を行はずにゐると、終には自分のしなければならぬ事柄をしないやうになる、自分の好きな事だけをするときは、間もなく自分のしなければならないものだけをするやうにならう。かくて、彼の身體は絶えず運動してゐても、現在の目に見える利益に關する限りでいへば、純然たる思辨的研究をさせておくよりも、遙かに良く且つ遙かに適當した方法で、彼の力で出來得る限りの理性が發達してゆくのが分るだらう。

こんな風にして、諸君が絶えず子供に逆つてゐるのではないといふことが解り、子供が諸君を

疑はなくなり、諸君に對して何物も隱す必要がなくなつてくれば、子供は諸君を欺いたり、乃至嘘をついたりしなくなり、少しも恐れずにありのまゝに振舞ふやうになる。そこで諸君は容易に彼を研究することが出來、又、彼に彼自身の氣づかぬやうに、諸君が彼に學ばせたいと思ふ凡ての教訓を彼の周圍にとゝのへてやることが出來るだらう。

又彼は諸君自身の行動に對して絶えず好奇の眼を向けてじろ〳〵見てゐることもなくなり、諸君の缺點を探し出して心私かに悅ぶやうなこともなくなるだらう。これによつて避け得られる災害は大きなものだ。私が先に言つたやうに、子供が最初に心にかけることの一つは、その監督者の缺點を見出だすといふことである。これが遂には惡意になるのであるが、これは惡意から生まれるのではなく、初めは窮屈な監督を免れたいといふ欲望から生れるのである。彼に加へられた束縛に堪へないで彼はそれを拂ひ退けようとする。偶々先生の缺點を發見すると、それはこの目的に絶好の手段を與へることになる。そのうちに人を見れば缺點が眼につくやうになり、他人の缺點を見つけるのを喜ぶやうな習慣がついてくる。だからこれで明かに、吾々はエミイルの心に更に一つの惡德の發生することを防止したわけだ。私の缺點を探しても何物も得る處がないから、彼は私の缺點を探さうなどといふ氣は起さなくなるだらう。又他人の缺點も殆んど探さうとしなくなるであらう。

第二篇

此等の方法は凡て吾々がこれまで實行しようと思つたことがない爲めに困難らしく思はれる。けれども本當に困難である筈がない。諸君は、自分が選んだ職業に必要な知識を有つてゐると當然思はれても可い。諸君は人間の心の自然の發達の順序を知り、人類或は個人を研究することが出來、且つ諸君が生徒に見せる彼の年頃にとつては興味のある色々な物に、どうして生徒の意志

が向かつてゆくかを前以て知つてゐると思はれるに相違ない。ところで此等の道具をもち、これを使用する術をよく知つてゐることは、つまりその仕事に熟達してゐることではないか。

諸君は子供の氣儘をかれこれ言ふがそれは間違つてゐる。子供の氣儘といふことは決して自然のした仕わざではなくて、悪い訓練の結果だ。諸君は子供等に服從してゐるか、さもなければ命令してゐるからである。私が繰り返して言つた事だが、これはいづれもいけない。諸君の生徒は諸君が教へ込んで我儘になつてゐるのだから、諸君が自分自らの過失の罰を忍ぶのが公平だ。しかし何うしたら、それを矯正する事が出來るだらうかと諸君は尋ねるだらう。それは諸君の一層良い指導と非常な忍耐とに由つて、猶ほ矯正することが出來る。

かつて私は數週間或る子供の世話をしたことがある。その子供はたゞ自分勝手なことをする習慣があつたばかりでなく、總ての他の人達をも自分の欲する儘にさせようとする習慣をもつて居た。即ち彼は氣紛れな我儘者であつた。第一日目から彼は眞夜中に起きようとかゝつた。それはどの程度まで私が御し易いかを驗めすものだつた。私が前後も知らず熟睡してゐるとき、彼は寢床から飛び出して、部屋（アパルトマン）着を着て私を搖り起した。私は起き上つて蠟燭を點けた。彼の欲したのは唯これだけであつた。十五分間の後、彼は眠むくなつて來たので、自分の試驗の結果に十分滿足して再び寢に就いた。二三日經つたら彼は前回同樣に巧みにそれを繰返したが、私は一回も癇癪を起したやうな素振りをしなかつた。彼が寢る時に私に接吻した際、私は極めて穩かに彼に言つた、『坊ちやん、今夜はこれでいゝが、これからは爲てはいけませんよ。』彼の好奇心は此の言葉の爲めに呼び覺まされて、その翌日彼は同じ時刻に起きることを忘れなかつた。そして私が彼の言ふことに從はないか何うかを試みる爲めに私を起こした。私は何の用事かと尋ねた、す

ると彼は眠れないのだと答へた。それはいけませんねと私は答へて默つてゐた。すると彼は蠟燭をつけてくれと賴んだ。私は『何故です？』と答へたきりで默つてゐた。彼はかういふ話し振りに當惑し始めた。彼は火打石を手探りして火を點けようとしてゐるらしかつた。私は彼が石で自分の指を打つ音を聞いて笑はずにはゐられなかつた。が結局それを使ふことが出來ないことを悟つた彼は、私の寢床へ火打石を持つて來た。私はそんなものは欲しくはないと言つて外方を向いた。すると彼は叫んだり歌をうたつたり非常な音を立てながら部屋の中を無暗と駈け廻はり、自分は大して怪我をしないやうに十分に氣を付けながら、私をうるさがらせてやれといふ考へで椅子や卓子を打つては大きな聲で叫んだ。處がそれでも一向に效目がなかつた。私は、彼がひどく叱言を云はれるか、怒られるかだらうとこそ思つてゐたが、私が一向無頓着であらうとは思ひ設けてゐなかつたといふことを認めた。

二

けれども彼は何處までも自分の强情を張つて、私が我慢の出來ないやうにしようと決心した。そして相變らず躁ぎ續けた爲めに、たうとう私は癇癪を起した。私が不體裁に怒鳴り飛ばしたのではこれまでの全部の仕事を毀して了ふと思つたので、別な方針を執ることにした。私は靜かに起き上つて火打石の方へ行つたが、それを發見することが出來なかつた。私は彼に火打箱を渡してくれぬかと賴んだ。彼は私に打ち克つたことを悅んでそれを渡した。私は火打石を打つて蠟燭に火を點け、子供の手を引いて、確かり戸が閉ざされてゐて何一つ壞れるやうな物のない隣りの部屋へ靜かに連れて行つた。私はそこに燈火無しで彼を殘して置いて、錠を掛けて一言も言はずに自分だけ寢床へ引返した。その部屋が大變な騒ぎになつたのは言はずと知れたことだ。がそれは豫期してゐた事柄で、私は全く氣に止めなかつた。遂に音は靜まつた。聞耳を立てゝゐると彼

は坐つた樣子だつた。私は安心した。翌朝夜が明けて、私はその部屋に這入つた。すると子供は安樂椅子の上に非常に疲れた後で必要を感じてゐたに相違ない深い深い眠に落ちてゐた。

しかし事件はこれでお終ひにはならなかつた。子供の母親は子供が前夜の三分の二は寢床をはなれてゐたといふことを耳にした。この爲めにすつかり臺なしになつて了つた。まるで子供が死にでもしたやうな騷ぎであつた。復讐の絶好な機會を發見したので、其の爲めに得る處は何もないといふことを知らずに、子供は病氣になつたと佯つた。家人は醫者を迎へにやつた。母親に取つては不運にも此の醫者は本當の道化者だつた。そして人々の恐がるのを面白がつて益々恐怖を增すやうに全力を盡した。しかし醫者は私に囁いて言つた、『私にお任せなさい。その中にこの子供の病氣になりたがる我儘を癒して上げますよ』と。實際彼は寢室と食事の指圖をして、子供は藥劑師に紹介された。私は母親が私以外の凡ゆる人々に欺かれてゐるのを見て不憫になつた。が、彼女は、私が彼女を欺かない爲めに却つて私を憎むのであつた。

可なり甚く責めた後で、母親は私に向つて、自分の息子が蒲柳の質である事、家族の唯一人の相續人である事、如何なる犧牲を拂つても彼の生命を救はなければならない事、息子に言ひ逆らつてもらつては困るといふ事を話して聞かせた。それは私に全く異議はないが、彼の女の言ふ處の言ひ逆らふといふことは、何事につけ子供の言ふ通りにならぬといふことなのだ。私は息子を取扱つたのと同じ調子で母親も取扱はなければならないのを認めた。『奥樣、私は息子さんを何うして相續息子に教育するのだか知らないのです。おまけに知りたいとも思ひませんのです。あなたのお好きなやうにおやりなさい』と私は冷やかに言つた。ところが私は猶ほ暫らく居て貰ひたいと賴まれた。

父親が萬事を調停したのだ。母親は家庭教師に急いで歸るやうに手紙を書いた。それから子供は私の安眠を妨げて見ても、病氣になつて見ても何も得る處がないといふことを知つて、遂にひとりで睡眠して、達者で暮すことに決心した。

諸君は此の小さな暴君が、その不幸な家庭教師をどんなに多く奴隷にしたか想像もつくまい。何故かと言へばその子供の教育は母親の監督の下に行はれ、而して母親は何一つ自分の相續息子に逆らふことも許さないからである。子供が外出したい時には何時でも諸君は連れて行かなければならない。といふよりも寧ろ彼の後から隨いて行かなければならない。そして子供は自分の家庭教師が最も忙がしさうな時機を選むやう、常に十分の注意を拂つてゐた。彼は私に對してもこれと同じ我儘を振舞はうと望み、且つ夜は私を穩かにして置かざるを得なくなつた代り、晝間復讐をしようと望んだ。私は喜んで同意した。そして始めには彼を愉快にすることをどんなに私が悦んでゐるかと云ふことを彼に氣がつかせるやうにした。それから彼の我儘を矯正するといふ問題の場合には別の方法を執つた。

先づ第一に彼に自分の間違つてゐることを示さなければならなかつた。これは困難なことではなかつた。子供といふものは唯だ現在の事柄ばかりを考へるものだといふことを知つてゐるから、私は容易に彼を御することが出來た。即ち、私は非常に彼の嗜好にかなつた或る室内遊戯を備へてやることにした。丁度彼がその遊戯に熱中してゐる時に、私は彼の部屋へ行つて、その邊まで散歩しようと申込んだが、彼は私を追ひ返した。私はあくまでそれを主張したが彼が顧みなかつた。私は降參せざるを得なかつた。そして彼は此の屈服の模樣を見て取つた。

その翌日は私の番になつた。私の豫期した通りに彼はその遊戯に飽きた。しかし私は忙しいや

うな樣子をして居た。これは彼の決心を促すに十分なものであつた。彼は直ぐに一緒に散歩をする爲めに、私に仕事を止めさせて引張り出さうとしたが、私はそれを拒んだ。彼は何うしても散歩するのだと言ひ張つた。『それはいけない、私が散歩しようと云つた時に、あなたは私にはかまはず自分の思ひ通りにするやうに私に敎へたんです。私は外出したくないのです』と私は言つた、すると『そんならいゝ、僕は獨りで行く』と彼は荒々しい語氣で答へた、『何うでも勝手になさい』と云つて私は仕事を仕出した。

彼は私が彼のする通りにしないで知らん顏をしてゐるのを見て稍や不安らしく着物を着た。出掛ける仕度が出來た時に彼は私の處へ來て挨拶をした。私も亦挨拶をした。彼はこれから出掛けようとする遠出に就いて色々の話をして私を吃驚させようとした。彼の言つてゐる事を聞くとまるで世界の際へでも出掛けるやうな話だつた。が一向に平氣で私は彼に愉快な遠足をしなさいと言つた。彼は段々と困つて來た。しかし彼は體裁を作つてゐた、さて愈々出掛ける間際に、彼は自分の給仕に一緒に行けと言つたが、彼には前もつて言ひふくめてあつたのでその暇が無いといふこと、私にいひつかつた仕事があるので非常に忙しいので彼の命令よりも先づ私の命令に從はなければならないのだと答へた。暫くの間子供は吃驚してゐた。自分では世界の中で最も重要な人物だと思つてゐる彼、天地は自分を保護するために夢中になつてゐると考へてゐるその彼を本當に獨り切りで外出させるといふことを、何うして彼が考へることが出來ただらうか？　しかし彼は自分の弱さに氣が付き始めた。彼は誰一人自分を知つてゐる者のゐない中にこれから一人でゐることになるのを知つた。彼は將さに遭遇せんとする危險を豫想した。たゞ强情だけがまだ彼に力を與てゐた。もぢもぢと心ならずも彼は階段を降りて行つた。たうとう彼は若し何かの危險が起つたら、人はその責任は私に負はせるだらうといふことをいくらかの慰みにして、街へ出かけた。

これは私の豫想通りであつた。總て前以つて用意がしてあつたのだ。そしてこれは稍や表向きの出來事になるのだつたから豫め父親の同意を得て置いた。彼が二足三足歩き出すや否や、右からも左からも、彼自身に關する凡ゆる種類の批評をしてゐるのが彼の耳に入つた。『何んといふ愛らしい坊ちやんでせう、ねえあなた、あの坊ちやんは一人つきりで何處へいらつしやるんでせう、迷ひ子になつてしまひますわ、私の家へ御連れ申しませうか』。『そんな事はお止めなさい貴女、此の子供がいたづら小僧の碌で無しだものだから家を逐ひ出されたんだつてことがわからないんですか？。いたづら小僧なんかに構つてはいけません。何處へでも勝手な處へ行かせて置きなさい』。『さうですかしら、でも間違ひがなければよいですがねえ。』も少しあるいて行くと彼と同じ年頃の腕白小僧が彼に揶揄つて嘲弄した。行けば行くほど厄介な事に出會つた。獨りぽつちで保護されてゐない時は、彼は總ての人々のおもちやにされてゐるのに氣がついた。彼は、自分の肩章や金モールが一向尊敬を博さないので非常に驚いた。

しかし私はこの子供が顏を知らない私の友人に、此の子供に氣を付けてゐて貰ふことにして置いた。この友人に子供に氣附かれないやうに、一歩一歩彼の跡を隨いて行つて貰つた。そして頃を見計つて彼に話しかけた。此の役割はブルソーニャク（モリエールの喜歌劇）の中のスプリガニに似たもので氣のきいた人が必要だつたがそれは申分なく行はれた。子供を過度に驚かして臆病にしたり怖ろしがらせたりすること無く、私の友人は子供の馬鹿げた計劃が向ふ見ずであつたといふことを最も完全に子供に悟らせて、三十分の後に子供を家へ連れて來た。子供は恥ぢ入つてきま

り悪るがつて顔を上げることもできなかつた。

彼の遠出計劃の失敗を完成させる爲めに、丁度彼が家へ這入つて來た時に、彼の父親は丁度外出しようと思つて階下から降りて來て梯子段の途中で彼に逢つた。子供は何處へ行つて居たかを説明しなければならなかつた。又何故私が彼と一緒に居なかつたかといふことを説明しなければならなかつた(註二四)。可憐な子供は百尺も地の下へもぐりたいやうに思つた。彼の父親は長々と彼を叱るやうな面倒なことをしなかつたが、私が豫想してゐたよりは一層無愛想に言つた。『お前が一人で出て行きたいと思ふなら出ておいで、然し私の家には碌でなしに居て貰ひたくないから、出たら二度と還つて來ないやうに注意しなさい』。

(註二四) 此のやうな場合に子供に本當の事を話すことを求めても何の危險もない。蓋し子供は自分にはそれを隱すことが出來ないのを十分に知つて居り又若し嘘を吐いたにした處が直ちに發見されるといふことを十分知つてゐるからである。

ところで私の方は稍や眞面目くさつて彼を迎へたが、非難や嘲笑は加へなかつた。吾々が巧らんでゐたことを發見されないやうに、その日は一緒に散歩に連れて行く事を拒んだ。其の翌日、子供が前の日一人きりの時行き逢つた同じ人々の間を、私と一緒に無事に凱旋して來たのを見て、私は非常に悦んだ。彼はその後私と一緒でなければ決して外出しようと言ひ張らなかつたことは言ふまでもない。

かういふ手段やその他の手段を講じて、私は彼と一緒に居た短期の中に、何事によらず、私の欲する事を、彼に命令もせず、禁じもせず、説法もせず、訓戒もせず、無用な教訓をして彼を倦ませることもしないで、彼に行はせる事に成功したのである。そこで私が彼に話しかける時には彼は悦び、私が默つて居る時には彼は怖れた、といふのは何か間違ひがあるといふことを彼は知

つて居たからである。そして彼は常に教訓を事物そのものから學んだのである。ところで本論に戻るとしよう。

こんな風に始終自然の指導だけにまかせて絶えず訓練して、身體を丈夫にしてゆくと、精神はそのために決して馬鹿にならぬばかりでなく、反對にこんな風にしておいてこそ如何なる年齡にも最も必要な種類の理性、幼い子供がもつことのできる唯一の理性が發達してくるのである。こんな風な教育は如何にして吾々の體力を使用すべきかを教へ、吾々の身體と周圍の物體との間の關係を認めることを教へ、吾々の手の屆く處にあつて且つ吾々の器官にふさはしい自然の道具を使用することを教へるのである。いつでも室内で母親のそばで育てられてゐて、重さと抵抗力との何たるかを知らずに、大きな樹木を根拔きにし又は岩を掘り起こさうとかゝるやうな子供ほど、世の中に馬鹿なものがあらうか？　私は初めてジュネエヴの町を出た時に、疾走して行く馬に追ひ付かうとしたり、二里も離れてゐるサレーヴ山に石を投げたりした。私は全村の子供中の笑ひ物であつて、彼等は私を本當の馬鹿だと思つてゐた。吾々は十八にもなつてから槓杆の原理を物理學で教はる。ところが十二歳になる百姓の子供の中にはアカデミイの第一流の機械學者よりも一層上手にその使用法を知つてゐない者はない。運動場で生徒が相互から習ふ學課は、教室の中で學ぶ學課よりは百層倍も値打がある。

始めて部屋の中へ這入つて來る猫を注視せよ。猫は彼方此方へと行き、凡てのものを見、その匂ひを嗅ぎまはる。猫は一秒間でもじつとして居ない。調べてみてそれが何物であるかゞ解るまで總ての物を疑つて居るのである。子供が歩行き始めて、譬へて言へば、自分の周圍の世界といふ部屋へ這入る時も同じことである。唯だ異つてゐるのは、猫も子供も視力を用ひるが、子供は

自然から與へられた手を使用し、猫は自然から與へられた鋭敏な嗅覺を使用するだけである。子供を器用にするのも無器用にするのも、敏捷にするのも遲鈍にするのも、賢明にするのも馬鹿にするのも、此の性向がよく教育されるか又は惡しく教育されるかといふことの如何に依る。

人類の最初の自然の運動は、自己の環境を判斷し、自分に關係を有する一切の感覺的性質を、凡ゆる對象の中に發見することにあるのであるから、彼の最初の研究は自己保存に關する實驗物理學の一種である。然るに彼はこれから遠ざけられ、世界に於ける自己の位置を知る以前に、思辨的研究へと追ひやられるのだ。彼の纖細で柔軟な器官が、それが働きかけねばならぬ諸物體に適應し得る間こそ、又感覺が純粹で未だ迷妄に捉はれてゐない間こそ、器官や感覺をその適當な仕事に使用すべき時期である。此の時に吾々自身と諸物體の間の感知し得る關係を學ぶべきである。人間の心に這入つて來る總ての事柄は感覺を通して來るのであるから、人間の最初の理性は感覺的理性である。知的理性の根柢となるのは之れである。物理學に於ける吾々の最初の先生は、吾々の足であり、手であり、眼である。これに代へるに書物を以てするのは、吾々に推理することを教へる所以ではない。それは吾々に吾々自身の理性を使用することを教へないで、他人の理性を使用することを教へるものである。それは吾々に多く信じさせるばかりで何も知らせないものである。

吾々は技術を練習する以前に、先づ道具を得なければならない。そして此等の道具が有效に使用できるためには、その道具は十分堅固で使用に堪へるやうに作つたものでなければならない。だから考へることを學ぶためには、吾々は知力の道具である吾々の四肢、五官、及び身體の器官を鍛へなければならない。そして此等の道具を最もよく利用するためには、此の道具を供給する

身體が強健でなければならない。人類の眞の理性は肉體と獨立して發達するといふことは全く間違ひであるのみならず、精神の活動を容易にし且つ正確にするものは、強健な體格なのだ。

私はどうして子供時代の、長い、これといつて仕事のない期間を暮すかといふことを說いてゐる中に、滑稽と思はれる程な細事を述べて來た。諸君と同じやうな批評眼をもつてゐる人々は諸君に言ふであらう、『これは不思議な教育法だ。誰も學ぶ必要のないことばかり教へるなんて。別段注意を拂はなくても、骨を折らないでも自然にわかることを教へるのに、君は何故時間を潰すのであるか、君が生徒に教へようと思ふ事柄、しかも教師たちが彼にそれ以上のものを教へてゐる事柄を、十二歳の子供で知らないものが一人でもあるか?』と。

諸君、それは諸君が間違つてゐる。私は非常に長い時間と骨折りとを要する技術、そして諸君の生徒は確かに持つてゐない技術を、私の生徒に教へて居るのである。それは知らないでゐるといふ技術である。何故なら誰も知りたいと思はない知識は、彼が知つてゐることは極く僅かなものに還元できるといふ知識であるからだ。諸君は早くから科學を教へる、だが私は科學を學ぶ爲めに必要な道具をきたへるのに忙しいのだ。昔し、ヴェニス人が西班牙の大使にサン・マルク寺院の寶物を誇示した時に、その大使は卓子の下を見て、たゞ一言 Qui non c'e la radice(どれにもこれにも根がない)と批評したといふ話がある。私は教師が生徒の學問を見せびらかすのを見ると、何時でも此の大使と同じことを言ひたくなる。

「古代人の生活のしかたを觀察した總ての人々は、古代人が現代人より際だつて卓越してゐる心身の力は、古代人が體育に由つて得たものであると斷定する。モンテエニュも此の意見を力說してゐるが、そのしかたを見ると彼は此の意見を深く信じてゐるらしい。彼は幾回となく、色々な

言葉で此の事に言及して居る。子供の教育を說くにあたつて彼は、子供の精神を堅固にするには筋肉を固めなければならない。子供を勞苦にならすことによつて、彼を苦痛にならすことができる、子供を脫骨、痛痛、及び其の他の肉體の疾病の苦痛に堪へしむる爲めに、體育の辛苦に由つて彼を仕込まなければならないと言つてゐる。賢明なロック、善良なロオラン、物識りのフルウリイ、術學者のドウ・クルーザは、他の點では互に甚だしく意見を異にしてゐるが、子供に對する十分な體育といふ此の一事に於ては凡て見る處を同じくして居る。之れは彼等の訓言の中で最も正しいものだが、現在も等閑に附されてゐるし、今後も等閑に附せられるであらう。私はこれが重要であるといふことに就ては已に十分に述べたし又ロックの書物に書いてあるより以上に立派な理由も適切な規則も他にないと思ふから、私自身の批評を數言加へることを許して貰つて、あとは彼の書物に讓らうと思ふ。

成長しつゝある子供の四肢は、着物を着た時に動作が自由に出來るやうにしておかなければならない。その發育や運動の邪魔になるやうなものが一切あつてはならない。身體に密着したものや、身體にあまりきつちりと合つたもの、凡ゆる種類の紐を用ひてはならない。フランスの着物は成人に取つても窮屈で、不健康なものであるが、特に子供の爲めには頗る有害である。循環を妨げられて澱んだ血液は靜止の狀態に於ては停滯する、そして不活潑な引つ込み勝ちな生活は靜止の狀態を增進する。かくて血液は腐敗して壞血病の原因となるのである。吾々の間に絕えず增加してゐる此の病氣は、全く古人の知らなかつたものであるが、それは古人の着物の着方や生活の方法が此の病氣を防止してゐたからである。輕騎兵服は此の缺點を矯正するどころではなく、却つてそれを增すものだ。この服には紐こそないが子供の身體を全面から壓縮する。最良の方法

は子供等に出來るだけ長い間ジャケツを着せて置いて、其れから後は身體にあはせないで、ゆつたりした衣服を着せる事である。身體に合はせて着物をつくると身體の方がこはれる。要するに、子供等の心身の缺點は何れも殆んど同一原因から來るものである。即ち、時期の未だ至らないのに先立つて、子供等を一人前にしようとする事がそれである。

色には派手な色と沈んだ色とがある。が子供等は派手な色を最も好み、又それが彼等に良く似合ふのである。斯くの如く自然に似合ふものを斟酌してはならないといふ理由はない。だが子供等が或る着物の地が立派であるからといふ理由でそれを選むやうになつた時には、その時は已に彼等の心は贅澤や或は世間の流行に奪はれてゐるのである。そして此の趣味は確かにひとりでに子供自身の心に生じたものではないのである。此の着物の選擇及び選擇の動機の爲めに教育がどの位多くの影響を受けてゐるか解らない。たゞに近眼者流の母親たちが自分たちの子供に褒美として裝身具を與へる約束をするばかりではなく、世の中には罰として生徒に最も質素で粗末な着物を着せるぞと嚇かす馬鹿な教師がある。即ち彼等は、もつと勉强しなければ、もつと着物に氣を付けなければ、百姓の子供のやうな着物を着なくてはいけませんよなどと言ふ。が、これは人間の値打は着物で極まるのですよ、あなたの値打はあなたの着物の値打なんですよといふのと異ならぬ。宜なるかな、吾國の若い人々が此の教訓の御蔭を蒙つてゐる事、彼等は着物以外の何事にも氣を付けないといふ事や、又彼等が外觀ばかりで眞價を判斷するといふ事は驚くにあたらないのである。

若し私がこんな風に損はれた子供を本性に立ち返らせねばならなかつた場合には、私は彼の最新流行の衣服が彼を最も窮屈にし、彼を總ての方面から壓縮し、束縛し、煩はすやうに心を配る

であらう。自由と歡喜とは彼が華美な風をしてゐる爲めに逃げ出して了ふやうに心を配るであらう。若し彼が質素な着物を着てゐる子供とまじつて遊戯をしたいと望んだ時には、子供等は遊戯を止めてすぐに走せ去つて了ふやうにする。遂に私は彼が、華美な着物に倦き〳〵し、それを見るのもうんざりする位金びかの着物の奴隷にしてやる。そして彼が自分の晴着の衣裳を見るよりは、最も陰慘な牢獄を見る方がましだと思ふ位にしてやる。子供が吾々の偏見の爲めに囚はれてゐない限りは、彼が最も望むものは、自由で愉快であることである。彼に最も多くの自由を與へる最も質素で最も愉快な衣服こそ、彼にとつて最も貴重なものである。

世には活動的生活に適した身體の習慣と靜かな生活に適した身體の習慣とがある。後者は血液の運行を平調且つ一樣ならしめるものであるから、身體を大氣の變化に對して保護しなければならない。前者は絶えず活動から休息へ、暑熱から寒冷へと移つてゆくのであるから、身體を此の變化に慣らさなければならない。そこで室内の坐業に從事して居る人々は、凡ゆる季節、凡ゆる時に出來るだけ同一溫度を保つ爲めに、常に溫かに着物を着てゐなければならないが、多く運動をして其の時間の大部分を戸外で暮らす人々、天氣の時も風か吹いても雨が降つても出たり入つたりする人々は、不便を感ぜずに、大氣中に生ずる變化に慣れるやうに、又凡ゆる溫度に慣れるやうに、常に輕快な着物を着てゐなければならない。私は此の兩者に季節の變化と共に衣服を更へることを決してしないやうに忠告する。そしてこれは私の生徒のエミイルの不變な習慣となるであらう。だが私の言ふ意味は、エミイルが多數の坐業的習慣の人間のやうに夏の時に多の衣服を着て居るといふのではなくて、烈しく勞働する人々のやうに冬にも夏の着物を着て居るといふのである。サア・アイザック・ニュウトンは一生涯これを行つて八十歳になるまで生きて居たのである。

エミイルには一年中頭に何も被らせない。古代エヂプト人は常に無帽で暮した。ペルシャ人は重い頭被を戴き、大きな布を頭に卷き付けるのを常としたが、これはシャルダン氏の說に依れば、この國の氣候の關係上必要であつたのであるといふ。私はヘロドタスが戰場でペルシャ人の頭蓋骨とエヂプト人の頭蓋骨との區別をしたことを、別の處で述べた(註二五)。頭腦を傷害に對して保護するのみならず冷氣、暑熱及び大氣の凡ゆる影響に對して保護する爲めに、頭蓋骨は成るべく脆弱でなく多孔でなく最も頑丈に强堅に發達させる必要がある。だから、諸君は諸君の子供を、夏でも冬でも、晝でも夜でも無帽にして置くやうに慣らさなければならない。若し諸君が子供の毛髮を淸潔にし、亂さないやうにしようと思つて寢帽を被せるならばバスク族が髮を包んでゐるやうな、網のやうな薄い半透明のものを用ひなければならぬ。大抵の母親は私の議論よりはシャルダン氏の說の印象を一層深く受けて、どこの國の氣候もペルシャの氣候であるやうに考へるだらうと私は察して居る。しかし私がヨオロッパ人の生徒を選んだのは、彼をアジア人に育てあげる爲めではないのである。

(註二五) 演劇についてダラムベエルに與ふる書

子供は、殊に赤ん坊の時には、一般に餘り着物を着せられすぎて居る。子供等は暑熱に慣らすよりも、むしろ寒冷に慣らすべきである。若し子供等が早くから冷氣に曝らされてゐたならば、非常な寒氣も彼等に何等の害を及ぼすものではない。だが彼等の皮膚は未だ極めて柔かく、弱いから、餘りにだく〳〵發汗させると、過度の熱の爲めに疲弊することは免かれない。幼兒の死亡率は、一年中で八月が最大であるといふことが認められてゐる。加ふるに北方民族と南方民族と

の比較に由つて、極度な寒冷に堪へる方が極度な暑熱に堪へるよりも強健になるものであるといふことは、確實であるらしい。だが子供の身體が段々と大きくなり又其の筋肉が漸次に強健になるに從つて、漸次に太陽の光線に堪へるやうに訓練しなければならない。これを徐々に行つてゆけば諸君は彼の身體を熱帶の極暑の中でさも危險なしに鍛へることができるであらう。

ロックは男らしい物の解つた教訓を吾々に與へてゐるが、その中で、彼のやうな緻密な思想家としては合點のゆかないやうな矛盾に陷入つてゐる。夏も冬も氷のやうな冷水浴を子供に行はせたいと思つてゐる其の同じ人が、子供等が暖たまつて來た時に冷水を飲んだり、濕つた土地の上に(註二六)横臥してはならないといふのだ。しかしロックは如何なる時にも靴をしめらして置かうとしてゐるが一體子供の靴は彼の身體が暖まつてゐる時の方がしめつてゐることが少ないであらうか？　吾々は彼が手から足へ、又顏から身體へ推論した議論を足から身體へ推論することを彼に求めることはできぬだらうか？　私は彼に言ひたい、若し貴下が人間が顏ばかりであることを欲するならば、私が人間が足ばかりであることを望むのを何故貴下は非難するのであるかと。

エミール

(註二六)　まるで百姓の子供が坐つたり寢たりする爲めに、非常に乾いた土地を好むかのやうに、大地の濕氣が百姓の身體を一人だつて害したことがないのを吾々が知らないかのやうに。かういふ事を醫者に聞いた人は、未開人はみんなリューマチスに罹つてゐると考へるであらう。

子供が暑い時に水を飲むのを避ける爲めに、子供が水を飲む前に一片の麵麭を食べるやうにならさなければならないと彼は言ふ。子供が咽喉が渴いて居るからと言つて、物を食べさせねばならぬといふのは實に不思議な事だ。私ならむしろ彼が空腹な時に水を飲ませる。吾々の最初の食慾は極めて不規則になつて居て、吾々は自分の生命を危險にさらさなければ、それを滿足させる

事が出來兼ねるといふことを、誰だつて私に信ぜしめる事は出來ない。若しそれが事實だとすれば人は、如何にして自己の生存を續けるかを知る以前に、百度も死んでゐたであらう。

私はエミイルが咽喉が乾いた時にはいつでも飲料を與へようと思ふ。而して冬の眞中でも又汗びつしよりになつて居る時でも、水を溫めさへもせずに、新鮮な水をその儘飲ませるやうにしたい。唯だ一つ私が忠告したいことは、彼に與へる水の質に注意を拂ふことである。河の水ならば早速汲んできて其の儘で與へていゝ。泉の水なら、それを彼に飲ませる以前に暫く空氣に曝らして置くがいゝ。暖かい天氣の時には河川も暖かいが、泉の水は空氣と接觸してゐないからさうではない。此場合には水の溫度が空氣の溫度と同一になるまで待たなければならない。之に反して冬は泉の水の方が河の水よりも安全である。しかしながら冬期に、殊に戸外に於ては、澤山に汗をかくといふことは減多にないことでもあり又不自然でもある。蓋し寒冷なる空氣が絶えず皮膚を刺戟して汗を内部へ追ひ込み、氣孔が汗の自由に出るほどに開くのを妨げるからである。ところで私は冬期に火の傍でエミイルを訓練しようとは思つてゐない。戸外で、原つぱで、氷の中で彼を訓練しようと思つてゐるのだ。若し彼がたゞ雪球を造つたりそれを投げたりして暖たまつたときならば、彼が渴をおぼえたら隨意に水を飲ませ、飲んだ後も尙ほ運動を續けさせるがよい。何等かの間違ひがあらうなどと心配してはならない。若し他の運動によつて彼が發汗し始めて、渴を覺えたときでも矢張り、冷い水を飲ませてよい。たゞ注意すべきは、この時には彼を少し離れた處まで歩かせて行つて、それからその水を求めさせるやうにしなくてはならない。今假定しつゝあるやうな寒氣の場合では、其處に着いたときは、彼は何の危險なしにその冷い水を飲むことが出來るだけ十分に冷却してゐるに違ひない。だがとりわけ、彼にこのことを氣取られぬやう

に用心せねばならぬ。私は、彼が始終その健康を心配してばかりゐるよりも、時々病氣になつた方が可いと思ふ。

子供は激烈な運動をするから、彼等には十分長い睡眠が必要である。睡眠が運動による疲れを緩和するに役立つのだ。これが、此の兩者の彼等に必要なことを示してゐる。夜の時間は休息の時間である。これは自然によつてさう定められてゐる。太陽が地平線下に沒してゐるときには吾吾の睡眠がより靜和でより甘美であるが、太陽の光線に暖つた空氣は吾々の感官をそれ程平靜にしては置かぬといふことは、吾々の常に見てゐるところである。それ故に、太陽と共に起き、太陽と共に寢るといふことは、確に最も健全な習慣である。そこで吾々の住む國では、人間や凡ての動物が、一般に夏よりも冬の方が長く睡眠することを欲するのである。だが文明人の生活は甚だ複雜して居り、不自然であり、革命や不慮の出來事を免れぬものであるから、人間をかゝる一定の習慣に馴致して、彼をこれなしには何うにもならぬやうにさせてはならぬ。疑ひもなく規則に從ふことは必要である、だが最大の規則は、若し必要な場合にはかゝる規則を破ることが出來るといふ規則である。それ故に、諸君の生徒をいつも一つゞきに平和に睡眠させつゞけて彼を懦弱にするやうな思慮のない眞似をしてはならない。最初は彼を何の邪魔もせずに自然の法則に任せておくがよい。だが人間社會にあつては、此の法則を超越する必要があるといふことを忘れてはならない。彼は遲く寢たり、早く起きたり、突然呼び起されたり、或は終夜睡らなくてゐたりしても何の害も受けずにゐるといふことのできる必要がある。早く着手し、斷えず穩かに徐々に進めば、吾々は、人間の體質を、大人になつてから急に加へると身體をこはすやうな境遇にさへ慣らすことが出來る。

第一に、寢心地のよくない寢臺でねる習慣が肝心である。これこそ、寢心地の悪い寢臺といふものを知らなくなる最良の手段である。一般的にいへば、嚴重な生活は、一度習慣になるやいなや、愉快な感情を增大するものであり、懦弱な生活は、無數の不愉快な感情を準備するものである。餘りに大事に養育された人々は、毛蒲團でなくては眠ることが出來ないが、裸の板の上に寢慣れたものは何處でゞもすぐに眠れる。床にはひるやいなや熟睡する人に取つては、世の中に寢心地の悪い寢床といふものはない。

柔い寢床では、吾々は羽毛や水鳥の綿毛に埋まつてゐるのであるが、かやうな寢床は、譬へて言へば身體を溶け込ましてしまふ。腰は餘り暖かに蔽ひ過ぎると炎症を起す。膽石病や其の他の疾病は往々これが原因となつてゐる、而してそれは凡ゆる疾病の醞釀場たる虛弱な體骼を作ることは間違ひがない。

最良なる寢床は吾々が最もよく眠れる寢床である。即ちエミイルと私とが晝間の中に吾々自身で用意するやうな寢床である。吾々はペルシヤの奴隷をつれてきて吾々の寢床を作つて貰ふ必要がない。吾々は土を弄りながら蒲團を作つてゐるのである。

私は經驗によつて、子供が健全なときには、吾々は殆んど思ふ儘に彼を寢かしたり起したりする事が出來るといふことを知つて居る。子供が寢る時によく種々とお饒舌をして乳母を煩勞がらせるが、かういふ場合に乳母は、『さあ寢るんですよ』と言ふ。がこれは子供が病氣の時に『全快おなりなさい』といふのと同樣である。子供を寢かす眞の方法は、子供をひとりでに疲れさすことに在る。子供が默らざるを得なくなるまで十分に話をせよ。さうすれば、子供は忽ち熟睡するであらう。お說教は何時も何事かには效目がある。搖籃を搖かすのもお說教をして聞かせるのも

同じだ。だが夜、此の催眠藥を用ひるのはよいが、晝間は用ひてはならない。

私はエミイルを、餘り長く寢過ごさせぬためといふよりも寧ろ彼を總ての事柄に慣らす爲め、突然呼び醒まされる事にさへ慣らす爲めに、時々エミイルを起こすことにする。それだけに止まらず、私が彼に一言も云はずに、彼を獨りで目覺まさせ、言はゞ、私の意の儘に起き上らせることが出來なければ、私は殆んど私の仕事を果すだけの能力がないことになるであらう。

若し彼が十分眠らないときには、私は彼に明日の朝が大變辛いぞといふことを豫見させ、かうして彼をして幾許でも寢れば寢るだけ得だと考へさせるやうにする。又、彼が餘り遲くまで寢過ぎる場合には、彼が目を覺ました時に何か彼の好きな遊びをして見せるやうにする。若し私が一定の時間に彼に目を覺まさせたいと思へば、明朝六時に僕は釣に行くが一緒に來ないかとか、或は某々の場所へ散歩に行くが一緒に行かないかとか言ふであらう。彼は同意して私に起こして呉れと賴む。そこで私は其の場合の必要に應じて或は起こす約束をする、又は約束をしない。若し彼が甚く寢過せば私は已に出掛けて了つてゐない。彼が早速自分で起きることを覺えなければ、何か損なことがあるやうにする。

それから之れは減多に無い事柄だが、不活潑な子供が怠けて床の中でぐづ〳〵して居たがる場合には、決してかゝる傾向に讓歩してはならない。でないと全く彼をのらくら者にしてしまふ。だから此の時には何か彼を目覺ますべき刺戟を與へなければならない。こゝで諸君はこれを威力を用ひて力づくで彼を起すことだと思つてはならない、それは彼を活動させるやうな或る慾求を起させることである。斯くの如き慾求は自然が定めた方針に從つて愼重に選擇させると、一石を以て二鳥を殺す效果がある。

幾分の技倆のある人ならば、子供に、虛榮心や競爭心や嫉妬心を起こさせずに、趣味、又は熱望をすら起こさせることが出來ない譯がなからうと思ふ。子供等の元氣、彼等の模倣の精神、それで澤山である。殊に子供には自然の活潑さがある。これは甚だ確實な道具なのだが、今日まで此れを利用する工夫をした先生は未だ無い。總ての遊戯は、それが遊戯に過ぎないといふことが十分判つてゐる場合には、若し遊戯でない場合なら泣いて大變な騒ぎをしなければ承知しないやうな苦痛でも、不平を言はずに、乃至は笑つてそれを忍ぶ。長期の斷食、打擊、火傷、及び總ての種類の疲勞などは野蠻人の子供の遊戯である。それは苦痛といふことにさへも、それから苦しさを取り去つてしまふだけの魅力があるといふ證據である。けれども此の食物を調理することが總ての教師に出來るといふ譯ではなく、またどの生徒でも顏を顰めないでそれを食べられるといふ譯でもない。しかし私は此の邊で氣を付けないと、あまり本論の外へ逸れすぎることになる。

とはいへ、人間は苦痛や、凡ゆる種類の病氣や、不慮の災害や、生命の危險や、最後に死そのものゝ奴隷にすらなることを忍んではならぬ。人々はこれ等の觀念に慣れゝば慣れる程、我慢が出來ないでいら〳〵して却つて此の苦しみを增す神經過敏から、それだけ早く癒やされるであらう。人は彼を襲ふかもしれない苦痛に早く慣れゝば慣れるほど、モンテエニが言つた通りに、それだけ早く彼は苦痛に對する不慣れといふ針の痛さを免かれて、その靈魂を頑丈に强固にすることが出來るだらう。彼の肉體は、さもない場合には彼に致命傷を與へたかもしれぬ凡ゆる矢を防ぐ鎖帷子となるであらう。死が近づいて來ても、それは死そのものではないのだから、彼は殆んどそれを死だとは感じないであらう。いはゞ彼は死ぬといふことがないであらう。譬へて言はば、彼は生きて居るか、でなければ死んで了つてゐるかだ。決してその他の何物でもないであら

う。モンテエニュが、あるモロッコの王に就いて言つたこと(註二七)を彼に就いても言ふことができるであらう。即ち『どんな人間でもまだ死の中にまで生きのびたものはない』と。子供の他の美德と同樣、忍耐や剛毅も年期修業である。けれどもこれ等のものを、たゞその名前を覺えさせるだけで子供に教へることはできない。子供等にそれと覺らしめずにかゝるものを嗜ませるやうにすることこそ、眞にこれを彼等に教へる所以である。

(註二七) モンテエニュ、「エッセイ」第二卷第二十一章

しかし死の話の序でにいはう。吾々の生徒を天然痘の危險に就いて、吾々は何ういふ風に處してゆけばよいのであらうか？　彼が幼い時に種痘を施すべきであらうか、それとも自然の成行でそれに罹るのを待つてゐようか？　此の第一の方法は一層吾々の實踐には合つてゐる。何故ならばそれは生命の價値が最も大きい時代の危險から免れしめるからである。尤もこれは種痘を適當に行ふ時にも危險といふ言葉が使へるものとしての話であるが。

けれども第二の方法の方が吾々の一般的原則とは一層よく合致してゐる。といふのは、これは自然をして自分獨りで行ひたがつて居る配慮、人間がそれに干渉しようとすると直に棄てゝ了ふ配慮を取るに任せておくことだからである。自然人は何時でも用意が出來てゐる、自然自らをして彼に種痘せしめよ、自然は吾々よりも一層適當な時期を選むであらう。

諸君は私が種痘の咎め立てをしてゐるのだと思つてはならない。何故ならば、私の生徒に種痘をさせないといふ私の理由は、諸君の生徒には少しも當て嵌めることが出來ないからである。諸君の教育では、子供等が天然痘に感染しさうになるやいなや、どうしてもそれから免かれられないやうに用意がしてあるのだ。若し諸君が勝手に天然痘の襲ふまゝに子供をそれに罹らせたならば、子供達は恐らく死んでしまふであらう。私は、色々の國で、種痘が必要であればある程それに對する反對も增してゐるといふことを知つてゐるが、其の理由は明白である。そこで私は殆んどエミイルの爲めに此の問題を論ずることは欲しない。彼は時と場所と事情とに從つて或は種痘をさせるかも知れないし、させないかも知れない。これは彼に取つて殆んど何うでもいゝ問題である。若し彼に種痘に由つて疱瘡をさせれば、吾々には彼の病氣を前もつて豫見するといふ利益がある、これも一利ではあらう。又自然にそれに罹れば、彼を醫者の手に掛けないでもすむ、これは一層良いことである。

特殊教育、その教育を受けた者を人類の多數から引離して置くやうにするに過ぎない教育では、普通の訓育が一層有用である場合でさへも、普通の訓育よりも費用の高くかゝる訓育を選むのが例である。即ち、總て入念に教育された青年達は馬に乘ることを學ぶが、それは金がかゝるものだからである。だが泳ぎを學ぶ者は殆んど一人もない。それは全く金が要らないからで、職人でも總ての人々と同じやうに泳ぐことが出來るからである。とはいへ騎馬學校を卒業しないでも旅行家は馬に乘ることを知つてゐる、確かりと乘ることを知つてゐる、必要に應じては十分上手に乘ることを知つてゐる。だが水の中では、若し泳ぐことを知らなければ吾々は溺れてしまふ。而して吾々は教はらなければ泳ぐことは出來ない。又吾々は馬に乘らなければ命があぶないといふやうなことはない。ところが何人でも溺死といふ屢々ある危險から免れ得るとは保證が出來ない。エミイルは水の中にも陸の上にもひとしく住むであらう。何故に彼は有らゆる元素の中で生活されないといふことがあらう。若し人が空を翔ぶことを學ぶことが出來るならば、私は彼を鷲にす

るであらう。若し彼が熱に堪へることが出來るならば、私は彼を火蛇（サラマンダー）にするであらう。

世人は、子供等が泳ぐ稽古をしてゐる間に溺死しはせぬかと恐れてゐる。若し彼が泳ぐことを習つてゐる間に死なうとも、又は游泳を習はなかつた爲めに死なうとも、それは諸君の過失であらう。虚榮のみが吾々を向ふ見ずにする。誰も見てゐる者がない時には吾々は向ふ見ずではない。エミイルはたとへ全世界が見てゐても決して向ふ見ずは爲ないであらう。練習はその危險の如何によるものではないから、エミイルは父親の庭園内の泉水を泳ぐことによつて、それでヘレスポント（ダーダネルス海峽の舊稱）を横斷することを學ぶであらう。しかし彼は危險にも亦慣らされてゐなければならない。それは危險になれて、それに惱まされないやうにして置かなければならないからだ。これが私が先程述べた所謂年期修業の根本的部分である。その上、私は彼の能力に相應して危險の程度を加減するやうに注意し、私も彼と共にその危險を分擔して、私の生命に對すると等しく彼の生命に對しても注意を拂つたならば、如何なる不注意をも恐れる必要がないであらう。

子供は大人よりは小さい、子供には大人程の力も理性もない。しかし彼は大人と同じやうに若くは殆んど同じやうに見、また聞く。子供の味覺は大人ほどにデリケートではないが立派に發達して居る。そして子供は大人ほどに敏感ではないが匂ひを明白に識別する。感覺は吾々の能力の中で最初に發達し最初に完成するものである。それ故に吾々は感覺を培養しなくてはならぬ。これは忘却されてゐる唯一のものである。等閑視されることの最も多いものである。

感官を訓練するためには單にそれを用ふるだけでは十分でない。吾々は感官に依つて正しく判斷することを學ばなければならない。いはゞ感ずることを學ばなければならない。といふのは吾吾は自分の學んだやうにしか、觸れたり、見たり、聞いたりすることが出來ないからである。

世の中には判斷に何等寄與するところなくして身體を發達させるだけに役立つ依然たる自然的な機械的な運動がある。泳ぐことも跳ねることも獨樂（こま）を廻すことも石を投げることも、何れも大いに結構である。しかし吾々は手と足を持つてゐるだけであらうか？　吾々には目と耳があるではないか？　而してこれ等の器官は手足を使ふときには餘計なものであらうか？故に子供の體力だけを練磨せずに、體力を指導する凡ゆる感覺を練磨しなければならない。これ等の感覺の各々は出來る限り利用せよ、次に一の感覺を用ひて他の感覺の得た印象の眞僞を確かめよ。量を計り、數を算へ、重さを測り、比較せよ、力を用ひるには抵抗力を商量した後にせよ。手段を用ふる以前に必ず結果を見積らすやうにせよ。子供等をして不十分な骨折或は餘分な骨折は決してしないやうにさせよ。此の方法に由つて諸君は子供の凡ゆる運動の結果を秤量することを彼に仕込み、而して經驗に依つてその間違ひを正すやうに仕込むならば、彼が行動すればするほど賢くなるのは明白ではないか？

重い塊を動かす場合を例に採つて見よう、若し子供が餘り長過ぎる梃子を用ひれば力を浪費することになる。又短か過ぎる梃子ならば力が足りない。經驗は彼が丁度必要としてゐる梃子を選ぶことを彼に教へることが出來る。だから、かゝる知慧は彼の年頃に不相應なものではない。彼が或る荷物を運ぶ場合には丁度彼に運べるだけの荷物を運び、彼に持ちきれないほどのものを運ばないやうにするためには、彼は先づその見かけによつて重さを量らなければならないではないか？　若し彼が、同じ物質で大きさの異ふ物體を比較することが出來るならば、彼をして大きさが同じの異ふ物質を選ませてみよ、彼は此の二つの物質の比重を比較しなければならないことになる。私は嘗つて十分に教育を受けた青年が、大きな樫の木片の一杯に這入つた桶の方が、同じ

桶に水を一杯入れたものよりも輕いといふことを、實驗して見るまで信じようとしなかつたことのあつたのを覺えて居る。

吾々の凡ゆる感覺が同じやうに吾々の自由になるものではない。感覺の中の一つの觸覺は吾々の目覺めて居る時間中は休むことがない。それは吾々の身體の全表面に擴がつてゐて、恰も何か吾々に害を與へるものが有りはしないかと何時も油斷なく見張つてゐる歩哨のやうなものである。吾々が欲すると欲しないとに拘らず、吾々は何よりも最初に此の感覺の不斷の行使に依つて經驗を得る。それ故に、此の感覺の爲めに特殊な訓練をする必要は尠い。しかしながら盲人は吾々よりも一層確かで且つ一層微妙な觸覺をもつてゐるのを吾々は知つてゐる。蓋し盲人は視覺で導かれてゐない爲めに、吾々が視覺から得る判斷を專ら觸覺から得なければならないからである。然らば何故に吾々は暗の中で彼等のやうに歩行き、吾々の觸れた物を認め、吾々の周圍の事物を識別するやうに訓練されてゐないのであるか、一言で云へば、何故晝間盲人が視力を用ひずに行ふことを、吾々は夜間に光なしで行ふやうに訓練されてゐないのであるか？　太陽が輝いてゐる間は吾々の方が彼等より都合よく生活してゐる。が暗黑の中になると今度は彼等が吾々の案内をする。吾々は生涯半分は盲目なのである。唯だ盲目と異つてゐるのは、眞實盲目の者は常に自己を自ら導いてゆくことを知つてゐるが、吾々は眞夜中には一歩も歩けないといふことである。吾々は燈火を持つて居ると、諸君は言ふ。何んだ！　又しても機械だ！　必要な時には何時でも燈火が諸君のあとからついてきてゐると諸君に受け合へる人があらうか？　私はエミイルの目が蠟燭屋の店に附いてゐるよりは、指先に附いてゐる方を望む。

諸君が若し夜間に建物の中に閉ぢ込められた場合には、手を叩け、さうすればその場處の共鳴

によつて、場處が大きいか小さいか、或は部屋の眞中に居るかそれとも隅に居るかといふことを知ることが出來るであらう。壁から半フート離れてゐるところでは、空氣は自由に流動しないで屈折するから、諸君の顏に別な感覺を與へるであらう。一箇所にじつと立ち止まつて、有らゆる力向に向きを變へてみよ、若し戸があいてゐれば輕い氣流でそのことが解るであらう。諸君が舟に乘つてゐる場合ならば、諸君の顏に當る空氣の向きに依つて、諸君の進行して行く方向のみならず、諸君を運んで行く河の流れが急であるか又は緩やかであるかといふことがわかるであらう。これ等の觀測やその他のこれに類似した多くの觀測は、それを適當に行ふには夜間に限るのである。晝間は如何に多くの注意を拂つても、吾々は常に視力の爲めに援けられ或は氣を散らされるから、十分に觀測することは出來ないであらう。しかし此の場合は吾々は手も杖も用ひずにすむ。吾々は觸覺によつて、全く何物にも觸れないでも、どの位澤山の事柄を學ぶことが出來ることであらうか！

私は暗の中で澤山の遊戯をして見たい。此の忠告は最初に考へるよりは重要なものである。人間は自然に暗黑を恐れるものである、時々は動物もさうである(註二八)。理性と知識と決心と勇氣とをもつてしても此の恐怖から免れる人は少ない。私は晝間は極めて勇敢な、しかし暗の中では木の葉の擦れる音にも婦人のやうに慄へる思想家や、獨尊家や哲學者や勇者を見たことがある。この恐怖は乳母の物語に依るものであるとされてゐる。だがそれは間違ひである。それには自然的な原因があるのだ。此の原因は何んであるか？　聾耳者を疑ひ深くさせ、下層階級の人々を迷信深くさせるのと同じもの、即ち吾々の周圍にある及び吾々の周圍に起つてゐる事柄についての無知である(註二九)。遠くから物事を見てその印象を豫見することに慣れてゐるから、私は、自分

が周圍を見ることが出來ないからと言つて、自分の周圍に澤山のものがあり、凡ゆる種類の運動があり、それが自分に害を與へるかも知れぬと想像せずにをられようか？　それ等のものに對して自分を保護することが私に出來ない、といふことを想像せずに居られようか？　今自分のゐる處は安全だといふことを知つてゐても無駄である。自分が實際に目でそれを見てゐる時ほど確信することは出來ない、そこで白日の下に於いてはもたなかつた恐怖の原因を自分は常に持つてゐることになる。尤も私は外部の物體が私に作用する時には必ず若干の音がするといふことを知つてゐる、そこで如何に熱心に私は聞き耳を立てることであらう！　譯の解らない少しの音でも聞えると、自己保存の慾望が自分に、自己を守らせるやうな凡ゆる事柄を、從つて恐怖せしめるやうな有らゆる事柄を想定させるのである。

（註二八）此の恐怖は大きな日蝕の節には殊に著しい。

（註二九）今一つの原因は余がその人の著書を屢々引用して居る或る哲學者が立派に說明してゐる。その哲學者の廣い見識に私は大いに負ふ處がある。同氏は次の如く言つてゐる。

『特別なる事情の下にあつて、吾々が距離の正確な觀念をもつことが出來ない場合、吾々が角度の大きさに由つてといふよりもむしろ吾々の眼に映じた形象の大きさに由つて判斷するより外に方法が無い場合には、吾々は物體の大きさに就いて臨されざるを得ない。吾々が夜間に旅行してゐる場合に近くに在る藪を遠方に在る大きな樹木だと思ひ、反對に遠方の大木を近所の藪だと思ふことがあるのは誰でも經驗して知つてゐる處である。これと同じやうに、若し物體が吾々の見知らない形狀のものである爲めに上記のやうな方法では其の大きさが解らない場合には、右と同じやうにその大きさを間違へるであらう。若し一疋の蠅が吾々の眼から二三吋の處を敏速に飛び過ぎると、吾々はそれを遠くを飛んでゐる鳥だと思ふ。稍々羊に似たやうな樣子をして、潤けた原野の眞中に、吾々から遠く離れた處に馬が靜かに立つて居ると、吾々はそれを馬だといふことを認めるまでは、それを大きな羊と間違へてゐるであらう。けれど吾々が其の何物であるかを認めると共に、それは馬と同じ大きさに思はれてくる。そして吾々は直ちに以前の判斷を訂正するであらう。

吾々が偶々夜間に未知の場所に居て距離を判斷することの出來ない場合、そして暗い爲めに形で物體を判斷することが出來ない場合には、吾々の視野に入つた物體を間違つて判斷するといふ虞れが絕えない。そこで夜の恐怖、即ち暗夜に大抵の人々が經驗する內心の恐怖が生ずる。これが極めて多數の人々が見たことがあると白狀する、彼の幽靈や怪物や大入道の出現の原因となつてゐるのである。此の人々はたゞ自分がさういふ事柄を想像したのだと他人から言はれるが、その實彼等は本當にそれを見たのかも知れない。又彼等が見たと云ふ事柄を彼等が眞實見るといふことは全く有り得ることである。何となれば、吾々の眼に映じた角度に依つて物體の大きさを測るより外に道がない場合には、吾々が近づくに從つてその未知の物體が大きくなつてゆくといふことは、常にあるべき筈だからである。そして若し觀者が二三十呎も離れてゐた時に數呎の高さがあると思つてゐたのならば、數呎しか離れてゐないところで見た時には非常に大きく見えるであらう。實際これは觀者がその物體に觸つてみてその何物であるかといふことを認めるまでは、觀者を驚かすに相違ない。蓋し彼がその何物なるかを認めるや否や、非常に巨きく見えたものが急に小さくなつて其の本來の大きさに還るからである。しかし若し吾々が逃げ出して了つたり或は近づくことを怖れた場合は、吾々の眼に映じた形象のそれ以外に此の物體の觀念を持つことは出來ない、それで吾々は本當に驚くべき大きさと形をもつた怪物を見たことになつたであらう。そこで幽靈を見たと思ひこむことには自然的の理由がある。而して此等のものゝ出現は哲學者が信じてゐるやうに、單に想像の產物ばかりでもないのである。』…（ビュッフオン氏博物誌第四卷二二頁）

本文に於いて私は幽靈等が必ず一部分は想像の產物であるといふことを明かにしようと試みた。そして右の引用文の中に說明された原因については、明らかに、夜間散步をするといふ習慣が、形狀の類似と距離の不同との爲めに生ずる暗中の物體の外見を識別することを敎へるであらう。吾々がまだ物の輪郭を見ることが出來るほど空氣が明るいときならば物體が一層遠く離れてゐれば、吾々と物體との間には一層多くの空氣が介在してゐるのだから、遠く離れてゐる場合には稍々不分明に物體は見えなければならない。これに由つて吾々がそれに慣れてゐればビュッフオン氏がこゝに述べてゐるやうな誤謬を防ぐことが出來るのである。何れの說明を諸君が採るにしても私の方法は猶有效であつて、經驗は全くそれを證據立てゝ居るのである。

私が全く音を聞かない場合にも、そのために私は安心ではない。何故ならば、要するに、何の

音も立てずに私は驚かされるかも知れないからである。私は萬事をかつて見た當時の有樣で想像しなければならない。萬事を今なほ當然さうあるべきだと想像しなければならない。私は自分に見えない物を見なければならない。斯くて自分の想像力を用ひざるを得なくなり、その想像力は最早や私の自由にはならぬので、私は自分を安心させるためにしたことが、たゞ益々自分を驚かすやうになつて來る。音が聞えると、泥棒だと思ふ。全く音が聞えないと、幽靈が見える。自己保存の本能によつて刺戟される用心は、たゞ自分に恐怖の主體を與へるだけになつて來る。自分を安心せしむべきものは總て自分の理性にのみ存在する。が理性の聲よりも大きい本能の聲が理性とは別のことを私につげる。世には全く恐るべきものが無いと考へたとて、吾々に何も爲すべきことがない以上、何の益があらうか？

ルイミエ

災害の原因が發見されたことはその災害が救治されたことを示す。何事に於いてにまれ、習慣は想像を殺してしまふ。想像を眼醒すものは新奇なものだけに限る。吾々が毎日見てゐる事柄に作用するのは記憶であつて想像ではない、これが情熱の火か燃えるのだからである。だから諸君は暗を怖れることを矯正してやりたいと思ふ人と議論をしてはならぬ、彼を屢々暗い場所へ連れて行けば、大丈夫此の練習の方が凡ゆる哲學の議論よりは一層役に立つ。屋根の上に居る瓦職工は眩暈を知らない。暗の中にゐることに慣れた人が暗を恐れることは決してないものだ。

そこで夜の遊戯から得られるものには第一の利益と別な今一つの利益があることになる。然しこれ等の遊戯を成功させる爲めには、私は飽くまで愉快な遊戯が必要だといふことを强調しなければならない。暗闇ほど陰鬱なものはない。諸君の子供を牢獄へ閉ぢ込めてはならない。彼が暗

い場所へ行く時に彼を笑はせるやうにせよ。又暗から出る前に再び彼を笑はせるやうにせよ。彼がそこにゐる間、自分の今止める遊戯の考へと、此の次に遊ぶ遊戯の考へとが、彼をそこへ探してやつて來るかもしれない幻覺的な想像から彼を護つてくれるやうにせよ。

人の生涯には、そこを越せば、進めば進む程後退する標界がある。私は、自分が此の標界を通り過ぎたやうな感じがする。私はいはゞ別の生涯を始め直してゐるのである。今私に感じられつつある成年期の空虛は、私を幼年時代の愉快な時期に連れ戻す。年を取るにつれて、私は再び子供になる。さうして三十のときにしたことよりも十のときにしたことの方をずつと容易に思ひ出す。讀者よ、私が時々自分の經驗から實例を引くことを許して貰ひたい。何故ならば、此の書を立派な出來榮のものにするためには、私が愉快な氣持ちで書かなくてはならぬからである。

昔私は田舍の、ラムベルシエといふ牧師の許に下宿してゐたことがあつた。當時一緒に下宿してゐた私の從兄弟は私よりもずつと富裕で、父家の相續人として取扱はれてゐたが、反對に私の方は父親から遠く離れてゐたので、眞の貧しい孤兒に外ならなかつた。私の從兄のベルナアルはまた臆病で、殊に夜になるとさうであつた。私は彼の臆病を甚く嘲弄した。それでラムベルシエ牧師が私の高慢を怒つて、一つ私の勇氣を試めしてみようと決心した。或る秋の夜、ひどく暗くなつてから、彼は私に教會堂の鍵を渡した、さうして私に說教壇の上に忘れた聖書を持つて來てくれと云つた。それから彼は私の名譽心を挑發させるやうに、私をして拒むことの出來なくさせるやうな言葉を二三言ひ足した。

私は燈火をもたずに出かけた。若し私が燈火をもつてゐたならば、恐らく更に遙かに惡かつたことであらう。私は途中墓場を通らなければならなかつた。私はそこを勇敢に通つて行つた。何

故ならば私は戸外にゐると思つてゐるかぎりは、少しも暗を恐がつたことがなかつたからであつた。

私が戸を開けるとき、屋根に一種の反響が聞えた。それは丁度人の聲のやうに響いたので、私のロオマ人のやうな勇氣が搖ぎ始めた。いよ〳〵戸を開けて、私は中に入らうとした。だが私は數歩踏み込むやいなや、突然立ち止つた。此の廣大な建物の中に滿ちみちてゐる深い暗黑をみては、流石の私も、恐怖に捉はれて髮を逆立たせた。私は後退りして、外へ出て、がた〳〵慄へながら逃げ始めた。私は中庭でシュルタンといふ名前の小犬に會つた。それを抱くと幾分氣が落ついた。自分の恐怖に恥ぢた私は、今度はシュルタンを連れて、も一度引返さうと試みた。だがシュルタンは私に附いて來ることをいやがつた。私は急いで入口をくゞつて、教會堂の中に入つた。中に入るか入らぬに、又もや私は恐怖に囚はれた。しかも今度の恐怖はひどくて私は氣が顚倒した。それで說教壇は右側にあつて、そのことを私はよく知つてゐたに係らず、ついうか〳〵して ゐて、長い間左側を探した。私は腰掛の列の間に紛れ込んで、自分が何處にゐるのか分からなくなつた。さうして說教壇も戸口も見付けることが出來ぬので、私は何ともいへない顚倒した心地になつた。やがて私は戸口を見つけて、辛うじて會堂から出た。さうして眞晝の外は決して二度と教會の中へ入るまいと決心しながら、前にしたと同じやうに走つて逃げ出した。

私は家の傍まで歸つた。今や入らうとすると、私の耳にはラムベルシェ牧師が大聲に笑つて笑つて笑ひぬいてゐる聲が聞えた。私はそれを自分を嘲笑してゐるものと考へた。それで此の笑の目標となるのに當惑して、戸を開けるのを躊躇してゐた。丁度その時、ラムベルシェ牧師の娘さんが私のことを心配して、召使の女に提燈をもつて來るやうにいひつけてゐるのが聞えた。さう

してラムベルシェ牧師は私の豪膽な從兄を伴につれて私を探しに出ようとしてゐる樣子であつた。此の次にはあの從兄に此の冒險の名譽を一人占めにさせるつもりなのだらう。さう思ふと同時に私の有らゆる恐怖が消え失せた。たゞ殘つたものは私の逃げたのに呆れる感情だけであつた。私は駈けた、そして會堂に飛んで行つた。道を迷ひもせず、手探りもせずに、私は說教壇のところに行つた、そこへ上つて、聖書をつかんで、階段をかけ下りた。たつた三足で私は會堂から出た。戸を閉めることさへ全く忘れてしまつた、私は呼吸を切らしながら家へ入つた。私は喫驚しつゝも、危く來かけてゐた應援をうけずに成し遂げたといふ得意に胸を躍らせながら、卓子の上に聖書を投げ出した。

諸君は或は私にかう尋ねるかも知れない。此の逸話は吾々の從ふべき手本として與へられてゐるのか、或は私が此の種の遊戲に要求する面白味の一例として與へてゐるのか何うか、と。いやさうではない、たゞ何人にまれ夜の暗黑を恐れる人にとつては、隣りの部屋で一座の人間が笑つたり靜かに話したりしてゐるのを聞くこと程安心させることの出來るものがないといふ證據に、これを語つたのである。私は諸君がたゞその生徒だけを相手に遊ばずに、每夕陽氣な一團の子供達を集めてするが可いと思ふ。最初は彼等を別々に遣つてはならない、幾人かを一緒に遣るが可い、それからどの子供にせよ、その子供が甚く物恐ぢしないといふことが確信されるまでは、彼を全く一人で冒險に出してはならない。

これを工夫するに何の熟練も要せずに濟むことを考へると、私はかゝる遊戲程愉快な、かゝる遊戲程有用なものは他に想像することが出來ない。私は大きな部屋に、卓子や、腕椅子や、椅子や、衝立で一種の迷路を造る。此の何とも言へぬ曲りくねつた迷路に、入つか十許の僞の箱を並

エミイル

べ、その中にたつた一つ、菓子を一杯入れた外見は殆んど同じやうな眞實の箱を混ぜて置く。私は簡單に明晰に此の眞實の箱の見出される場處を說明してきかせる。それから子供等よりも注意深い、だが子供等ほど輕躁でない大人に對してそれを見分けることが出來るだけの說明を與へる(註三〇)。やがて此の小さな競爭者達に抽籤させた後、私は順々に一人々々、例の眞實の箱の見つかるまで出して遣るのである。私は彼等の熟練に應じて此の仕事の困難を增大させることが出來よう。

(註三〇) 子供等に注意させるには、彼等に十分理解させるために明白に彼等の現在の興味にかなふ物だけを言ふが可い、就中簡單に、餘計な言葉は一語も云つてはならぬ。だが諸君の言語を蹇澁たる或は疑はしい意味のあるものたらしめてはならない。

此の小エルキュールが、箱を手にしながら、自分の冒險にすつかり得意になつて歸つて來る樣を想像してみよ。箱は卓子の上に置かれる。恭しく開けられる。私はどつといふ笑ひ聲や陽氣な一座の叫び聲を聞くことが出來る、待ち設けた菓子ではなくて、甲虫か、蝸牛か、石炭の片か、蜀黍の幾粒か、蕪菁か、何かさういふ品物が綺麗に苔蘚か綿の上にのせて入れてあるのが見出されるからである。別の時には又、新しく白堊を塗つた部屋で、壁の近くに何か玩具か、小さな家具を吊り下げて置いて、子供達に壁に觸らずにそれをもつて來させるやうにする。それをとつて來る子供が歸つて來ると、若し彼が少しでも條件を守り損つたならば、帽子の緣が白くなつてゐたり、靴の爪先、上衣の裾か袖が彼の失敗を物語るに違ひない。それで此の種の遊戲の精神を示すには十分であらう、恐らく十分以上であらう。若し諸君が私が一から十まで話すのを期待してゐるならば、此の書を讀まぬが可い。

第二章

かく教育された人は、夜間他の人々に比較して何れ程の利益をもつてゐるか。彼の足は暗の中でも確固と踏むに馴れ、彼の手は周圍の事物に輕く觸れることに慣れてゐるので、彼は最も濃い暗黑の中でも安心してこの手足に導かれて行くであらう。彼の想像は小兒の時の樂しい夜間遊戲のことで一杯になつてゐるので、容易なことでは恐怖の對象の方に向けられないであらう。若し彼が何か笑ひ聲が聞えると考へるとすれば、それは狂氣した幽靈の笑ひではなしに、彼の昔の遊び仲間のそれとなるであらう。若し彼が一團の人間がゐると考へるならば、それは魔法使の深夜會合ではなしに、彼の教師の部屋の樂しい一團となるであらう。夜は彼にかういふ樂しい思ひ出ばかり喚び起させるので、決して彼を脅かすやうなことはないであらう。彼はそれを恐怖するどころか、却つて好むであらう。若し軍事行動の場合には、彼は一人でゞも隊を組んでゞも卽座に出發することが出來よう。彼はサウルの陣營に忍び込み(註三一)、道に迷はず駈け廻り、何人をも眼覺まさずに王の天幕まで進み、それから何人にも見付からずに取つて返すことが出來るであらう。レサス(註三二)の名馬を盜まなければならぬ場合でも、諸君は安心して彼を信賴して可い。かくの如く教育されない人々の間には、諸君は到底一ユリッシイズを見出すことが困難であらう。

(註三一) 譯者曰ふ、舊約全書、サムエル前書第二十六章にある故事、ダビデのこと。

(註三二) 譯者曰ふ、レサスはスレースの王アイオネウスの子でトロヤ方の勇將、その雪白の名馬がトロヤの野の草を喰めばトロヤ落ちずといふ神託があつたのでユリッシイズとデイオメデイズが途中でレサスの陣へ忍び入つて彼を殺してその名馬を盜んで來た、と言はれてゐる。

私は、專ら子供達を驚かすことによつて、彼等を夜の暗黑に恐れさせないやうに慣らさうと欲する人々を知つてゐる。此の方法は甚だ拙惡である。これは諸君の望んでゐる結果とは全然反對

の結果を生ずる。たゞ子供達を一層臆病にならせるだけである。その程度や種類が吾々に全然知れない現在の危險の觀念に對し、或は我々が度々經驗させられた驚愕の恐怖に對しては、理性も習慣も吾々に安心させることが出來ない。それだのに、如何にして諸君の生徒だけをこれに類した出來事から免れさせて行くことが出來ると確信できるだらうか？　私は次の語が、前もつて彼に與ふべき最良の忠告だと考へる。私は自分のエミイルに向つてかういふ、『さういふ時にはお前は正當防禦の立場にある、何故ならば、襲擊者はお前を害するつもりか、たゞお前を威かすつもりだけか何うかをお前に判斷する餘裕を與へない、さうして彼は有利な形勢を占めてゐるので、お前は逃げたとて逃げ切れるものではない。だから暗黑の中でお前を驚かすものは、人間にせよ動物にせよ、構はず確かりと捉まへるが可い、それを、力一杯に握り締めるが可い。若しそれがじたばたしたら打つてやれ。決してその打擊の强さを加減してはならぬぞ、さうして彼が何を言はうとも何をしようとも、それが何者だといふことがお前に分かるまでは決して手を緩めてはならぬぞ。かういふ出來事は恐らくお前に、世間には恐ろしいものが大して無いといふことを教へるであらう、又惡戲者をかういふ風に扱ふことは、自然彼等に二度とそれを試みさせないことにならう』と。

エミイル

觸覺が吾々の五官中最も不斷に使用されてゐるものであるとはいへ、觸覺の判斷は、私が前に云つたやうに、他の感覺の判斷よりも遙かに不完全で粗笨なものである。何故ならば吾々は斷えずそれを視覺と併用して居り、從つて眼は手よりも早く事物を識別するので、精神が殆んど手の助を借らずに判斷するからである。その代りに觸覺の判斷は最も確實なものである、何故ならばそれは正に最も制限されてゐるものだからである。即ちそれは吾々の手の達し得る限り以上に達

することが出來ないので、他の感覺の輕卒な判斷を訂正する。他の感覺の判斷は殆んど知覺されもせぬ對象に遠方から飛んでゆくが、觸覺の知覺するものは何物にまれ十分に知覺されるのである。その上、必要なときには神經の作用に筋肉の働きを加へるので、吾々は同時に感じられる一の感覺に溫度、大小、形狀の判斷に輕重と硬軟の判斷を結合させる。かくて觸覺は有らゆる感覺中、外界の物體が吾々の身體に對して爲す印象を最もよく吾々に傳へることの出來るものであるから、その使用が最も頻繁な感覺であり、吾々に對して最も直接に自己保存に必要な知識を與へる感覺である。

練磨された觸覺が視覺の代りとなる以上、何故に或る程度までそれが聽覺の代りをせぬことがあらうか、何故ならば音は發音物において觸覺に感じられる顫動を起すではないか？　ヴァイオリンセロの胴體に手を置くと、眼や耳の助をからずとも、その木の顫へ動く仕方一つで、その出してゐる音が鋭いか重いか、それが細絃から出てゐるのか大絃から出てゐるのかを、識別することが出來る。若し吾々の感覺がかゝる區別を識る程に練磨されるものならば、疑ひもなく吾々は何時か指によつて全諸調を聞くことが出來る程敏感になり得るであらう。さてこれが認められるならば、吾々が音樂によつて容易に聾者に話すことが出來るやうになるといふことは明白である。何故ならば音色や節調は人間の聲や語調と同樣に正則な結合が出來るので、同樣に談話の要素として用ひられ得るからである。

此の觸覺を鈍くして痲痺させる練習がある一方、反對にこれを鋭くしこれを極めて纖細鋭敏にする練習がある。前者は堅い物體の不斷の印象と多大な運動と力とを併用して、皮膚を粗笨にし、厚くして、その本來の感性を奪つてしまふ。後者は、輕く度々反覆される觸覺によつて此の

感性に變化を與へ、精神をして不斷に反覆される印象に注意させて、容易にその有らゆる變化を識別することを學ばせるものである。此の相違は樂器を使用するときによくわかる。ヴァイオリンセロ、大胡弓、乃至ヴァイオリンの堅い傷めるやうな觸覺は、指の節をよく屈伸するやうにすると同時に、指の尖端を堅くしてしまふ。竪琴の柔い滑がな觸覺は、指をよく屈伸するやうにすると同時に又敏感にもする。だから此の點に於いては、竪琴を取るべきであらう。

皮膚を空氣の影響に對して鈍感にして、その變化に堪へることのできるやうにするのは大切なことである。何故ならば皮膚は他の有らゆる感覺を保護するものだからである。が、それだけは別として、私は手を餘り奴僕的に同じ仕事に使はせては硬張らせたり、手の皮膚を甚く硬くして、吾々の手に當る物體が何であるかを認めさせたり、又時としては、その觸覺の種類によつて暗中でゞも、吾々に樣々な身慄ひを傳へるやうな、あの微妙な感覺を失ふやうなことはさせたくないものだと思ふ。

エミイル

何故に私の生徒は何時もその足の下に牛の皮を着けて居なければならぬであらうか？　彼自身の皮が必要なときには、踵として役立つことが出來るのに靴をはかねばどんな害があるといふのか？　此の部分の皮膚の柔いのは何の益にも立つことが出來ず、その上極めて度々怪我をするといふことは明白である。かつて冬の最中、眞夜中に市中に侵入した敵に眼醒まされたジュネーヴ人は、その靴をとるよりも先にその銃を捉つた。若しジュネーヴ人が裸足で歩くことが出來なかつたならば、ジュネーヴの町が占領されなかつたか何うか誰が知らう？

人々を常に不慮の出來事に對して武裝してをらしめよ。エミイルをして四季共に、毎朝裸足で部屋から、階梯から、庭まで走り廻らせよ。私は彼を叱るどころか、自分も彼の眞似をする。た

だ私は硝子片を拾ひ除けるに注意をするだけである。私はやがて手工や手先の遊戯のことを語ることにしよう。目下の處は、たゞ彼をして肉體の發達を助けるやうな有らゆる運動をすることを學ばせよ。有らゆる姿勢を容易にしつかりととることが出來るやうにせよ。幅跳びをさせたり、高跳びをさせたり、木に登らせたり、壁を越えたりさせよ。何時も身體の均衡を失はぬやうにさせよ。彼の有らゆる運動、有らゆる身振を、彼が靜力學によつてそれ等をば說明することができるやうになるずつと以前に、總て重力の法則によつて調整されるやうにせよ。その足の地に着いてゐる樣子、その身體が足の上に立つてゐる樣子によつて、彼は、自分の健康であるか病氣であるかといふことを知らなくてはならない。しつかりした姿勢は何時も美しい。最も毅然とした態度は同時に最も優美なものである。若し私が舞踊教師であつたならば、彼が、それを演じた國にだけしか適當しないマルセルの猿業（註三三）など決してやらないであらう。私ならば生徒にいつも亂調飛躍を稽古させる代りに、彼を崖の麓につれて行く。そこで、私は、彼が何ういふ態度をとるべきか、身體や頭をどんな風にしなければならぬか、どんな運動をしなければならぬか、險しい骨の折れる小路を輕々と辿るため又上るにつけて下るにつけて岩の頭から頭へと飛んで歩くためには、先づ足を何う、次に手を何ういふ風に置かなければならぬとかいふことを示してやることにする。私は彼をオペラ座のダンサーにするよりは寧ろ山羊の競爭者にしたい。

（註三三）パリの有名な舞踊家である。彼は自分の觀客をよくのみこんでゐて、わざと並はづれたことをやつて見せて、自分の舞踊に勿體をつけてゐた。觀客はそれを見てをかしがるやうなふりをしてゐたが腹の底では非常に尊敬してゐたのである。舞踊のやうに輕跳でない藝術に於いて、今日でもこのやうな勿體ぶつた馬鹿なまねをしてゐる喜劇役者があるが、矢張り同じやうに成功してゐる。フランスではこのやりかたをやれば間違ひがない。眞の才能、素朴で眞面目な才能はフラン

スではもてはやされない、フランスでは謙譲といふ美德は愚人の德である。

觸覺の作用は人間の直接の周圍に集中してをり、視覺の作用は人間の周圍よりも彼方まで擴がつてゐる。視覺に誤謬を生じさせるのはその爲めである。人間は一と目でその地平線の半分を見て取る。かゝる多數の同時的感覺、及び此等の感覺に刺戟される判斷がどうして少しも間違はずにゐることが出來ようか？　それ故に、視覺は吾々の感覺中で最も誤謬が多い、何故ならばその作用する分野が最も廣いからであり、又他の感覺の遙か遠くに作用するので、その作用が餘りに急速、餘りに廣汎で到底他の感覺によつて是正されることが出來ないからである。そればかりではない、彼の遠景の幻覺さへ、廣さの觀念を獲得し、且つ廣さの諸部分を比較するためには、吾々にとつて是非なくてはならない。虛僞の外觀がなければ、吾々は遠方に何一つ見ることができない。形狀と明暗の等差がなければ、吾々は全く距離を判斷することが出來ないであらう。いな寧ろ吾々にとつて距離といふものが全然存在しないであらう。若し二本の同等な樹があつて、一本が吾々から百步も離れてゐるのに、十步より離れてゐないものと同樣に大きく同樣に明瞭に見えたとせば、吾々は二本の木が一緒に並んでゐるのだと考へるであらう。若し吾々が有らゆる事物の大きさをその眞の大きさの儘で見ることになつたならば、吾々は全く空間といふものを見ることが出來ぬであらう。あらゆるものが吾々の眼のそばに見えるであらう。

視覺は、事物の大小とその距離とを判斷するために、同一の尺度に賴る。卽ちこれ等のものが吾々の眼の中に爲す角度に賴るのである。然るに此の角度は或る複雜な原因から生ずる單純な結果であるから、それが吾々に起させる判斷は、個々の原因をはつきりと區別しない。そこで必然的に不正確になるのである。何故ならば、私に對して或る事物を他のそれよりも小さく見せる角

度がその事物が眞實小さいからさうなのか又は單に遠方にあるからさうなのかといふことを、ただ視覺だけで何うして見分けることが出來ようか？

そこで吾々は、こゝでは前に述べた方法とは全然反對な方法に從はなければならない。感覺を單純化する代りに、それを複合し、何時も他の感覺によつてそれを確かめ、視覺器官を觸覺器官に服從させ、言はゞ前者の感覺のせつかちを後者のそれの鈍重な整然たる步みによつて拘制することが必要である。此の練習を怠ると、吾々の目分量といふものは甚だ不正確なものになる。吾々は一目見たばかりでは、高さ、長さ、幅、距離を正確に測る事が出來ない。而かもかゝる幾多の缺點は眼にあるのではなくて寧ろ眼の使用法にあるのだ。その證據は、技師、測量師、建築家、石工、畫家等が一般に吾々よりも物を見るに確實であり、吾々よりも遙かに正確に廣狹を量ることが出來ることである。蓋し彼等の職業が、此の點に於いて吾々がうつかりして怠つてゐる經驗を彼等に與へ、それが彼等の眼に對して此の角度の二つの原因の關係を正確に決定させ外觀上の角度の曖昧が除去せしめるからである。

子供達は、拘束せずして身體に運動を與へることならば、何事でも容易にする。彼等をして、距離を測り、認め、定めることに興味をもたせる手段は幾十百とある。此處に甚く高い櫻の樹があるとする、その時には、如何にせば吾々は櫻の實を取ることが出來るか、納屋にある梯子は十分とゞくかと問ふ。此處に可成り廣い川があるとする、その時には、如何にせば吾々は彼方の岸に行くことが出來るか、中庭にある板で十分岸から岸までとゞくであらうか、と問ふ。吾々は、窓から、城の濠の中の魚を釣りたいとすると、何れだけ長い絲が要るであらうかと問ふ。私はこれこれの二本の樹の間に鞦韆をかけたいと思ふ、二尋の綱で足りるであらうかと問ふ。人の話で

は、今度の家の私達の部屋は二十五呎平方あるといふ、吾々が入るに丁度よいかどうか、此の部屋よりも大きいかどうかと問ふ。又吾々は今甚く腹が空いてゐる、處で先に村が二つ見える、何方の村に行けば早く御馳走が食べられるであらうかと問ふといつた風である。

以前、身體を動かすことの嫌ひな物臭な怠け子供に、駈けることを學ばせなければならないときがあつた。彼は陸軍に入ることになつてゐたが、此の運動もその他のどんな運動も進んでやる氣がなかつた、何うしてか知らないが、彼はこんな風に考へこんでゐた。自分程の身分の人間は何を覺える必要も何をする必要もない、自分の高貴な生れが腕や足の代りをするばかりでなく、有らゆる種類の才能の代りもするに違ひない。と、此の樣な少紳士を足の速いアキレスに仕立てることは、キロその人の熟練とて到底成功することが出來なかつたであらう。おまけに、私は全然命令がましい言葉を彼に與へたくはなかつたので、その困難は一層甚しかつた。私は、說敎や、褒美の約束や、威嚇や、競爭心や、人に眼立ちたがる欲望やによつて彼を導く權利を一切放棄してしまつた。如何にして彼に何も云はずに彼に駈けたいといふ氣を出させることが出來よう。私自身が駈けるといふことは、此の時の手段としては餘り效果もなく、且つは都合もよくなかつたであらう。その上私は此の運動から彼に對する一種の敎訓を抽き出したかつたのである。といふのは彼を身體の運動にならし精神の作用をこれと調和して進ませたいといふのが私の願ひであつた。次に述べることが私の試みたものである、私といふのは卽ち此の實例を語る敎師なのである。

午後彼を連れて散步に出るとき、私は時々彼がひどく好んだ一種の菓子を二つ衣嚢に入れて出た。吾々はそれを散步しながら一つ宛食つた(註三四)、さうして甚く愉快な氣持になつて歸つて來た。或る日、彼は私が三つの菓子をもつてゐるのを見た、彼は此の菓子を六つ位は容易に食ふこ

とが出來たのであつた、それで自分の菓子を直に食つてしまつて、私にもう一つ臭れと請求んだ。私はかう云つた、『いや上げない、私はこれを自分で食ふことも出來る、又は私達二人で分けることも出來る、だがそれよりは彼處にゐる二人の子供達にこれをやつて、競走さしてみる方が面白からう』と。私はその子供達を呼んで、菓子を見せて、これをやる條件を示した。二人は大に喜んだ。菓子は決勝點になる大きな石の上に置かれた。コースが引かれた。吾々は腰を下ろした。合圖が與へられるや否や、二人の子供は駈け出した。勝つた方の子供はその菓子を捉んで、見物人や負けた子供の眼の前で用捨なしにそれを食べた。

(註三四)　これは心ずにわかる通り田舍の散步である。都會の、人の見てゐるところでの散步は男の兒にも女の兒にも有害である。彼等が虛榮心をおこしたり、人に見られたがつたりするのは都會の散步からはじまるのである、パリの若い女たちが、かうした氣障な、生意氣な風をして、全ヨオロッパの物笑ひになり、爪はじきされるのは、リヰクサンブウルやチュイルリイや、特にパレイ・ロワイヤルの散步からはじまるのだ。

此の遊戲の方が菓子よりも價値があつた。だがその效目は直には現れず、何の結果も生じなかつた。私は落膽もせず焦慮りもしなかつた。子供を敎育するといふ職業は、時間を得するためには先づそれを損しなくてはならない職業である。吾々は散步を續けた。時々は菓子を三つ、或は四つも持つて出た。だから競走者は或る時は一つ、或る時は二つも菓子を貰つた。懸賞が大きくなければ、それを爭ふ子供達の期待も大きくなかつた。懸賞をとつた子供は賞讃され、歡待され、萬事が仰々しく爲された。競走を長くしてその興味を增すために、私は更に長いコースを引いて、何人かの新手の競走者を仲間に入れた。彼等が競走場に入るやいなや、通りすがりの人々は皆それを見るために立止つた。喝采や叫び聲や拍手が彼等に元氣を與へた。私は時々私の子供が、競

走者の一人が別の一人に追ひつかうとしたり、追ひ拔いたりするときに、興奮して慄へたり、跳び上つたり、叫んだりするのを見た。これは彼にとつては正しくオリムピック競技であつた。

とはいへ、競走者達は時々は不正手段を弄した。彼等は互ひに相手を引きとめあつたり、互ひに倒し合つたり、互ひの通路に石を蹴入れたりした。これを口實にして、私は彼等を引離して、決勝點から等しい距離にある別々な出發點から駈け出させることにした。諸君はいまに此の用心の理由を知るであらう。何故ならば私は此の重大な出來事を非常に詳しく述べなければならないからである。

自分の大好物な菓子がいつも自分の眼の前で食はれるのを見るのに倦んだ吾が若殿樣は、遂に速くかけるといふことにも幾分の利益があるものだといふことを感付くに至つた。さうして彼にも亦二本の脚があるのを見て、祕かにその練習を始めた。私は少しも見ないやうに注意してゐた。だが私は、自分の計略が成功したのを知つた。彼がもう十分だと考へたとき、さうして私も彼より先に彼の心を讀んでゐたのだが、或る日彼は態と殘つてゐる菓子を吳れと私にせがむやうな風をした。私は拒絕した、彼は强情を張つた、さうして到頭腹を立てゝかう云つた。『そんなら、その菓子をあの石の上に置いて、コースを決めて下さい、僕もかけて取るから。』私は笑ひながらかう云つた、『よろしい！　お上品な坊ちやんが駈けることを御存知かな。多分お腹が減るだけで、その空腹を滿たす菓子をとることは出來ますまい。』私の嘲弄に憤慨して、彼は勇氣を出した。さうして例の懸賞をとつた。私がコースをわざと短かくして彼よりも上手な競走者を仲間に入れないやうに用心したので彼は容易に賞を取つたのである。此の第一歩の成功した以上、彼に此の訓練を續けさせるのが私にとつて容易であつたといふことは明白であらう。間もなく彼は此の運動

が非常に好きになつて、別に勗勵せずとも、彼はどんなに長いコースの場合にでも、此等の田舍の子供達と競走して勝つことが殆んど確實なまでになつた。

かくして得られた利益は、私の全く考へなかつた別の利益を生じた。彼がたまさか懸賞の菓子を手に入れるときには、他の子供と同樣に大抵直ぐに一人でそれを食ひつくした。だが彼が勝利になれて來ると、寬大になつて、時々その菓子を負けた子供達に分けてやつた。此のことが私自身に一の道德的教訓を與へた。私はこれによつて寬大といふことの眞實の原理が何ういふものであるかといふことを學んだ。

私は各競走者が同時に出發してゆく出發點を、別々な場處に記しつけることを續けてゆくことによつて彼に分からぬやうに、その距離を不同にして、競走者の或る者が決勝點に達するには、他の者よりも餘計に走らなければならぬ爲めに、明白な不利益をうけるやうにしておいた。だが私は私の生徒に選擇を任したに拘らず、彼はそれを有利にえらむことを知らなかつた。距離の如何に頓着なく、彼は一番平坦な道を撰んだ。それで、私は容易に彼の選擇を豫見して、殆んど私の意のまゝに例の菓子を彼に得させたり失はせたりすることが出來た。さうして此の計略に籠められた目的は一つに止まらなかつた。ともあれ、私の心組は、彼に自身で此の差違を認めさせるにあつたので、私はそれを彼に氣付かせようと試みた。だが平時は如何に物臭であつても、遊戲のときは甚だ活潑であり、又私を飽までも信じてゐたので、私は彼に、自分が彼を欺いてゐるといふことを示すには大きな困難を感じた。遂に輕卒な彼も何うにかしてそれがわかつて來た。すると彼は私を責めた。私は彼にかう云つた、『あなたは何の不平をいふのか。懸賞物は私が勝手に出してゐるのだから、私はそれを得る條件を自由にきめることが出來るではないか。誰もあなた

に無理に駈けてくれと云ひはしない。私はあなたにコースを平等にするといふ約束をしましたか？　選擇はあなた自身するものではないか。勝手に一番短い路を取りなさい。誰もあなたの邪魔をしはしない。私はあなたに贔屓してゐるのだ。あなたが不平を云つてゐる距離の不平等だつて、あなたにそれがわかりさへすれば全くあなたの利益になるのだといふことが何うしてあなたに分らないのです？』それは明白であつたので、彼はそれを理解した。それで選擇するときには一層注意して觀察しなくてはならなくなつた。最初は、彼は歩數を計へようとした。だが子供の歩數の勘定はまだるつこくて間違ひが多い。その上、私は同じ日に數回の競走をやるつもりだつた。而かもその時には彼は此の遊戯を熱情的に好きになつてゐたので、競走に宛てられた時間をコースの長短を計算するに使ふのが惜しかつた。こんなまだるつこいことはとても子供の活潑な性質と一致するものではない。それで彼は視力を更によく利用すること、一目で距離を更に好く測定することを練習した。さうなると私は、此の趣味を擴張し發展させることが甚だ容易に出來た。かくて數箇月練習して、誤謬を訂正すると、彼は目分量で判斷する力を著しく增進させて、私が何か遠方の物の上に想像の菓子を置いただけで、彼は一目見ると測量師の鏈と同樣に正確に當てるまでになつた。

視覺は凡らゆる感覺の中で精神の判斷から最も引離し難いものであるから、視ることを學ぶには甚だ多くの時間が必要である。視覺を觸覺に比較して、前者をして吾々に事物の形狀や距離を正確に報告させるやうにするには長い時間を要する。觸覺なしには、歩行運動なしには、世にも鋭利な眼であつても吾々に何等廣さといふ觀念を與へることが出來なかつたであらう。牡蠣にとつては、宇宙がたゞの一點と見えるに違ひない、此の牡蠣に人間の精神が教へても、それ以上の

何物とも見えなかつたであらう。廣さを正しく判斷することを學ぶのは、歩くこと、手探りで感ずること、計算すること、大きさを測量することによつてである。だが又、人が何時も測量してばかりゐたなら、感覺は常に機械にばかり頼つてゐて、決して正確さを得ることはないであらう。且つ又、子供は一足飛びに測定から評價に移つてはならない。彼は先づ一と目で全體を比較することの出來ないときは部分部分を比較することを續けなくてはならない。彼は正確に測つた結果を目分量で測つた結果と置き代へてみなくてはならない。さうして何時も手で測定する代りに、彼はたゞ眼だけで測定することに慣れなくてはならない。だが、私は彼の初めの測定を眞の物尺で確めて、彼に誤謬を訂正させるやうにし、若し感覺に虛僞の外觀が殘つてゐるときは、更に確實な判斷によつて是正させるやうにしたい。吾々は、どこへ行つても殆んど同じ位な自然の尺度の標準をもつてゐる。人の足、腕を伸ばした廣がり、背丈等がそれである。子供が部屋の高さを測定するときには、教師が彼の爲めに尺度の代りを勤めてやることが出來る。若し彼が塔の高さを測定しようと欲するならば、彼に家の高さによつてそれを測定させよ。若し彼が道路の長さを知りたいと欲するならば、それを歩くに費した時間を計算させよ。何よりも、彼に代つてかゝることをしてやつてはならない、萬事彼自身でさせるやうにせねばならぬ。

人は、物體の廣さと、大さを正確に判斷することを學ぶに、その物體の姿を知り乃至それを模寫することを學ばねばならぬ。何故ならば此の模寫は根柢に於いては遠近配景の法則にのみ從つてゐるものであり、而かも此等の法則を幾分知らなくては、たゞ外觀によつてだけでは、吾々は廣さを測定することが出來ないからである。子供は總て大の模倣家であるから、物を描かうと試みる。私は、エミイルに此の技術を修養させたいと思ふ。それも技術そのものゝ爲めにではなく、

眼を正確にし、手を屈伸自在にする爲めに修養させたいと思ふ。一般的にいつて、彼が斯くかくの業を覺えるといふことは大して重要なことではない。肝腎なことは、彼がそれを練習することによつて、感官知覺の明確さと、良き肉體的習慣とを得ることである。それ故に私は、彼に、模寫したものばかり模寫させたり、繪を手本にして繪を描かせたりしないやうな圖畫教師を與へるやうに十分注意するであらう。私は彼が、自然を唯一の教師にし、實物を唯一の手本にすることを望む。彼は眼の前に實物をもたなくてはならない、實物の描かれてある紙を手本にしてはならない。彼をして家によつて家を、樹によつて樹を、人間によつて人間を描かせるやうにせよ。さうしてこそ、彼は事物とその外觀を正しく觀察するやうになり、虛僞の月並な模寫を眞物と見做さないやうに訓練されるであらう。且つ私は彼に眼前の事物のみによつて描かせて、記憶からさへ描かせないやうにしたい。さうすると反覆された觀察によつて、物の正確な姿が彼の想像に印象されるであらう。從つて彼が奇異な空想的な姿を事實の眞相と置き代へて、釣り合ひの感じと自然の美に對する趣味とを失つてしまふやうなことはあるまい。

ミエルイ

勿論、此の方法によると、彼が何等か認められるやうなものを描くまでには長い間頻りにわけのわからぬことを塗抹するに違ひないといふこと、彼が優美な輪廓や畫家の輕妙な筆致まで至るには長い時間を要するに違ひないといふことを私は知つてゐる。恐らくは繪畫的効果を鑑別したり、繪畫に對する高雅な趣味を養ふことはいつまでもできぬであらう。その代りに、彼は確かに、一と目で眞實を見てとる力と、より正確な手とを得るであらう。動物や、植物や、自然物間にある形狀と大小との眞の關係を知るやうになるであらう。同時に遠近配景の效果を敏速に知る經驗を得るであらう。これこそ正に私が目的としたものである。私の意圖は、彼をして事物を模寫させるよりも寧ろ事物を知らしめるにある。私は、彼が柱頭彫飾の葉模樣の描き方は下手でも、キツネノマゴ屬の植物を私に示してくれることの出來る方を好むのである。

その上、凡ての他の練習に於いても、私はそれを彼自身だけにさせようとは思はない。私は自分もたえず彼と練習を一緒にして彼を一層愉快にしてやらうと思ふ。私は彼には私以外には全く競爭者がないやうにさせたい。しかし私は彼の不斷のしかも危險のない競爭者となるであらう。さうすれば、吾々の間に嫉妬の情を釀すことなしに彼の仕事に興味を加へるであらう。私は彼の例に倣つて鉛筆を執るであらう。最初は彼と同じやうに拙劣に鉛筆を使ふであらう。假りに私がアペレス程の大家であつたとしても、私はヘボ畫工以上には見えないやうにする。私はいたづら子供が壁に樂書きをするやうに人間を描く。二つの腕が一本の線であり、二本の足も一本の線であり、さうして手よりも長い指をもつてゐる人間を描く。程經てから吾々の誰かゞ此の不釣合なことに氣がつく。吾々は、脚には太さがあり、その太さもどの部分でも同じではないといふこと、腕は身體に相應した長さをもつてゐるといふことを知つてくる。此の進歩の際には、私は彼と併行して進んで行くか、或は少し許彼に先立つて、彼が容易に追ひ付けるやうに、又屢々追ひ越せるやうに進んで行く。吾々は畫筆と繪具を手に入れる。さうしてたゞ物の形だけでなしに物の色彩、物の外觀の全體を模寫しようと試みる。吾々は印畫を色彩をしたり、油繪を描いたり、線畫を畫いたりする。だがこれ等總ての畫をかくに方つて、吾々は自然を察知することを止めない。吾々は何事を爲すにも此の先生の眼の下に於いてするやうにする。

吾々は、吾々の部屋の裝飾物が甚く欲しかつた。處で今は吾々はそれを手もなく得ることが出來る。私は吾々の繪に額縁をつけさせる。私はそれに質の良い硝子をかけさせる、かうすると誰

にも手を觸れさせずに濟む上に、吾々がそれを懸けた場處に置いて眺めて居ると、各人がめいめい自分のものを大切にしようといふ氣になるからである。私はそれを部屋の周圍に順序よく並べる。一枚の繪が二十度も三十度も繰返されて、一枚毎に、家がまだ殆んど形の整はない四角形に過ぎない時分から、その正面、その側面、その均衡、その明暗が總て正確に描寫される時分迄の筆者の進歩を見せるやうにする。此の漸進的段階は、吾々自身にとつては面白く、他人にとつては好奇心をそゝるやうな繪畫を斷えず與へて、何時も新に吾々の競爭心を刺戟するであらう。最初の拙劣な繪畫には、私はそれを見せ誇かすやうな、飽くまで華やかな、飽くまで金色燦爛たる額緣をつける。だが寫生が次第に正確になり、繪畫がほんとうに立派なものになるにつれて、私はそれに極く質素な黑い緣をつけるだけにする。繪畫はそれ自身の外には何の裝飾も必要としないので、若し額緣が、畫そのものに向けられるべき注意を逸らせたならば甚だ遺憾なことであらうからだ。かくして吾々は何れも自分の繪が簡單な額緣に入れられる名譽を望んで努める。吾々の何れかゞ他方の繪畫を貶さうと欲するときには、彼はそれを金色燦爛たる額緣に入れる。そして他日、恐らく、此の金色の額緣といふ言葉が吾々の間で一種の諺となり、如何に多數の人間がかく自分に金色の額緣をつけて自己を粉飾してゐるかを見て、吾々は驚くやうになるであらう。

私は前に、幾何學は子供の解するところでないと云つた。だがそれは吾々の誤謬である。吾々は、彼等の方法が吾々のとは違ふといふこと、吾々にとつて推理の術になるものが、彼等にとつては眼で見る術であるに相違ないといふことを氣附かないのである。吾々の方法を彼等に敎へる代りに、吾々は彼等の方法を採る方が好結果とならう。何故ならば吾々が幾何學を學ぶ仕方は推理の問題であると同樣に想像の問題でもあるからだ。一の命題が與へられるとき、諸君はその證

明を想像しなくてはならない、卽ち諸君は此の命題が既知の如何なる命題の結果であるかといふことを發見し、此の命題から引き出され得る有らゆる演繹の中でその場で必要なものを選擇しなくてはならない。

發見の天才のない限り、此の方法では、最も正確な推理者でも行き詰らざるを得ない。その結果として何ういふことが生ずるか？　吾々に證明を發見させないで、吾々は證明の書き取りをさせられる。敎師が吾々の爲めに推理してくれる。吾々は記憶の練習をしてゐるに過ぎない。

正確な圖形を描け、その圖形を結合せよ、その圖形を一つづゝ他の上に重ねよ、そしてそれ等の關係を吟味せよ。さうすればたゞ重ねるといふことの外には、定義も、問題も、凡ゆる他の證明の式も必要なしに、觀察から觀察へ進んで行く中に、諸君は初等幾何學の全部を發見するであらう。私自身としては、私はエミイルに幾何學を敎へるとは言はない。エミイルこそ私に幾何學を敎へるであらう。私は關係を探す、さうして彼がそれを發見するのだ。何故ならば、私は彼に關係を發見させるやうにそれを探すからである。例へば、私は兩脚器をつかつて圓を描く代りに、糸の端に結びつけられた鉛筆を心棒の周圍に廻轉さしてそれを描く。さてそれから、私が二つの圓の半徑を比較しようとすると、エミイルは私を嘲笑ふであらう。さうして私に、十分引張られた同じ糸は不平等な距離を與へる筈がないといふことを私に示すであらう。

若し私が六十度の角を測らうと欲すれば、私は此の角の頂點からして、一の弧だけでなしに一の圓全體を描く。何故なれば子供達にとつては、何事も自明なことゝ考へられてはならないからである。私は、此の角の二邊に挾まれてゐる圓の部分が此の圓の六分の一だといふことを見出す。次に、同じ頂點からそれよりも大きな圓を描く、さうして此の第二の弧も矢張りその圓の六分の

一だといふことを見出す。私は第三の同一中心の圓を描く、さうして同樣な結果を得る。私はそれを何度も何度も續ける。すると、エミイルは私の愚鈍に呆れて、同一の角に挾まれてゐる有らゆる弧は、大小を問はず、常にその圓の六分の一でなければならないといふことを私に示してくれる。そこで吾々はすぐに分度規を用ゐることが出來るやうになる。

二つの接角が二直角に等しいといふことを證明するに、人々は圓を描く。だが私は反對に、エミイルが先づ圓の中でそれを見つけるやうにさせて、それから彼にかういふ、『若し吾々が此の圓周を取り去つてしまつて、直線だけを殘したならば、角がその大さを變へたであらうか、云々。』

圖形の正確といふことが等閑視されてゐる。人々はそれを想像に任せて、たゞ證明にばかり重きを置く。反對に吾々の間では、證明などはどうでもよい。それよりも肝心なことは飽くまで眞直な、飽くまで正確な、飽くまで平等な線を引くことである。飽くまで正確な四角を描くことである、飽くまで圓い圓を描くことである。圖形の正確さを確める爲には、吾々はそれの有らゆる眼に見える性質によつて吟味する。これがまた毎日吾々に新しい性質を發見する機會を與へるであらう。吾々は直徑を中心にして二つの半圓形を折り疊む。又對角線を中心にして四角形の二つの部分を折り疊む。さうして吾々の二つの圖形を比較して、何方の緣が精確に合つてゐるか、從つてどちらの圖形がよくかけてゐるかといふことを見る。吾々は此の相等しい區分が、何時も、平行四邊形、梯形、等の場合にも起るか何うかといふことを討論する。吾々は時々實驗の成功を豫見しようと試みるであらう、それを爲す前に、吾々はその理由を見出さうと試みるやうになるであらう、等。

幾何學は、私の生徒にとつては、定規と兩脚器を正しく使ふ術に外ならない。彼はそれを、こ

れ等の道具の何れをも使用しなかつた圖畫と混同してはならない。定規も兩脚規も吾々は錠を下ろして藏つて置き、彼にそれを極く稀にしか使用させない。それもほんの少時間である。つまり彼をして出放題なものを描く習慣をもたせまいが爲めである。だが吾々は時々吾々の圖形を散步のときに携へて出ることができる。さうして吾々のしたこと、しようと思ふことについて談話を交すであらう。

私は、テュウリンで、子供の時分に毎日あらゆる幾何學的圖形をもつた等周の菓子の中から一番大きいのを選ぶことに專心して輪廓と表面の關係を教へられたといふ青年に會つたことをいつまでも忘れられない。此の小さな食ひしんぼうは、何れが一番食ひでがあるかといふことを見出すためにアルキメデスの術を知りつくしてしまつたのである。

子供が凧を揚げるときは、彼は眼と腕を正確に馴らす。彼が獨樂を廻すときは、彼はそれを使ふことによつて力を增す、だが何も學ぶところはない。私は時々、何故に子供に對しても大人と同樣に熟練を要する遊戯が與へられないのかと尋ねた、テニス、ベルメル球戯、撞球、射弓、蹴球、樂器などを與へられないのかと尋ねた。私はかういふ返事を得た。此等の遊戯の或る物は彼等の力には及ばないものであり、又その他のものは彼等の手足と器官が十分發達してゐないからだと。私はかういふ理由は妥當なものではないと思ふ。子供は大人程の背丈はない、然かもやはり大人のやうに作られた衣物を着ける。私は、彼に三呎も高さのある撞球臺で吾々の棒で撞球をさせようとは思はぬ。私は彼が吾々の遊ぶ如何はしい場所で球遊びをしたり、その小さな手でテニスのラケットを持つて歩いたりすることを欲しない。だが子供をば窓の用心の十分行き屆いた部屋で遊戯をさせたい。最初は軟球を使ふやうにさせたい。彼のラケットも最初は木製のものを

次に羊皮製のものを、最後に彼の進歩に應じて腸絃で造られたものを使ふやうにさせたい。諸君は、凧が疲勞させる度も少く危險も伴はないといふので凧の方を選ぶが、諸君は次の二つの理由で間違つてゐる。凧は婦人の遊戯である、だが如何なる婦人でも素速く飛んで來る球からは逃げるであらう。婦人の白い皮膚は打擊によつて硬張らされてはならない。又婦人の顏は傷痕をつけられるために出來てゐるものではない。だが吾々男子は强くならんが爲に造られてゐる、諸君は何の苦もなくさうなれると考へるか？　若し吾々が一度も攻擊を受けたことがなければ、吾々は如何なる防禦をすることが出來るであらうか？　不熟練でも危險がないやうな遊戯に於いては、吾々はそれをのらくら然と行ふ。落ちて來る凧は何人をも傷つけないが、しかし頭を打擊から保護することほど手を敏捷にするものは他に無く、眼を打擊から保護することほど視力を正確にするものはない。部屋の一隅から他隅へ走ること、球が土地に屆く以前に跳ね返るのを判斷すること、强く正確にそれを打ち返すこと、かゝることは大人に適するよりも寧ろこれから大人になる者に役立つのである。

子供の筋肉は餘りに纖弱過ぎる！　と諸君は言ふ。子供の手足は大人ほどの彈力はないが、一層屈伸性をもつてゐる、彼の腕は弱い、それでも腕は腕である。吾々はそれで、それに似よつた他の機械ですると同じことを、分に應じてしなければならない。子供等は自分の手の使用に何等熟練がない、それだからこそ私は子供等の手に熟練を得させようとするのだ。大人でも彼等と同樣に少ししか練習しなければ彼等と等しく不器用であるだらう。吾々は手足を使用して始めて其の使用法を識ることが出來るのだ。吾々は、長い間の經驗に依つてのみ吾々自身を最も好く利用することを學ぶのである。而して此の經驗こそ、吾々が如何程早く着手しても早過ぎない眞實の

研究である。

何事によらず實行されてゐることは實行し得るからされてゐるのだ。ところで敏捷で輕快な少年が成人と同じやうな敏活な四肢を有つてゐるのを見るのは極めて有りふれたことである。彼等は殆んど至るところの市で、輕業をやつたり、手で歩行いたり、筋斗飜りをしたり、踊りながら綱渡りをしたりしてゐる。イタリイ喜劇で、子供の群がそのバレットで觀客を牽き付けてゐたのは已に久しい以前からではないか！　ドイツやイタリイで有名なニコリニのパントマイム劇團の噂を聞かなかつた人が居るであらうか？　これ等の子供の演技が成人の舞踊者のそれに比較して、未完成であり、その態度が優美でなく、その聽覺が不正確で、その舞踊が輕快でないと思つたものが一人でもあつたであらうか？　最初は指が厚ぽつたく、短かく、無骨で、手が肥滿して何物をも摑むことが出來ないとしても、その爲めに多數の子供等が他の子供が未だ鉛筆もペンも持つことさへ出來ない年頃に、字を書き畫を描くことを學ぶ妨げとなるであらうか？　全パリの人達は十歳の英國少女が彼女の竪琴で奇蹟を演じたことを猶記憶してゐる(註三五)。私はかつてある判事の家で八歳になる彼の男の子が、デザートの卓子の上の皿の間に像のやうに坐つて、彼と同じ位の大きさのヴァイオリンを彈奏したのを見たが、演奏の巧妙なことには列席してゐた音樂家も驚嘆したのであつた。

(註三五)　その後七歳の子供がもつと驚くべきことをやつた。

これらの實例及び此の他の幾多の實例は、子供達が大人の遊戯には不適當だといふ世の考へは全く想像的なものであるといふこと、若し彼等がその或るもので成功しなかつたとせば、それは練習の不足からだといふことを證明してゐると私には思はれる。

或は私にかう言ふ人があるかも知れない。君は君が子供達の精神について大に非難した彼の早熟教育の誤謬を、今君自身が子供の肉體について犯してゐるではないかと。それは大變な相違である。精神の進歩はたゞ外觀的に過ぎないが、身體の進歩は現實的だからである。子供達は一見知慧をもつてゐさうに見えても、その實もつてゐないが、その代り彼等はしさうに見えることは何でも必ずするといふことを私は證明した。のみならず、諸君は、これ等のことは總て皆一の遊戯であり、又さうでなければならぬといふことを常に考へなければならぬ。即ち自然が彼等に要求する運動の容易な自發的な驅使であり、彼等の娯樂を些も仕事に變ずることを强制せずに、それを彼等にとつて益々面白いものたらしめるために變化を與へる技であるといふことを考へなければならぬ。何故ならば彼等の遊ぶ如何なるものにせよ、私が彼等を教訓する材料となし得ぬものがあらうか？　又縱し私がさう出來なかつたにしても、彼等が無害に自分を娛ませて、愉快に時間を過してゐる限りは、萬事につけて彼等が進歩するとしないとは現在では左まで重大でない。ところが、諸君がやつてゐるやうに是非彼等に何事かを教へなければならぬといふことになれば、强制を加へずには、不平を釀さずには、從つて倦怠を生ぜしめずには、諸君は決して目的を達することが不可能であらう。

私が前に、有らゆる感覺中で最も斷えず使ふ又最も重要な二つの感覺について云つたことは、如何にして他の感覺を練磨すべきかといふ手本としても用ゐられる。視覺と觸覺とは靜止してゐる物體にも運動してゐる物體にも同樣に適用される。だが聽覺を刺戟し得るものは空氣の振動だけであるから、運動してゐる物體の外には音響を生ずるものはない、從つて若し萬物が靜止してゐるときには、吾々は何一つ聞くことが出來ない。夜間には、たゞ吾々自身が好きなまゝに動い

てゐるだけであるから、吾々は動いてゐる物體以外には何も恐れなくともよい。それ故に吾々は鋭い耳をもち、吾々を刺戟する感覺から、その感覺を與へる物體が大きいか小さいか、遠いか近いか、或はその振動が激しいか弱いかといふことを判斷する能力をもつ必要がある。振動してゐる空氣はそれを反射する。これが反響を生じて、感覺を繰返し、發音物體のない處でその音響を聞かせるのである。若し平野か谷かで、地に耳をあてゝ聞いたならば、人間の聲や馬の足音が、諸君が眞直に立つてゐるときよりも遙かに遠方に聞えるに違ひない。

吾々は視覺を觸覺に比較したので、今度は同樣に視覺を聽覺に比較して、同一の物體から同時に出る二つの印象の何れが早くその器官に達するかを知るが可からう。諸君が大砲の閃光を見るときは、未だ避け隱れることが出來る。だがその轟音を耳にするやいなや、最早や時間はない。彈丸がもうそこに來てゐる。諸君は、電光と雷鳴の時間の隔たりによつてその雷が何の位の遠方で起つてゐるかといふことを計算することが出來る。子供が以上の經驗をよく知悉するやうにせよ。彼が自分でできることは自分でし、できないと思つたものは歸納して學ばせるがよい。だが諸君が彼に口で言ひきかせねばならない位ならば、寧ろ私は彼がこれ等のことを全然知らない方を遙かに好む。

吾々には聽覺に對應する器官がある。それは卽ち聲音のそれである。吾々には視覺に對應する同樣なものはない。だから吾々は音のやうに色彩を發することはできない。これが能働的器官と受働的器官とを互ひに使用することによつて聽覺を養ふ追加的手段となる。

人間には三種類の聲がある、談話の聲卽ち有節音、歌吟する聲卽ち諧調音及び感傷の聲卽ち抑揚音聲で、この最後の聲は情熱的の言語となり歌又は談話に勢を附けるものである。子供は大人

と同じくこれ等の三種の音聲をもつてゐる。しかし大人のやうに此の三種の聲を結び付けて使用することを知らない。吾々と同樣に、子供も笑ひ、叫び、悲しみ、金切聲を立てゝ唸る。けれども子供はこの聲の抑揚を談話や歌と混用することを知らない。これ等の三種の音聲は完全な音樂に於いて最もよく表現される。子供等はかゝる音樂を理解することが出來ないので、彼等の歌には魂がはひつてゐない。これと同じやうに談話の場合にでも彼等の言語には抑揚がない。彼等は叫ぶが、その呼び聲には抑揚がない。而して彼等の會話に殆んど抑揚がないと同じく、彼等の音聲には殆んど勢がない。吾々の生徒の言葉は、甚だ平板で、更に一層單純なものであらう。といふのは彼の情熱は未だ眠つてゐるので、かゝる情熱の言葉は彼の言葉には混らないからである。だから、彼に悲劇や喜劇の人物の臺辭を暗誦させてはならない。又所謂朗讀を教へようとしてもならない。彼は、自分の理解することの出來ない事物を聲に出したり、自分の實感しない感情を表現したりすることができるには餘りに多くの感覺をもつてゐるであらう。

彼に、平明に明瞭に語ることを教へよ、はつきりと物を言ふことを教へよ。正確に氣取らずに發音することを教へよ。散文及び詩歌の正しい抑揚音を認めてそれに從ふことを教へよ、常に十分人に聞える位高く、だが必要以上に高過ぎることのないやうに話すことを教へよ。これは學校で教育を受けた兒童に共通な缺點である。萬事につけて無用の浪費をしてはいけない。

同樣に、歌の場合には、彼の聲を正しく、平滑に、柔軟に、朗かなものにさせるがよい。耳を音の高低と諧和とに敏感ならしめるがよい、それで十分である。模倣的な、演劇的な音樂は彼の年輩には適當しない。私は彼が歌ひたがつても彼に文句は歌はせたくない。私は特別に、彼の年輩に興味のある、彼の觀念と同樣に單純な、歌詞を彼のために作つてやらうと思ふ。

諸君は恐らくかう考へるかも知れない。私は少しも急いで彼に書物を讀むことを教へようとはしないのだから、同樣に彼に樂譜を讀むことをも急いで教へようとは欲しないのだらうと。吾々は過度の注意の疲勞を彼の腦髓に負はせないやうにしよう。さうして決して急いで彼の心を規約的な符牒に向けさせないやうにしよう。此の點に一の困難があるやうに見えることは私も認める。何故ならば一見しただけでは、丁度文字の知識が談話にとつて必要でないと同樣に、唱歌にとつて必ずしも音符の知識は必要ではないやうに見えるけれども、そこには次のやうな區別がある。即ち談話のときには、吾々は自分自身の觀念を表現するのであるが唱歌のときには、他人の觀念を表現するのである。そこで、他人の觀念を表現するには、是非それを讀まなくてはならぬ。

だが、最初は、吾々はそれを讀む代りに聽くことが出來る。歌は眼に對してよりも耳に對しての方が遙かに忠實に訴へるものである。その上、音樂を完全に知るためには、たゞそれを歌ふだけでは十分でない。それを作曲しなくてはならない。此の二つが相並んで研究されなければならない、さもないと吾々は音樂を十分に知ることができないのである。諸君の少年音樂家をして第一に、十分正則な、十分調子の整つた文句を作ることを練習させよ。次に極めて單純な轉調によつて此等の文句を連結することを練習させよ。最後に正確な句點法によつてその文句の樣々な關係を知ることを練習させよ。これは、音の高低と休止のよき選び方によつて出來る。特にどんな事があつても、異常な歌は與へてはならない。感傷的な歌や表情的な歌を教へてはならない。何時も簡單で歌ひ易い、何時も樂鍵の普通諸音から發し、子供が常に容易に感じて伴唱できるやうなバスの音を示してゐる調子でなければならない。何故ならば聲と耳とを練るためには、クラヴサン（舊型のピアノ）に合せてしか歌つてはならないからである。

音をよく區別するために、吾々はそれを言葉で發音する。その爲めに或る單音字で譜を歌ふ習慣が生じて來る。音程を互ひに區別するためには、その音程と各々の音程の一定の長さとに名稱を與へなくてはならない。此の爲めに、音程の名、及び鍵盤の鍵と音階の音符とをさし示すアルファベットの文字が生じて來る。CとAとは變化しない固定音を示すもので、これは何時も同一の鍵によつて出される。UtとLaとは違ふ。Utは定つて長音調の主音、或は短音調の第三音である。Laは定つて短音調の主音、或は長音階の第六音である。かやうにアルファベット文字は吾吾の音樂の固定した音程を示して居り、綴字は樣々な調子の相似たる關係に對稱する音程を示してゐる。文字はピアノの樂鍵を現し、綴字は音程を現してゐる。フランスの音樂家は、不思議にも此の區別を混亂さした。彼等は綴字の意味と文字の意味とを混同した。それで鍵の符號をば必要もないのに二重にしながら、彼等は音律を表すためのそれを一つも殘さなかつた、かくて彼等にとつてはUtとCとは何時も同樣である、これは違ふ、又違ふのが當然である。何故ならば若しさうだとすればCは何の役に立つか。それ故に彼等の音譜の歌ひ方は極めて困難であるが、何等特別な利益もなく、又何等明瞭な觀念を心に與へもしない。何故ならば、此の方法では、例へばutとmiとは長音調の第三音でもよく短音調のそれでもよく、增音調の第三音でもよく減音調のそれでも可いことになる。世界無比の音樂書を書く國が、正しく世界無比に音樂を學ぶことの困難な國であらうとは、何と不思議な運命ではあるまいか！

吾々の生徒の場合には更に單純な更に明瞭な方法を取ることにしよう、彼には、その關係が何時も同一であり、何時も同一の綴字によつて示されてゐる二つの調だけを與へることにしよう。彼が歌ふときにまれ、樂器で演奏するときにまれ、基礎として役立つ十二の音の中の一つにその

調を確立させることを學ばせたい、さうして彼がD、C、G云々の何れで轉調するにまれ、最後を何時もその調のUtかLaかにするやうにさせたい。此の方法によつて、彼は常に諸君の意味するものを理解するであらう。正格な唱歌又は彈奏に要する音階の根本的關係は何時も彼の心に現在してゐるであらう、彼の練習は益々見事に、彼の進歩は益々迅速になるであらう。世の中に、フランスの人達が自然音譜と名付けてゐるもの程不思議なものはない、それは事物の眞の意味を取り除いて、その代りにたゞ吾々を迷惑させるに過ぎない別の意味を入れることである。調が移されるとき、移調によつて音譜を歌ふことほど自然なことはない。だが音樂のことはこれで十分であらう、遊戯といふ範圍を越えない限りは、諸君の思ふ通りにそれを教へるが可い。

吾々はかくて、吾々自身の肉體に關係する外界の物體の狀態を十二分に知つた。その重さ、その形、その色、その堅さ、その大きさ、その距離、その溫度、その靜止、その運動を知つた。吾吾は如何なるものは近寄つてよく、如何なるものは遠ざからなければならぬかといふことを學んだ。それ等のものゝ抵抗に打ち克つには如何にすべきか、それ等のものに抵抗して吾々自身損害を受けぬやうにするには如何にすべきかといふことを學んだ。だがそれだけでは十分でない。吾吾自身の肉體が不斷に消耗して居るのであるから、不斷に更新される必要がある。勿論吾々は諸他の物質を吾々自身の肉體を構成する物質に變化する力をもつてはゐるが、その選擇は何でもかでも無差別といふわけではない。何でも人間の食物になるわけではない。又彼にとつて食物となり得る物の中でも、その人種の體質により、その住む土地により、その人個人の體質により、彼の身分によつて指定された生活の仕方によつて、多少適否の差を免れない。

若し吾々が、吾々自身に適當な食物を選ぶ爲めに、經驗がそれを見わけて擇ぶことを吾々に敎へる迄待たなければならぬとしたら、吾々は饑餓か毒のために死ぬであらう。だが有感動物にとつて自己保存の手段を一の快樂たらしめた親切なる攝理は、吾々の舌に快味を與へるものが吾々の胃に適當なものであることを敎へてくれる。自然の狀態に於いては、人間にとつて、彼自身の食慾程たしかな醫者はない。而して原始狀態に於いては、人が最も甘いと思つた食物が最も健全なものであつたであらうことを私は疑はぬ。

それだけではない。造物主は、彼が吾々に與へる必要に對してだけでなく、吾々が吾々自身に與へる必要に對しても供給してくれる。而して彼が吾々の味覺が吾々の生活樣式によつて變つてゆくやうにするのは、吾々の慾望と吾々の必要とを調和させるためである。吾々が自然の狀態を遠ざかれば遠ざかる程、吾々は益々自然の味覺を失つて來る。或は寧ろ習慣は吾々の第二の天性となる。そしてそれが吾々の自然性に代つて、吾々はもはや誰も自然性を知らなくなるのだ。

此の點からして、最も自然な味覺は同時に最も單純なものでなければならぬといふことになる。何故なればそれは最も容易に變化するものだからである。それは吾々のむら氣によつて鋭敏にされ刺戟されないで、それは最早や決して變化しない形を取る。未だ或る國に馴れ切つてゐない人は、何の苦もなく、他の如何なる國の風習にでも慣れるであらう。だが或る國のものとなり切つた人間は他の國のそれとは決してなることが出來ない。

此のことは吾々の有らゆる感覺について眞實であるやうに私には見える。殊に所謂味覺について最も眞實である。吾々の最初の食物は乳である。吾々は徐々に强烈な風味に馴れて來るのである。最初はそれは吾々に厭惡を催させる。果物、野菜、草、それから最後に鹽も調味料も伴はな

い乾肉、これが原始人達の食物であつた(註三六)。野蠻人が初めて酒を飲むときは、彼は顏をしかめてそれを吐き出す。吾々の間でさへ、二十歲になる以前に釀造飲料を用ゐたことのない人は、最早やそれに馴れることが出來ない。吾々が若し子供のときに酒を飲まなかつたならば皆禁酒家になつたことであらう。實際、吾々の趣味は單純であればある程それだけ普遍的である。複雜な加工食品は最も多くの人に嫌惡される。水や麵麭の嫌ひな人に諸君は會つたことがあるか。これが自然の道であり、從つて吾々の規則でもある。子供の原始的趣味を出來得る限り保存するやうにしようではないか。彼の食物をして單純な尋常なものにしようではないか。强烈な味は彼の舌に知らせぬやうに、而かも彼の食事を特殊な味に限らぬやうにしようではないか。

(註三六)　ボオザニアスのアルカディイ參照、なほすぐ後に掲げたプリュタルクの、斷片を參照せよ。

私は此處で、此の種の生活の仕方がより健全であるかないかといふことを吟味してゐるのではない。私の目的はそこにあるのではない。私にとつては、私の選擇が最もよく自然と一致してゐるものであつて、最も容易に他の總ての生活方法に適應し得るものであるといふことを知るだけで十分である。子供達を、彼等が成長したとき食ふべき食物に馴らせなくてはならないと云ふ人人は、誤つてゐると私は思ふ。彼等の生活の仕方がまるで違つてゐるのに、何故に食物だけが同一でなくてはならないのか？　勞働、心勞、苦しみによつて疲勞した大人は、その頭腦に新鮮な元氣を與へるために滋養分の豐富な食物を必要とする。いつも遊び廻つてゐる子供、身體の成長して行く子供は、多量な食物を必要とする。その方が彼に更に多量な乳糜を與へる。その上、大人はもうその身分、職業、家庭が定つてゐる。だが子供にとつては如何なる運命が彼を待ちかまへてゐるか、誰に斷言が出來よう？　吾々は何事につけても、彼に餘りに確固と定つた傾向を與

へて、必要なときそれを變改する段になつて彼に多大の困難を感じさせるやうなことのないやうにしよう。到る處フランスの料理人を連れて歩るかなければ外國へ行つて餓死するやうに彼を育てゝはならない。彼をして他日フランスでなければ食物が口に合はないなどと云ふやうに育てゝはならない。序でのことだが、これはまた何といゝ氣なお國自慢だらう！　反對に、私自身ならばかう云ふであらう。フランス人こそ物の食べ方を知らない唯一の國民であると。何故ならば、フランス人はその料理を口に合ふものにする爲めに、非常に特殊な技術を必要とするからである。

エミイル

吾々の有らゆる感覺の中、味覺は一般に最も多く吾々を動かす。卽ち吾々自身の一部分となるべきものを正確に判斷することの方が、單に吾々の環境の一部分を形作るに過ぎないものを判斷することよりも、遙かに多く吾々を關心させる。觸覺、聽覺、視覺にとつてはどうでもよい事柄が澤山ある。だが味覺にとつてはどうでもよいといふべきものは殆んどない。

その上、味覺の作用は全然肉體的物質的である、有らゆる感官中、たゞこれのみが想像力に訴へることをしない。少くとも味覺は想像力が最も少なく入つてゐる感覺である。が、反對に、模倣と想像とは、屢々他の感官の印象に精神的要素を混じさせる。かくて、一般的に、他の感覺に依つて動かされ易い、やさしい、奔放な心情、熱烈で眞實敏感な性格も、此の感覺には極めて無頓着である。此の事實、卽ち味覺を總ての他の感覺の下に置き、從つて味覺に耽る吾々の傾向を益々輕蔑すべきものゝやうに見せる此の事實からして、私は反對に、子供を制馭する最も適當な手段は、その口によつてだと結論するであらう。貪食といふことはとりわけ虛榮よりも取柄のある動機である。何故ならば、前者は自然の慾望で直接に感覺によつてゐるものであり、後者は興

論の所産で、人々の移り氣と有らゆる種類の誤謬とを免れてゐないからである。貪食は子供時代の情慾である、が、此の情慾は他の何等かの情慾の前では支持されない。少しでも競爭があれば、拭き消されてしまふ。だから私の言葉を信じられよ。子供は間もなくその食べるものゝことを考へることを止めるであらう。彼の心が甚く多忙なときには、彼の舌は全く彼を惹きつけないであらう。彼が大人になると、貪食は他の幾多の遙かに强い感情によつて驅逐されてしまひ、それ等の感情はたゞ虛榮心だけを刺戟するであらう。何故ならば、後者は他の有らゆる感情を吾がものとし、終にはそれを全く呑み込んでしまふからである。私は時々贅澤な食物に甚く注意する人々を觀察したことがあつた。朝眼が覺めるなりに、先づ今日は何を食はうかと考へて、歷史家のポリビウスの戰鬪の描寫よりも事細かに食事表を調製してゐる人々をしらべてみたことがあつた。私は此等の所謂大人は皆四十歲の子供で、何の元氣も何の活力もない、『地の果實を食ひつくすために生れた』(註三七)人々だといふことを見出した。貪食といふことは、中身のない心の惡習である。貪食家の靈は全然その舌にある。彼はたゞ食べるためにつくられてゐるのだ。極めて愚鈍で無能力な彼は、食卓の彼の席だけしか彼に相應した場所がなく、又料理皿の外には彼が判斷することのできるものがない。彼をして存分此の仕事をやらせておかう。彼がこの仕事をやつてゐるのは、彼にとつても吾々にとつても結構なことだ。

(註三七) Hor., Ep. I.

此の貪食の習慣が、他に何事かの出來る子供にくひ入つて病みつきになりはせぬかといふ心配は氣の小さい人の取越苦勞である。子供の時は、人はその食ふもの丈の事を考へる。青春時代には、そんなものゝことは最早や考へない。どのやうな食物でもよろしい。吾々には別な仕事が澤

山ある。とはいへ、私は、諸君がかゝる下等な慾望を不謹慎に使用しないやうにし、善行をする爲めの名譽をおいしい食物によつてはげますやうなことのないやうにして貰ひたい。だが、子供時代は遊戯と愉快な娯樂の時代であり、且つさうなければならぬのだから、純然たる肉體的運動の褒美に物質的な感覺的なものを與へてはならないといふ理由は私にはわからない。マジョルカの或る子供が樹の頂邊に籠があるのを見て、石投機でそれを落すとする、その時には彼に何か褒美をやるといふこと、おいしい朝食で彼がそれを落すに使つた力を恢復させるといふことは正當ではないか？（註三八）若しスパルタの少年が、笞一百の罰を物ともせずに、巧みに臺所に忍び込んで、生きた狐の兒を盗んで、懐に入れてもち出して、引掻かれたり、嚙みつかれたりして血だらけになり、而かも捕縛されることを恥ぢて、身動きもせず、泣叫びもせずに腹を喰ひ裂かれた時には、彼が此の獲物を吾がものとすること、それが彼を喰つた後で、今度は彼がそれを食ふといふことは正當なことではないか？　おいしい食物は決して褒美としてはならない。だが時々はそれを得るために拂はれた努力の結果となつてならぬ筈があらうか？　エミイルは前に述べたやうに、私が石の上に置いた菓子を、よく走つた爲めの褒美とは見なさない。彼はたゞ此の菓子を得る唯一の方法は他の者よりも早くそこに着くにあるといふことを知つてゐるだけである。

（註三八）マジョルカ人が此の風習を失つたのは古いことであるが、かつては彼等の石投げが有名な時代があつた。

此のことは、私が今し方食事を單純にするといふことについて述べた言葉とは矛盾しない。何故ならば子供の食慾を誘ふためには、彼等の感性を刺戟する必要がない。たゞそれを滿足させてやればよい。而して諸君が彼等の味覺を洗練しようと試みぬ限り、世にも有りふれた品物でそれが滿足されるであらう。生長の必要によつて刺戟される彼等の不斷の食慾、彼等にとつて他の幾

多のものに代る最良の調味料である。果物、牛乳、普通の麵麭よりは稍や上等な菓子、就中かゝるものを控目に食はせる術、これさへあれば一團體の子供をば、强烈な味に對する嗜好をもたせもせず、その食物に倦きさせもせずに世界の涯まで連れて行くことが出來よう。

子供達が肉に對して無頓着だといふこと、彼等が牛乳、菓子、果物のやうな植物性の食物を好むといふことは、肉に對する人間の嗜好が不自然だといふ一つの證據である。わけても此の原始的な趣味を變じないといふこと、子供を肉食者たらしめないといふことは大切である。よしそれが彼等の健康のためではないにせよ、彼等の人格の爲めにさうである。何故ならば、たとひ諸君が如何なる風に次の經驗を說明するにせよ、肉を多量に貪食する人々は一般にさうでない人々よりも殘忍で獰猛だといふ事は確かだからである。此の事實は有らゆる土地、有らゆる時代で觀察される。英國人の殘忍は有名なものである（註三九）。ガウル（註四〇）教徒は反對に全人類中最もやさしい。野蠻人は皆殘忍である。彼等の習慣が彼等にかゝる傾向を取らせたのではない。此の殘忍は彼等の食物から來てゐる。彼等は恰も獵にでも行くやうに戰爭に行く、さうして人間を熊のやうに扱ふ。實際英國では、屠殺者は法廷で證人として受理されることを得ない（註四一）。外科醫も無論同樣である。甚だしい大犯罪者になると血を飲んで殺意を鼓舞する。ホオマアは肉食者のシクロプ達を恐るべき人間に描いてゐる。反對に彼の描いたロトファージュ（ロタス・イータア）達は實に愛すべき人々で、彼と貿易しに行つた人々は皆自分の國を忘却して彼等と一緒に住みたがつた程であつた。

（註三九）私は、英國人が自分達の寛仁を誇つて居り、自國民の親切な性向を自讃して、自らお人好の國民だと云つてゐることはよく知つてゐる。だが彼等だけが聲を濶らしてそれを叫んでも無駄である、他の何人もそれに和する人はないから。

（註四〇）ガウル教徒よりも完全に肉食を禁ずるバニアン教徒は、殆んどガウル教徒と同樣に溫和である、だが彼等の道德がそれ程淸淨でなく彼等の宗教がそれ程合理的でないので、彼等は前者程正直な人間ではない。

（註四一）私の著書の英譯者の一人は私の誤謬を指摘して、その事實を二つとも訂正した。屠殺者や外科醫は法廷で證人に立つことは許されてゐる。だが屠殺者は陪審官として刑事法廷にのぞむことは出來ない。外科醫はそれが出來る。

ブリ　タルクはかう云つた、『君は余にピタゴラスが何故獸の肉を食ふことを禁じたかと尋ねた。だが私は反對に君にかう尋ねる。一番はじめに殺した肉をその口にもつて行つた人、その齒で息をひきとりかけてゐる獸の骨をかんだ人、死者の屍を目の前で料理させて、一瞬間前には鳴いたり、吼えたり、動いたり、見たりしてゐた獸の手足を胃の腑の中へ呑み下した人は、如何に勇氣ある人間であつたらうか？　如何にしてその人の手が生き物の心臟に刀を刺すことが出來たらうか？　如何にして彼の眼は屠殺を見てゐることが出來たか？　如何にして彼が、憐れむべき助けのない動物が血を流され、燒き焦され、手足を切られるのを見てゐることが出來たらうか？　如何にして彼はのたうちまはる肉の姿を見ることが出來たらうか？　如何にしてその肉の香が彼に嘔氣を催させなかつたらうか？　彼がその切口の汚物のしまつをするとき、さうしてそれに蔽さつてゐる黑い凍つた血を洗ふときに、如何にして彼は嫌惡を催さず、嘔氣を起さず、恐怖にとらはれずにゐたであらうかと。

エ　ミ　イ　ル

皮は燒き焦がされて地の上を這ひ廻り、
肉は火をうけて縮みつゝ呻吟けり、
人は身慄ひせずにこれを食ふこと能はず、
彼はその胸の中にてその唸聲を聞く如き心地す。

『人間が初めて自然に背いて此の恐ろしい食事をした時にはかう感じたに違ひない。彼が始めて生物の肉に饑を覺えて、未だ草を食つてゐた野獸を食はうと欲したとき、彼が自分の手を嘗めた羊を殺して、細かく刻んで、料理しなければならぬと考へたときにはかう感じたに違ひない。吾々に驚愕させるのは、かゝる殘忍な饗應を始めた人々であつて、それを止めた人々ではない。而かも此等の原始人達にはそれをするだけの口實があつた。ところが吾々にはその口實がないのである。而してかゝる口實の無いことは吾々の殘忍を幾百倍にするのである。

『原始人はかういふ、「神々の鍾愛をうけたる人間よ、時代を比較せよ。如何に諸君が幸福であり、如何に吾々が不幸であつたかといふことを見よ！　形成したばかりの大地、水蒸氣澤山の空氣は、未だ四季の順序に從つてはゐなかつた、流域の不定な河水が到るところその岸をこはしてゐた。池や湖や底無の沼などが地球表面の四分の一を覆つてゐた。殘餘の四分の一は不毛な林と森で覆はれてゐた。大地は上等な果實を生じなかつた。吾々は農耕の具は何一つもたなかつた、吾々はそれの使用法をさへ知らなかつた。收穫の時期は何一つ播かなかつた人間の許にはやつて來なかつた。それで饑餓といふものは一時も吾々の傍を去らなかつた。冬季には、苔蘚と樹の皮とが吾々の普通の食物であつた。茅草や灌木の靑い根でもあれば、それは吾々にとつて無上の御馳走であつた。人間がぶなの實、胡果（くるみ）、樫の實を見つけたときには、彼等は歡喜の餘り、大地を乳母と呼び母と呼びつゝその樫の樹、ぶなの樹の周圍を粗野な歌の調子に合せて舞踏して廻つた。これが彼等の唯一の饗宴であつた。これが彼等の唯一の娛樂であつた。人生の他の全ては悲愁と苦痛と貧困とであつた。

「遂に、剝ぎ盡されて赤裸になつた大地が吾々に何一つ與へなくなつたときに、吾々は自己の

保存のために自然に背かなければならなくされて、吾々の不幸の伴侶とともに死滅するよりも彼等を食ふといふ手段を取つた。だが諸君、殘忍なる人間よ、諸君には血を流すことを强ひるものがないではないか！　如何に豐富な品々が諸君を取卷いてゐるかよく見よ！　大地は諸君に如何に多くの果實を與へてゐることぞ、田畑や葡萄園は如何に豐富な收穫を諸君に與へてゐることぞ！　動物は諸君を養ふにその乳を與へ、諸君の衣服とするにその毛を與へてゐるではないか！　諸君はそれ以上に何物を欲するのであるか？　既に食ふことの出來、飲むことの出來るものが必要以上にありながら、諸君は如何なる狂氣にかられてかゝる屠殺を行ふのであるか？　何故に諸君は、吾々の母なる大地に向つて、諸君に食を與へないと責めるのであるか？　何故に諸君は神聖な法律の發明者たるセレス、人間の慰藉者たるバッカスに對して罪を犯すか？　彼等の夥だしい賜物が人類保存のために十分ではなかつたとでもいふのか？　どうして諸君の心は彼等の與へる甘美な果實を諸君の卓子の上の骨と混へて食ふことができるのか？　乳とそれを與へる動物の血とを一緒に食ふことができるのか？　諸君が猛獸とよぶ豹や獅子はその自然の本能に餘儀なく從つて、自ら生きんが爲めに他の動物を殺すのである。だが、彼等よりも百倍も兇猛な諸君は、何の必要もないのに、その本能に反して、最も殘忍な快樂にふけるのだ。諸君の食ふ動物は、他の動物を食ふ動物ではない。諸君は彼の肉食獸は食はない。諸君は彼等を模倣してゐるのだ。諸君の望むのは、何人にも害を爲さぬ、諸君に馴染み、諸君の用を足し、而かもその勤勞の褒美として食ひ盡されるといふ無邪氣な柔順な動物だけである。

「あゝ自然にそむく殺人者よ！　若し汝が、自然が汝を汝自身の同胞を食ふやうに、汝自身の如く感じ汝自身の如く生きてゐる肉と骨とをもつた生物を食ふやうに造つたといふ主張を固執するならば、然らば、かゝる物凄まじき食事に對して自然が汝に感じさせる恐怖をば無くしてみよ。汝自身、即ち汝自身の手で、小刀を持たず、鐵の道具をもたずに動物を殺してみよ。獅子や熊のするやうに汝自身の爪でそれを引裂いてみよ。この牡牛を殺してこれを片々に引裂いてみよ。その皮に汝の爪を突き込んでみよ。此の小羊を生きたまゝで食つてみよ。未だ溫い肉を食ひ、その魂をその血と共に飲んでみよ。汝は身慄ひしてゐる！　汝は生きた肉が汝の齒の下でうごめくのを感ずることさへ敢へて出來ない！　淺ましき人間よ！　汝は先づ動物を殺す、それからそれを食ふ。いはゞその動物を二度殺すものである。それでもまだ足りない。死んだ肉は汝に嫌惡を與へる。汝の腹にはそれを受けつけない。火でそれを變形し、それを煮、炙り、調味料でそれに衣をかけて味をつけなければならない。汝は屠者、調理者、燒串廻し人のやうな汝に屠殺の恐怖をなくさせる人々、死肉に衣をかける人々が必要なのだ。かくて後味覺はかゝる調理に欺かれて、異樣なものを味ひ、目で見るだけでさへ氣持ちの惡くなるやうな屍肉を喜んで貪り食ふのだ。」』

此の引用文は私の題目には見當ちがひであるが、私はどうしても、此處にこれを轉載せざるを得なかつた。私は、讀者がこれを諒とされることを信ずる。

要するに諸君が如何なる種類の食物を諸君の子供に與へるにせよ、彼等をたゞ普通な單純な食物にだけ慣らしておきさへすれば、彼等の好きなだけ食はせ、走らせ、遊ばせておくがいゝ。かくして置けば彼等が餘り多く食ひ過ぎることもせず、不消化にもかゝらないといふことを確信して可い。だが若し諸君が彼等をその時間の半分だけ空腹にさせて置くならば、彼等が諸君の監視の眼を盜む手段を見出す度に、全力をあげて埋合せをするであらう。彼等は咽喉に一杯になるまで、氣持の惡くなるまで食ふであらう。吾々の食慾の過度なのは、吾々がそれに自然の規則以外

の規則を與へようと欲するからである。吾々は始終調制したり、一定したり、增加したり、減却したりして手に秤をもたずには夜も日も明けない、だが此の秤は吾々の移氣を標準にした秤であつて、吾々の胃を標準にしたものではない。私は何時も例の實例に歸る。百姓の家では、食物棚と果物棚とは何時も開けつ放しになつてゐる。而かも子供達は、大人達と同樣不消化とはどんなものであるか知らない。

とはいへ、子供が餘り多く食ひ過ぎるといふことがあつたならば、そんなことは私の方法によつては萬あるまいと私は考へるが、彼の大好きな遊戯によつて、甚だ容易に彼の氣を轉じさせることが出來る。かうして諸君は彼に意識させずに空腹ならしめることが出來るであらう。かゝる確實な容易な武器が教師の眼につかないといふことは如何いふ譯であらうか？ ヘロドタス（註四二）によれば、リディア人は始終甚しい食物不足に惱まされてゐるので、種々の遊戯その他の娯樂を發明して、それによつて饑餓の感じを紛らせて、食事することを考へずに終日送ることを工夫したといふ（註四三）。諸君の博學な教師達はこの章を百回も讀んだかも知れないが、それが子供に適用できるといふことには全く氣がつかなかつたのであらう。此等の教師の中には、私に向つてかう言ふ人があるかも知れない。如何なる子供でも自分から進んで學課を勉强する爲めに食卓を離れるものはないと。先生よ、あなたの言は尤もである。——私はあなたのいふやうな遊びのことを考へてゐなかつた。

（註四二） Liv. I, chap. XCIV.

（註四三） 古代の歴史家には、吾々の利用し得べき意見が甚だ多い、その意見の基礎になつてゐる事實には嘘のものがあつてもである。だが吾々は、歴史を眞に利用する術を知らない。博學なる批評だけが吾々の心をすつかり奪つてしまつた。吾々

がそれから有益な教訓をひき出すことが出來さへすれば、或る事實の眞僞といふことが最も重要であるかのやうに。賢明な人々は歴史をば寓話の織物であり、その教訓が人間の心に極めてよく適應してゐるものだと見做すに相違ない。

嗅覺の味覺に對する關係は、視覺の觸覺に對すると同じである。嗅覺は味覺の前に立つて、後者に對して、ある物質がこれ〳〵の作用をするぞといふことを豫告する。さうして豫めそれから受ける印象によつて味覺にその物質を求めさせ又は避けさせるやうにさせる。私は、野蠻人が吾吾のとは全然違ふ嗅覺をもつてゐて、彼等の美い匂ひと惡い臭ひとの判斷が吾々の判斷とは全く別であるといふことを聞いた。私個人としては、此の話を信じたい。物の臭ひそのものは輕微な感覺である。それは感官よりも寧ろ想像を動かす。而かもその現に傳へるものよりも、それが期待させるものによつて動かすのである。さう假定すると、或る人の味覺が、生活樣式の相異によつて、他の人の味覺とは甚だしく相違してゐるので、彼等をして風味に關して全然相反對な判斷を下させ、從つてかゝる風味を豫告する臭ひに關しても相反する判斷を下させるに相違ない。それで、韃靼人は、吾が國の狩獵家の一人が半ば腐敗した雉を嗅ぐときと同樣な愉快な氣持で死馬の腐敗した肉を嗅ぐに違ひない。

吾々の怠惰な感覺、たとへば花壇の花から漂つて來た香ひのやうなものは、庭の散歩を好むやうな暇のない程に多く歩き廻る人々や、休息に愉快を感ずる程十分に働かない人々には無感覺であるに違ひない。常に饑ゑてゐる人々は、食物の來ることを豫告するのでない香ひには何等愉快の情を感じないであらう。

嗅覺は想像の感覺である。神經に可成强い刺戟を與へるので、大に頭腦に影響を與へるに違ひない。そのためにそれは一時は吾々の元氣を快活にさせるが、長く經つと疲勞を生じさせるのだ。

これの戀愛の場合與へる影響は周知のことである。化粧室の甘い香は吾々の考へる程輕視すべき係諦ではない。私は、その愛人の胸に帶びてゐる花の香によつて心を躍らせない程賢明な、無感覺な人物に對しては、祝福して然るべきか非難して然るべきかを知らない。

此の故に、嗅覺は子供時代には強く活動する筈がない。此の時代には、未だ殆んど感情によつて刺戟されてゐない想像力は、殆んど情緒に動かされることが出來ず、又、吾々には未だ一つの感覺によつて豫め他の感覺の約束するものを豫見するだけの經驗がないからである。このことは觀察によつて完全に證明される。大多數の子供にあつては、此の感覺は未だ非常に鈍ぶくて殆んど無感覺かと思はれることは確かである。それは、彼等の感覺が大人のそれよりも鋭敏でないといふ譯ではない。ことによると大人のそれよりも鋭敏かも知れないのだが、それに附加する觀念がないので、彼等はその爲めに容易に愉快或は苦痛といふ感情に影響されず、吾々のやうに、そのために、喜んだり氣持を惡くしたりすることがないのである。私は、この理論から出ないで、又兩性の比較解剖學に頼ることもせずに、何故に婦人が一般に男子よりも活潑に物の臭ひに影響されるかといふ理由が容易に見出されるであらうと考へる。

カナダの野蠻人達は、早い子供の時代からその嗅覺を飽くまで微妙なものに練磨して、犬を飼つてゐるにも係らず、狩獵に犬を使ふことをしないで、自分自身が犬の代りをするのであるといふ。實際、私は、若し子供を丁度犬が獲物を嗅ぐのと同じやうにその食事を嗅ぎつけるやうに育てたならば、恐らく彼等の嗅覺を同一の點まで完成させ得たことであらうと考へる。だが私には、子供に嗅覺と味覺との間の關係を知らせるため以外には、此の感覺から子供が引出す何等か極めて大きな利益といふものがない樣に思はれる。自然は、吾々がぜひとも此の關係を知らねばならぬやうに配慮した。自然は後者の作用を前者のそれから引離し難いものにした。即ちその器官を隣り合はせ、口の中に此の二つの間の直接の通路を設け、かくして何物にまれ嗅がずには味ふことの出來ないやうにしたのである。私はたゞ、諸君が此の自然的關係を變更して子供を欺くやうなことのないやうにして欲しいと思ふ。例へば藥を飲みよくするために薫薔の香を被せるやうな類である。何故ならばこれを濫用すべく此の二感覺の不調和は、餘りに大きなものであり、より強い感覺の方が他の一方の效果を吸收してしまふからである。彼はその爲めに別に幾分でも飲み好いと思つて藥を飲みはしない。此の不愉快さは同時に經驗される有らゆる感覺に及ぶ。そこで最も輕微な感覺が他の感覺を彼の想像に呼び起させ、極めて愉快な芳香が彼にとつては嫌惡すべき臭ひに外ならなくなる。かくて吾々の淺はかな用心は、愉快な感覺を犧牲にして不愉快な感覺の總體を增加するに過ぎない。

次の數篇に於いて、私は更に一種の第六感即ち常識といふものゝ養成について語らなければならない。それはこの感覺が凡ての人間に共通だからといふよりも、寧ろそれが他の感官を正しく調整して驅使した結果として生ずるものであり、吾々に事物の外觀の總合によつてその本性を敎へるものだからである。從つて、此の第六感は何等特別な器官をもたない。それはたゞ腦髓中に住まつてゐる。この純然たる內的な感覺は統覺又は觀念と呼ばれる。此等の觀念の數が、吾々の知識の廣さの尺度である。精神の明確といふことは此等の觀念の明晰と精確によつて得られる。人間の理性と呼ばれるものは、此等の觀念を互ひに比較する術をさす。かやうなわけで、私が感覺的理性乃至子供の理性と呼ぶものは、多數の感覺の結合によつて單純な觀念を構成することである。私が人間の理性若しくは知的理性と呼ぶものは、幾多の單純な觀念の結合によつて複雜な

エミイル

觀念を構成することに外ならない。

そこで私の方法が自然のそれであり、又私がその方法の適用に於いて誤つてゐないものと假定すると、吾々は吾々の生徒を、感覺の國を通り過ぎて、子供の推理の國境まで連れて來たわけだ。此の國境を越えて吾々が進まうとする第一歩は、大人の一歩でなければならない。だが此の新しい分野に足を進めるに先立つて、一時吾々が今迄辿り來つた道に眼を轉じてみよう。人生の有らゆる時代、有らゆる狀態はそれに固有な完全があり、それに特有の成熟がある。吾々は度々、成人といふ言葉の口にされるのを聞いた、だが吾々は成童といふことを考へることにしよう。これは吾々にとつて極めて新しい經驗であり、恐らく左まで愉快でなくもないであらう。

限りある人生は極めて貧弱な、極めて狹いものであるから、吾々が存在するものを見るに過ぎないときには、少しも感動させられない。現實の事物を飾るものは幻想である。若し想像が吾々の感官に觸れるものに魅力を加へないならば、吾々がそれに對して感ずる貧弱な快感は唯その感官だけに限られてゐて、心は依然冷い儘でゐる。大地は秋の寶に飾られるとき、眼を驚かす豐富な色彩を見せる。だが此の驚嘆は全く吾々を感動させない。これは感情よりは寧ろ思索から來る。春には、野は殆んど赤裸々で、まだ何物にも蔽はれてゐない、森にはまだ樹影がなく、草とてまだ芽ぐんだばかりである。而かも人の心はこれを見て感動する。かくして自然が再生するのを見るとき、吾々は吾々自身の生命の復活を感ずる。愉快の影像が吾々を取卷く。あの快樂の伴侶、あの快よい涙、何時でも氣持のよい感情に會ふ度に出て來る快よい涙は、いつのまにか吾々の眼蓋に慄へてゐる。だが葡萄收穫期の光景は如何に活氣があつて、生き生きして、愉快であつても無歇である。吾々は何時でもそれを乾いた眼でのみ見る。

第二篇

何故にかういふ差違があるか？　それは、春の光景には想像から續いて來るべき四季の光景を加へるからだ。眼に見える優しい草の芽生に對して、想像力は、花、果實、葉蔭、時としては葉蔭に蔽はれてゐるかも知れぬ神祕をさへ附け加へるからだ。それは、相續いて來るべき幾時期をたゞの一瞬間に結合させ、事物をさうなるであらう通りには見ずに、寧ろ想像がさうなることを望むやうに見る。何故ならばそれを選擇するのは想像の自由だからである。反對に、秋の場合には、吾々は現在あるものだけより見ない。若し吾々が春まで想像を投げようとすれば、冬が邪魔になる。想像は氷りついて雪と霜との間に消えてしまふ。

吾々が、成年時代の完全よりも子供時代の美を見るのを好ませる魅力の源もこのやうなものである。一體、人間を見て眞實歡喜を覺えるのは何時であらうか？　それは彼の行爲の追憶が吾々に彼の生涯を振り顧らせ、かくしていはゞ吾々の眼に、彼を若返らせるやうな時である。若し吾々が人間をその現在あるが儘に考へるか、或はその老年時代に何うなるべきかといふことを如實に想像しなければならぬものとせば、衰頽して行く自然の觀念が吾々の有らゆる愉快を掻き消してしまふ。人間が墓場に急いで行く姿には何の愉快もない。死の影は萬物をいやなものにする。

けれども私が、健康で、强壯で年齡の割によく發育した十歲乃至は十二歲の子供を考へると、現在に就ても將來に就ても唯だ愉快な感じのみが生ずる。私は彼が燃えたつやうで、きびきびしてゐて活氣に充ち、ひどい心配や長く痛ましい取越苦勞も知らず、現在の狀態に夢中になり、はちきれるやうな生命の充實を樂しんでゐるのを見るのである。私は彼が後年になつて、日に日に發育してゆく精神力、感覺を練磨し、刻々にその新しい兆候を示してゆく日を豫見する。私は子供を見るとうれしくなる。彼が成人した時を想像すると益々うれしくなる。彼の燃ゆる血潮は私

の血潮を熱するやうに思はれる。彼の生活を生活してゐるやうな氣がする。そして彼の元氣が私を若返らせるやうに思ふ。

時が鳴ると、何たる變化だらう。忽ちに彼の眼は鈍くなり、彼の元氣は消え失せる。歡喜も、陽氣な遊戯もおさらばである。嚴めしい、氣むづかしい人が彼の手を執つて嚴かに言ふ、『さあお出でなさい』と、そして彼を連れて行く。彼等が這入つた部屋の中に、私には書籍が見える。書籍！　彼れぐらゐの年頃の子供に何たる陰氣な道具だらう。憐れな子供は連れられてゆきながら自分の周圍の總ての事柄を怨めしげに眺めて、默つて出發してゆく。が彼の眼は散らすすべなき涙で脹れ、彼の心臓はなすすべなき嘆息で一杯になつてゐる。

エミイル

斯くの如き恐るべきものを全く知らない汝、生涯の如何なる時期でも苦しみと倦怠の時間ではない汝、來る日を心配なく迎へ又焦慮することなく夜を迎へる汝、快樂のみに依つて時間を數へる汝よ、吾が幸福なる生徒よ、來たれ、そして此の不幸な子供の別れに汝が顏を出して吾々を慰めてくれ。來たれ！……、彼はやつて來た。私は彼が近寄つて來ると喜しさに身慄ひするのを覺えたが彼もそれを共にしたのを私は知つた。彼に逢ひにゆくのは彼の友人、彼の知己である、彼の遊び仲間である。彼が私を見た時に間もなく遊ぶのだといふことをよく知つてゐた。吾々は相互に依頼してゐるのではないが何時でも仲が好い。吾々は誰とよりも二人で一緒にゐる時ほど幸福なことはないのである。

彼の姿、風采、顏色は確信と滿足とを現はしてゐる。彼の顏には健康が輝き、彼の確かりした足どりには力があふれ、彼の顏色はまだ纖弱ではあるが病的ではなく、そして女々しい處は更にない。太陽と風とは已に彼の顏に男らしい名譽の印を刻みつけてゐる。筋肉はまだ圓々してゐる

か、日に日に發達しつゝある相貌の特徴を示し、眼は未だ感情の閃きに燃えてはゐないが、少くもその生來の清澄さをすつかり持つてゐる(註四四)。それは長い間の悲しみの爲めに曇つてはゐない。またその頬は絶え間ない涙の爲めに皺が寄つてはゐない。彼の敏捷でしかも沈着な動作の中に、彼の年齢相應な元氣と獨立の確信と反覆練習の經驗とがあるのを看よ。彼の態度は自由で開放的だが、傲慢や虚榮の跡はない。書籍の上へおしつけられたことの無い頭は腹の上へ垂れてはゐない。頭を上げなさいと彼に言ふ必要はない。彼は恥しがつたり恐れたりして頭を下げてはゐないのだ。

第二信

(註四四)　生來のといふ言葉はイタリイ語の Natia の意味でフランス語には同意語がない。若し私の用語が間違つてゐても讀者が私の意味を解してくれゝばそれでよい。

彼を會合の中へ入れて見よう。そして諸君、彼を吟味して見たまへ、遠慮なく彼に質問して見たまへ。彼が煩るさくせがんだり、べら〳〵喋つたり、或は無分別な質問を發したりすることを心配するには及ばない。彼が諸君を全く獨占して、諸君が彼にばかり構つてゐることを彼が要求して、諸君が彼から手をはなすことが出來まいなどといふことを惧れる必要はない。

また諸君は彼から世辭を求めてはならない。彼は私が言へと教へたことを諸君に話すのでもない。誇張も飾りけも見得もない簡單率直な眞理の外は之れを彼に求めてはならない。彼は自分の言葉が諸君に何ういふ影響を與へるかといふことを少しも考へずに、自分の行ひ又考へた惡いことでも良い事と同じやうに、ざつくばらんに諸君に話すであらう。彼が使用する言語は始めて言葉ができた時の凡ゆる單純さをもつてゐるであらう。

吾々は子供の將來に大した期待をかけるのが好きである。そして偶然に彼の唇を洩れた或る氣

の利いた言葉を基として築きあげた希望を大抵の場合に覆へして了ふ幾多の愚かな事柄を見て、吾々は殘念に思ふのである。私の生徒はかういふ希望を私に抱かせるやうな事が滅多にない代り、彼は決して私を殘念がらせるやうなことがないであらう。といふのは彼は一言も無用の言葉を發しない、そして誰も聞いてゐる者がないのにべちやくくと喋つて自分が草疲れるやうな事はしないからである。彼の觀念は拙い代りに正確であり、彼は暗誦して何物をも覺えない代りに經驗に依つて澤山の事柄を知つてゐる。彼は吾々の本を讀むのは他の子供より下手であつても、自然の本を讀むことは遙かに上手である。彼の思想は舌にはなくて頭に在る。彼は記憶力よりも判斷力がすぐれてゐる。彼は一の國語しか話すことは出來ないが自分の話してゐる事柄は理解してゐる。彼の言葉は他の子供ほど立派でない代り、彼の行爲は彼等より立派である。

彼は常規とか習性とか慣例とかいふことの意味を知らない。彼が昨日行つたことは今日行ふ事に全く影響しない(註四五)。彼は規則にも權威にも手本にも從はない。彼は彼にふさはしいことを行ひ且つ話すに過ぎない。そこで人からいひつかつた話や念の入つた態度を彼に求めてはならない。彼の思想の正直な表現及び彼の嗜好から出る行動を求むべきである。

(註四五) 習慣の魅力は人間の自然的怠惰に起因してゐる。そして此の怠惰に就ると益々それは增大して行く。吾々が既に行つたことを行ふのはより容易なことであつて、造作なく隨いて行ける平坦な道があるのである。そこで習慣の力は老年者と怠け者には甚だ強くて、青年と活動的な人にはそれが甚だ弱いといふことが解る。習慣の支配は精神の薄弱なものに適するに過ぎない。そしてそれは彼等の精神を益々薄弱ならしめるのである。子供に必要な唯一の習慣は骨惜みせずに必要に應ずることを慣らすことであり又大人に必要な唯一の習慣は理性の法則に骨を折らずに從ふやうになることである。之れ以外の凡ゆる習慣は惡德である。

諸君は彼が自分の現在の狀態については僅少な道德的觀念しか有たず、又大人に就ては何の道

德的觀念も持たぬことを發見するだらう。彼は未だ社會の現役の成員とはなつてゐないのにこれを有つてゐても彼に取つて何の役に立つであらう? 彼に自由とか財產とか或は契約とかについて言つて聞かせれば、それだけは彼に理解出來るであらう。彼は何故彼の物が自分のものであるかといふこと及び他人の物が自分のものでないといふことを知つてゐる。がそれだけしか知らない。彼に義務とか服從とかいふことを言つて聞かせれば、彼は諸君が何を話してゐるのかわからないだらう。彼に何事をか行ふことを命じても彼は全く注意を拂はないだらう。が彼に向つて、若し君が僕にこれを爲てくれゝば、いつかその御禮をすると言へば、彼は急いで諸君に滿足を與へるであらう。蓋し彼は自己の領域を擴張し、諸君に對して、それを侵すことのできないことを知つてゐる權利を得る以上のことを求めないからである。彼は自己が相當の位置を得ることや一人前になること、多少重んぜられることは嫌ではないかも知れぬが、彼が此の後の動機を抱くやうになつてくれれば、彼は已に自然の領域を踏み出したのであつて、諸君は前もつて凡ての虛榮の門を閉ざすことが出來なかつたのである。

彼自身の側から言へば、彼が若し援助を必要とすれば、彼は自分に出會ふ最初の人に何等顧慮するところなく賴むであらう。彼は自分の召使ひに對するのと同じやうにぶつきらぼうに國王にもそれを賴むであらう。彼の眼中にはまだ萬人は平等である。彼の賴み方に依つて諸君は彼が諸君に對して義務の履行を求めてゐるのではない事、彼は諸君に好意を求めてあるのであるといふことを知るであらう。彼はまた人情が諸君を動かして此の好意を與へさせるといふことも知つてゐる。彼の言葉は尠く簡單である。彼の聲、彼の眼つき、彼の身振りは、承諾にも拒絕にも慣れてゐて、奴隸のやうにぐづくした卑屈な屈從でもなければ、主人のやうな命令的口調でもな

い。それに同胞に對する謙讓な信賴である。それは自由ではあるが強くて親切な人の援助を乞ふところの、自由ではあるが敏感でか弱い人間の、高貴な、眞情溢るゝ溫和さである。若し諸君が彼の乞ひを容れるならば、彼は諸君にお禮は言はないが、負債をしたと感ずるであらう。若し諸君が拒んでも彼は不平も言はなければせがみもしないだらう。蓋し彼はそれの無用であるといふことを知つてゐるからである。彼は彼等は自分を援助することを拒絕したとは考へないであらう、『援助させることができなかつた』と考へるであらう。蓋し旣に私が言つたやうに、吾々は十分に認めた必然には反抗することがないからである。

彼をひとり自由にしておいて默つて彼の行動を注目せよ、彼が何を爲ようとするか、如何にしてそれに着手するかを看よ。彼は、自分の自由だといふことを自身に確信させる必要がないので、決して何事をも無考へにはしない。單に自分でやれるからやるといふやうなことはないであらう。彼は何時でも自分の行爲の主人であるといふことを知つてゐないであらうか？　彼は敏捷で輕快で油斷がない。彼の動作は年頃に相應しく甚だ活潑である。しかし諸君は一つでも目的のない事柄を彼は爲ないのを見るだらう。彼が何事を行はんとするにしても、決して自分の力量以上の事柄を行はないであらう。蓋し彼は十分に已にそれを經驗して知つてゐるからである。彼が採用する手段は常に彼の目的に適してゐるだらう。而して成功する見込のない事柄は殆んど行はぬであらう。彼の眼は銳敏で確かである。彼は自分の見た事柄を何でもかでも他人の處へ行つて尋ねるほど愚かではないであらう。彼は自分自身で調べて見るであらう。そして他人に尋ねる以前に彼は自分の知らうと思つた事柄を發見する爲めに全力を盡すであらう。若し彼が思ひ掛けない難關に遭遇しても、他人ほどには狼狽しないであらう。また危險があるとしても、他人よりは恐れな

いであらう。彼の想像力はまだ眠つてゐてそれを目覺ますやうなことはされてゐないから、彼は現在ある事柄のみを見て、危險を本當に危險であるだけの程度で測定し、決してその平靜を失はぬであらう。彼は幾度か必然といふものゝ壓力を感じてゐるから、それに反抗はしない。彼は生まれた時からその束縛を感じてゐる、そして全くそれに慣れてゐる。彼は何事が起つても何時でも用意が出來てゐる。

遊ぶのも働くのも彼にとつては何れも同じである。遊戲は彼の仕事である。彼はその間に何等の差別を認めない。何事をするにも彼は彼を笑はせる興味と彼を喜ばせる自由とを見出す。そして彼は彼の精神の機轉と知識の範圍とを示すのである。輝かしい愉快な眼を持ち、滿足した、屈托のない姿をし、無邪氣な笑ひ顏をして、最も重要な事柄を遊戲とし、最もつまらない娛樂に魂を打ちこんでゐる美しい子供を見るほど愉快で文人を魅するものが他にあらうか？

諸君は現在彼を比較して判斷したいと希望するか？　それならば他の子供の中へ彼を入れて彼を放任して置けばよい。諸君は間もなく何方がよくできてゐるか、何方が少年として完成に近づいてゐるかといふことが解るだらう。凡ゆる町の子供の中で彼よりも巧者で彼よりも强いものはない。百姓の子供の間では彼は力は彼等と同じで技術は優れてゐる。子供に解る範圍内の事ならば彼は他の子供以上に判斷し、推理し、豫想するのである。仕事や競走や跳ねることや物體を動かすことや、物を持ち上げる事、距離の測定、遊戲の發明、懸賞の獲得に於いても、まるで自然が彼と調子を合はせてゐると思はれる程彼は凡ての物を意のまゝにすることができるのだ。彼にとつては才能と經驗とが法律と權威との代りになつてゐる。どんな着物や名前を諸君が彼に與へてもそれは殆んど關係がない、彼は到る處で優れて到る處で他の子供等の首領となるであらう。

他の子供は何時でも彼の優越を感ずるであらう。彼は自分では知らずして支配者となり、他の子供等は自分で知らずして彼に服從するであらう。

彼は少年時代の完成期に達したのである。彼は子供としての生活を送つて來た。彼はその幸福を犧牲にして此の完成を得たのではない。反對にそれは相互に補助しあつたのである。子供に相應はしい凡ゆる理性を得ると共に、彼は子供の體質の許す限り自由で幸福であつた。若し運命の手が彼を刈り切つて吾々の希望を奪つても、吾々は彼の生きてゐた時の不幸と死んだことを同時に嘆く必要はない。若くは吾々が彼に苦痛を與へたといふことを回想するといふことで悲しみを加へる必要もない。吾々は言ふ。少くとも彼の少年時代は幸福であつた、吾々は自然が彼に與へた事柄を一物も彼から奪はなかつたと。

此の初等教育の大なる不便は、彼の價値を理解するものは賢者ばかりであつて、俗物の眼には斯くの如く注意深く教育した子供はいたづら小僧としか映らないといふ點に在る。教育者は生徒の利益よりも自分自身の利益を考へる。彼は時間を空費してゐないといふこと、彼に仕拂はれる金錢を立派に稼いでとつてゐるのであるといふ事を證據立てようとする。そこで彼は手つとり早く見せることの出來る學藝を子供に教へる。自由に見せびらかすことの出來る事柄を教へる。造作なく見せることが出來さへすれば其れが有益であるか何うかは問ふ處ではない。選擇もせず識別もしないで彼は子供に瓦落多物を詰め込んで置く。そして子供を試驗する時が來れば、教師はその品物を取り出して見せる、それをみる人々はそれに滿足する、そこで彼はその包を結んでさつさと自分の路を歩いて行く。私の生徒は貧しいから御目に掛ける包を持つてゐない。彼は自分より外に見せるべきものを持つてゐない。大人でも子供でも一目見たのでは解らない。私の生徒

の特質を直に看取する觀察者が何處に居るか？　かういふ人々は居るにはゐるが稀である。千人の父親に一人あるか何うか疑はしい。

餘り多くの質問は吾々の多數にとつて煩はしくうるさい。殊に子供にとつてさうである理由がある。數分間にして子供等の注意力は鈍くなる。彼等は限りのない質問を聞かないで出鱈目に答へる。斯くの如き試驗方法は衒學的で且つ無益である。いゝ加減に言つた言葉が澤山なお饒舌よりは子供等の感覺と知慧とを示すことが屢々ある。けれども回答は偶然に口から出たのでもなく暗記してゐたのでもないといふことを記憶しなければならない。子供の判斷力を測定する爲めには、吾々は十分な判斷力を有してゐなければならない。

私は故ハイド卿がその友人の一人に就いて左の如き話をしたといふ事を聞いた。その人は三年間家に居なかつた後でイタリイから歸つて來た。そして九歳か十歳になる子供の進歩を試驗したいと熱望した。ある夕同氏は學童が凧を揚げてゐる平坦な廣場を横切つて、子供と家庭教師とを散歩に連れて行つた。歩み乍ら父親は子供に云つた。此處に影の映つてゐる凧は何處に在るか？　すると躊躇する色もなく又空も見ないで國道の上にあると子供は答へた。而してハイド卿は言ひ添へた、實際、吾々と太陽の間には國道が在つたと。右の言葉を聞いて父親は子供に接吻して、もう試驗するのはやめて、その儘默つて行つてしまつた。その翌日同氏は家庭教師に對して月給の外に終身年金を與へる事をきめた證書を與へた。

此の父親は何たるえらい人物であつたらう。そして彼は何といふ有望な子供を惠まれたことであらう？（註四六）此の質問は正に子供に相應してゐる。そして回答は極めて簡單である。しかしながらこの回答に含まれてゐる子供の判斷が如何に正確なるかを見るがいゝ。如何なる騎手も手

8201

馴らすことが出來なかつた有名な駿馬を、アリストテレスの弟子（アレキサンドル大王を指す）が馴らしたのは正にこの調子であつたのだ。

（註四六）ルソオが一七六二年九月二十六日附けでラツウル・ドウ・フランクヴィル夫人に宛てた手紙によつて、この若者はベル・イール元帥の一人息子のジゾオル伯であつたことがわかる。この人は實際その當時から甚だ有望視されてゐた。この人のことは本書の第五篇にまでて來る。（編者）

昭和四年十月廿日　印刷
昭和四年十月廿五日　第一刷發行
昭和廿二年十月廿日　印刷
昭和廿二年十月廿五日　第十五刷發行

エミイル　第二篇
定價　貳拾八圓

著者　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地　平林初之輔
發行者　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地　岩波雄二郎
印刷者　東京都新宿區市谷加賀町一丁目十二番地　小坂孟

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　岩波書店　會員番號A一〇九〇〇四號
配給元　東京都千代田區神田淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

大日本印刷・永井製本

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。昔ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと謗稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の肇に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

371
R761
(2)
火

終